

# 国民的大物女優観察記 録

これこん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

国民的大物女優（による）観察記録

女子にモテたくて本気出した馬鹿が原作に絡んだり絡まなかったりです。

# 目次

第八話	216
第七話	188
第六話	167
第五話	123
第四話	94
第三話	59
第二話	27
第一話	1



## 第一話

1

モテたい。

俺は同じベンチの左隣に座っているおじさんの方を向いてそう言った。

モテたい、男ならば誰でもそう考える…と思う。思うというのは、周りの同級生達の中にはそんなことを言っている人があんまりいないからだ。

誰が誰を好きだとか、バレンタインにチョコを貰ったとか、相合傘をしているのを見ただとか。そういう話はよくされているが、「俺は女の子にモテたい」と表立って言っている人は殆どいない。

恥ずかしいからなのか、それともまだ思っていないのか。本当のところはよく分からない。

だが少なくとも、俺の通っている小学校ではそうだ。

しかし、漫画やアニメを見てみると「モテたい」と発言しているキャラは結構いるし、

歳上の従兄弟のお兄ちゃん達も言っていた。一昨日見たバラエティ番組でも芸人さんは「学生時代は女の子のことばかり考えていました」と言っていた。

だから、俺もそう思った。

男ってそう考えるのが普通なのだ。実のところ、言っている自分でもどんな感覚なのかはあまりよく分かっていない。ふわっとしたイメージがあるのみだ。

「そうか……君もついに男というものが何なのか『理解って』きたね」

腕を組みながらこちらに笑いかける人は『ゲームの神』を自称する、最近仲良くなったおじさんだ。俺も上画面が映らなくなったDSを修理してもらった。割れ厨をこの世から撲滅するのが夢らしい。

俺たちが学校へと登校する朝七時半ごろから公園のベンチに座り、そのまま午後六時過ぎまでずっとスーツ姿でノートパソコンを打っている。

以前結婚指輪を落としてしまった時に探すのを手伝い、その時仲良くなった。

何でも務めていた会社の社長が突然夜逃げしたらしく、そのまま無職に。二人目を妊娠したばかりの奥さんになかなか言い出すこともできず、ここ一ヶ月ほど出勤している態で過ごしているらしい。

ちなみに彼は再就職せずにマイチューブという動画配信サイトで一発当てるつもり

なのだとか。「これからはマイチューブの時代だ。ビッグウェーブに乗るしかない」とは彼の言葉である。

おじさんもモテたいと思ったことはあるのだろうか。

「ああ勿論だとも。男だからね。君は何故そう思ったんだい？」

へえ、やっぱり男ならみんな思うことなのか。おじさんは真面目で優しそうな顔をしているが、体格が良い。なんというか、肩幅が広くてがっちりしているのだ。

今はけっこう太っていて何だか可愛いが、もしかして昔はバリバリのスポーツマンでモテたりしていたのだろうか。そんな想像が膨らむ。

なぜそう思ったか。そう聞かれると返答に困る。

本当に何となくそう思っただけなのだが、強いて言うならば母さんが最近よく見ているドラマの「バラ恋」の主演の俳優さんだろうか。

「ああ…彼イケメンだもんね。ありやモテる」

バラ恋。略さずに言う『バラの咲く日に君と恋する』。

最近深夜にやっている恋愛ドラマだ。詳しい数字は知らないが奥様方の熱烈な支持で視聴率が凄いらしい。

うちの母親も例に漏れず、毎週火曜日になるとポテチとコーラを側に置いて見入っている。

昨日俺も一緒に見たのだが、画面の向こうの男に頬を赤らめながら号泣していた母さんになって言えば良いのか分からなくなった。

ちなみに内容は略奪不倫モノである。自分の奥さんが不倫ドラマを見て頬を赤らめているなど、父さんの精神ダメージは凄そうだ。

家族に隠しているが最近血尿が出たのを俺は知っている。

昨日の放送ではネオンがキラキラ光る大きなお風呂のある部屋で主人公と女のひとが抱き合っていたが、俺は純粋な小学三年生なので何が行われていたかは勿論分からない。

母さんに聞いてみたら「パパに聞きな」と言われ、父さんに聞いてみたら「お母さんに聞きなさい」と言われた。

「人生の先輩として。君に僕がモテる方法を教えてあげよう。ズバリ、勉強とスポーツを頑張るんだ。あと面白いことを言う」

突拍子もない答えが返ってこないことは予想していたが、やはり普通だった。

担任の先生も同じことを言っていた。

「あ、『なんか普通だな』って思ってるでしょ。まあそうなんだけどね」



そう言うと、おじさんはスーツの懐から煙草と金属製のライターを取り出すと、片手でくるくると器用にライターを操り煙草に火をつけようとす。洋画でよくやつてる煙草の付け方だ。

が、目の前に小学生がいることに気が付き、火をつけることなく全てしまう。

多分、小学生にカツコいい煙草の吸い方を見せようと思つたのだろう。副流煙に対するこういういった意識からして、おじさんは常識人である。言動が時々イタイが。

「小学校中学校では運動できる奴がモテる。高校に入ればそれプラス勉強のできる奴がモテる。社会人になってからは金。そして全期間を通してイケメンは変わらずモテる。この世の真理さ」

おじさんは笑いながら懐から煙草のお菓子を取り出した。一本をおじさんが啜え、もう一本は俺にくれた。

甘くて、ココアの味がする。

一箱三十円ちよつとのお菓子なのに、少しだけ大人になった気分だ。

「まあ頑張りなさいな」

そう言うとおじさんはグッドのポーズを俺に向ける。眼鏡が日光を浴びてキラリと光る。俺も親指を立てておじさんに向けた。

早速スポーツを始めようと思ったが何をやればいいのか迷った俺は、家にあつた「タッチ」や「H2」を読んで面白そうだと思つたから野球を始めた。それらを読んで抱いた感想は、あだち充先生は素晴らしいということだ。先生最高！

女子人気ならサッカーかと思つたが、世間はサッカーワールドカップ南アフリカ大会でサッカー人気が過熱している。前回のドイツ大会ではグループステージ敗退となつたが、今回は念願の決勝リーグ進出を果たしたのだ。

メディアも大会の情報を連日報道し、世間は正にサムライブルー一色だ。

これらが意味すること。それはつまりライバルの増加だ。画面の向こうの代表に憧れた子供がわんさかサッカースクールに通い始める。野球ならWBCとかあるけどサッカーほどじゃない。(失礼)

## 2

小学校低学年ではなくなる頃、親父の友達だという人が家に来た。彼の娘を連れて。その友人一家は結構近くに住んではいたのだが、小学校の校区が違う為会うのは初めてだった。中学校に入れば一緒の学校らしい。

自分よりも二コ下の女の子だとは聞いていたので、一緒にゲームでもするかーと気楽に考えていたのだが、その考えは一瞬にして崩れ去った。

子供ながらに一目見て分かった、彼女とは住んでる世界が違うのだと。

子供ながらにしてとんでもなく美人だった。これ漫画だと一目惚れする展開だー、と頭の中でそんな呑気なことを考える余裕はあったが。

名前は百城千世子。名前まで何となく美人っぽい。

俺がその子を見て思わず固まった時、彼女からは口には出していないものの「やつぱりな」という雰囲気を感じられた。それが何だか気に入らなかつた。

出会った男みんなから好印象を抱かれる、目の前の少女にとって今までの人生でそれ

が普通だったのだろう。

多分こいつは惚れられた男を働かざる奴隷にする奴だろう、と当時の俺は初対面の人間に対してかなり失礼なことを考えていた。

古代ローマかエジプト辺りの貴族が召使いに左右から大きな団扇を扇がせているアレのシーンのイメージがぴったし合う。そしてベッドに寝そべりながら果物を咀嚼しているのだろう。正式名称は知らん。

俺はそんな暴君の魅了に対抗するべく、「友達の家に行く約束をしていた」と言いさつさと家を出て行ってしまった。その時ポカンとしていた少女の顔を見て「してやった」と根柢の無い達成感に包まれたのは言うまでもない。

今思えばとんでもないクソガキである。

恥ずかしいことに、後から思い出してみれば多分何の効果もなかっただろう。

向こう側からしてみればただ変な奴がいた、それだけの話である。反省はしている。

その後仲良い連中を集めて河川敷でサッカーやって、夕焼けが出て来た頃に帰つて来たのだが、百城父娘はまだ家にいた。

何だか恥ずかしくなって部屋に逃げたら娘さんは強引に入り込んで来た。

「仲良くしましょ」と言われどんどん向こうのペースに持つていかれそうになったので、俺は流れを変えようと試みる。

クリスマスプレゼントで買ってもらったマリオカートでの勝負を持ちかけた。負け  
た方は勝った方の言うことを聞く、というよくあるやつだ。

結果はボロ負けだった。

コースどりが上手すぎる、恐るべき未来の大女優。ちなみに俺に下された勝者の命令  
はもう一レースやること。再び負けしたのは言うまでもない。

そんなこんなで気がつけばいつの間にか仲良くなっていた。

親娘が帰宅する際「俺は働き蟻にはならない」と百城に言ったのだが案の定「何言っ  
てんだコイツ」という目で見られた。ちなみに俺もそう思う。

### 3

三階フロアの隅っこにポツンとある生徒会室、ここが私のお気に入り場所。

生徒会のメンバーと担当の先生方以外には殆ど縁の無いこの教室には、過去の文化祭  
の出し物で使われた段ボール製のセットやカツラ、果てには何年も前に賞味期限の切れ  
たカップラーメンなど、様々なものでごちゃごちゃとしている。

定期的に使われるのは週に一回の生徒会の集まりのみで、一週間のうち殆どは使われていない。

私は生徒会の役員ではないので当然入室する機会も無い……筈だったのだが、今私はその教室の入口に立っている。

ポケットから鍵を取り出し、鍵穴に差し込み回す。この鍵は、職員室から借りたものではない。以前大掃除の時に生徒会室のロッカーの中から出てきた、昔に誰かが作ったままにしていた合鍵だという。

それを手に入れた。私はこういう交渉は上手なのだ。

私は錆び始めているパイプ椅子に座り、鞆から小説を取り出して読み始める。待ち人はそろそろ来る筈なのだが、今日は少し遅い。

いつもなら十二時半に部活が終わって、着替えたら五十分くらいには来る筈なのだがまだ来ていない。

何かあったのか、と気になるがじっとしておく。

あの人は毎週この部屋で勉強する。だから私もここにいるのだ。特に他意はない。

今見ているのは彼から貰ったもの。よくある推理モノだ。私が読んでいる部分はもう事件が解決した後の後日談で、後数ページで読み終わる。

文章も読みやすかったしテンポも良かった。ただ、オチが弱い。

殺人事件の犯人は被害者の奥さんで、殺した理由が浮気されたからという、ちよつと拍子抜けするような最後だった。正直、読まなくても良かったなというレベルだ。

彼も「あまり面白くなかった」と言っていた。そしてようやく、最後まで辿り着く。

内容はともかくとして読み終わった時のこの達成感が好きだ。

背伸びをしていると、廊下を歩く足音が聞こえる。

ようやく来たらしい。時計を見てみれば十分も遅刻している。

入って来たのは、制服姿の男子生徒。

水道で身体を洗って来たのだろう、短く切り揃えられた髪はまだ濡れていた。

「遅いよ」そう言おうとしたのだが、何やら彼の口元が緩んでいた。

さては何かあったな、とアタリをつける。

「何か良いことでもあったの？ 嬉しそうじゃん」

「別に何も」

「……ふーん」

私に指摘されて口元を締める彼。

大方、女子と遊ぶ約束でも取り付けたのだろう。

彼は私の二つ上の学年で、この中学校における生徒会長だった。

昔から知っている私から言わせてもらおうと、そんなことをやるガラでは無いはずなの

だが本人曰く「生徒会長はモテる」からだそうだ。

そんな動機で良いのか、とツツコミたくもなるが仕事ぶりでは先生たちから一目置かれていゝ。勉強も部活も結果を出しているため信頼は厚いらしい。

去年の定期試験は常に学年一位、マラソン大会でも一位。ついでに生徒会長で野球部キャプテン。

……本当に誰だこれ？

私にマリオカートで負けたことで半泣きになっていた彼とあまりにも違う。あの時写真を撮っておけば良かったと今では思う。

あと最近彼のクラスの女子が「ドイツ語ってカッコいいよねー」と言っていたのを小耳に挟んだ彼の部屋には「ドイツ語入門」と書かれた参考書があった。日本の中学生はまず英語からやろうよと私は言いたい。今年高校受験でしょ。

それとドイツ語やったってモテないと思う。そういう風潮があつたのは戦前の陸軍だよ。

まあともかく、そんな圧倒的な成績を残した彼は同級生にはもちろん下級生にも「何だか凄いのがいるらしい」と言った具合で有名だ。

当然第三者から見ればほぼ完璧な文武両道で尚且つ顔立ちも凡の域を超えないなが



らも整っているとなると、やはり憧れを持つ子もいる。そんな子達に心の中は煩惱まみれですよと教えたい衝動に駆られるが我慢する。

私から彼に対する見方と周囲からの彼に対する見方の差異を比べてみるのは案外楽しいのだ。

例えば、普段の彼は物静かで知性的な表情を常にしている……が、これは本来の彼ではない。

「冷静沈着な頭脳キャラはカッコいい」と考える彼は、学校ではそういう人物を演じている。が、ふとした拍子にその蓋は外れてしまう。それもかなり頻繁に。

例えば合唱コンクールで彼のクラスが金賞を取った時、人目を憚らずに一番初めに喜びを表したのは彼である。

はたまた、野球の大会で試合に勝った時は普段見せないような笑顔でチームメイトとハイタッチするし、好きな漫画について話すときには饒舌になる。

彼は生徒会長としての仮面が外れていることに気がつくとすぐに表情を戻すのだが、その頃にはもう遅い。

学校生活で彼とあまり関わらない生徒たちが、マラソン大会で一着になったことに嬉しさを爆発させたことによる彼のガッツポーズを思わず二度見していた時は面白かった。

彼にはそういう詰めめ甘さがある。

が、それも彼の密かな人気の理由である訳で。

いつもの文武両道な生徒会長である彼から一転して、どこにでもいる普通の中学生になることの落差に「グツとくる」らしい。この間彼のクラスメートが話しているのを偶然立ち聞きした。

多分、彼に騙された哀れな女子生徒の内の一人と一緒に遊びに行くのだろう。

それについては私があればこれ口を出すことでもない。

「ところでさ、来週の日曜日博物館で昆虫展やってるんだ。予定なかったら行こうよ」  
「無理だ」

一応決定は彼に委ねているものの、その日に彼の予定がないことは知っている。それに彼は私の提案を断ったことはほとんどない。なんだかんだ知り合いには甘いのだ。あと彼は虫嫌いを隠そうとしているが隠せていない。

どんな服を着て行こうか。最近は少し涼しくなってきたこともあり、あんまり軽装だと冷えるからと彼に怒られそう。

でもなあ、かといって厚着だと動き辛いし。……何か丁度良いものはあつたつけ、今

日帰ったら探してみよう。

「ねえ、どんな服がいいと思う？」

「俺の話聞いてなかったのか？その日無理だぞ」

「え」

……驚いた。提案を断られたのは今までで三回である。

一回目は初めて私の家で遊ぼうと誘った時。

二回目は水着を選んだと頼んだ時。

そして三回目が今日だ。

「その日俺隣町の遊園地に行くから無理」

「……友達と？何人で？」

「同じクラスの子と二人」

「……二人で。その友達って女の子？」

「……そ……いや違う」

あ、ちよつと表情が動いた。

へえ、そういうことか。

私はいくら勝手を知っている仲とはいえ、学校で噂が立ったりしないように会う回数をセーブしているというのにその内の一回を名前も知らない人に盗られたのだ。

別に彼とは付き合っている訳じゃないが。

目の前の彼とは知り合ってもう六年ほど経つ。

父親同士の仲が良いことから度々小学校も学年も違うといえどもそれなりに遊び、お泊まり会をしたこともあった。

今はもう互いに中学生同士であり今までのような交流はできなくなってしまったが、それでも彼にとって大体のクラスメートよりも仲が良いのは私であるはずだ。

彼の立場上二つ学年が違う女子生徒と付き合っているなんていう噂が流れてしまつたら色々と不都合があるのは間違いない。

それでも彼ならばあの手この手で何とかするだろうし、それよりも面白そうという好奇心が強くなりわざと噂を立ててみようかと試してみたくなったこともあったが我慢した。

まあしようがない、今回はその子に譲ってあげよう。こういう日も時にはある。

「……なあ百城、俺の友達の話なんだけども」

突然真剣な顔で話が振られる。彼の言う「友達の話」は大体本人のことについてである。

本当に気づかれていないかと思っっているのだろうか。真面目な顔をしているからそんなのだろうか。

「女子と遊びに行くことになったんだが、服がジャージかスポーツブランドのシャツしかないらしいんだ」

知ってる。私と遊びに行く時はいつもジャージだ。

「で、俺も一緒に買いに行くことになったんだが、俺もよく分からない。百城こういうの詳しいだろ？アトバイス欲しいなー、ということだ」

へえ私と一緒にするのは気にするそぶりなんて無かったのに今回は違うんだ。

別に悔しくなんかないが。

「いいよ。でもその人の体格とかによつて変わるよ。私その人知らないんだけど。身長とかどれくらいなの？」

「身長体重は……そうだな、俺と同じくらいだ」

「髪型は？」

「髪型も……俺と同じ感じだ」

「すごい偶然だね」

「そうだな。俺でも驚いてる」

え、何これ面白い。本当にバレていないかと思っっているのだろうか。

所々抜けていると思つていたが想像以上だ。真剣な表情なのが更に面白い。

「しようがないな、教えてあげる」

「すまん、本当に助かる」

「今度ジューズね」

「おう」

「んー。あと丁度食べたいお菓子があるんだけど」

「……いいよ」

「あとはね……」

「いや、俺の小遣い無くなるんだけど。勘弁してくれ」

これくらいで勘弁してあげようか。

ところで、どうやったら彼は私と遊ぶ時にちゃんとした格好をする様になってくれるんだろう。こちらは色々と考えてオシヤレをしているというのに不公平ではないだろうか。

「それと……これもその友人の疑問なんだが。どのくらい良い雰囲気になったら手を握つても許されるのか教えて欲しい、と言つていたんだが……教えてくれないか？」

「……何か言った？」

「いや何もありません」

## 4

中学を卒業して俺は高校生になった。

ちなみに中学二年の夏に母親はスーパーに行つたつきり帰つてこなかった。親父の脳を破壊された嗚咽混じりの泣き声は未だに耳に残っている。

まあだからと言って俺の生活が劇的に変わるといふこともなく、勉強と部活と遊びに追われる毎日だ。

そんなある日百城から「大事な話がある。家に来て欲しい」と言われたので何を伝えられるのか内心ビビリながら行ってみたら「女優になる」と告げられた。

女優。テレビ番組や映画に出るあの女優である。

液晶の向こう側にいる雲の上の存在、それが俺にとつての芸能人だった。それに百城がなるのだという。

やたらと私の横顔どう、と聞いたり、俺のを見たりしてきた彼女だが今度はついに芸能界である。

確かに昔から、芸能人に負けなくらい美人なやつだとは思っていたが、本当になるとは思ってもみなかった。

彼女の決意は固そうであつたし、俺がとやかく言う筋はないので素直に頑張れと言つた。

ただ、芸能界に入ると百城に言われて心配が無かつた訳ではない。

新人女優Ⅱ枕営業という、創作物でよくあるシーンから導き出された安易な方程式が俺の中には存在した。俺は業界のことについて何も知らないズブの素人なので真偽は分からない。

脳内で、「良いではないか」と言う頭にパンツを被つた悪徳プロデューサーと「やめて！」と言う百城という犯罪的なワンシーンが再生される。

やべえ、本当に心配になって来た。

とりあえず何かあつたら相談しろよと百城には言い、家に帰ってインターネットで芸



能界のそういう噂をソツコー調べた。

何回かページを跨いだらそういうシチュエーションの成人漫画にたどり着いたので余計心配になり電話をかけたら笑われた。解せぬ。

とりあえず次の日サインを貰っておいた。適当なシャツと帽子と色紙に書いてもらった。

そんなやり取りから数ヶ月経ち、短期間で百城はテレビ番組や出演が増えていく。事務所やテレビ局の裏でどんなやり取りがあるかは知らないが、順調に芸能人生をスタートしたと言つていいだろう。

学校も別々になり、更には百城の仕事の関係もあるので家が近くといえど滅多に会わなくなつた。メッセージは変わらないが。

そんなある日、仲の良いメンバーで部活後のカラオケからの帰り道。

小さな女の子が車道に飛び出した。左右が見えていなかったのだろう。

クラクションを勢いよく鳴らす運転手、あつと叫ぶ通行人。

たまたまその女の子の近くにいた俺は助けるべく走つた。身体が勝手に動くとはマ

ジの話だ。

女の子を胸に抱きかかえて、そのまま車にドーンと衝突。

死んだと思われたのだろうか、道路に倒れる俺にスマホを向けて写真をパシャパシャと撮る通行人。いや、先ず救急車呼んでくれよと思う。

と思っていたらその内の一人が呼んでくれてるらしい。

身体痛いしぼんやりするし最悪。このまま転生でもするのだろうか。

岬くんみたいだと思いつながら俺は意識を失った。

目が覚めたら知らない天井だった。

頭がぐるぐるして気持ち悪い。

「知らない天井だ……」と呟く。俺の中で病院で目が覚めたら言いたい台詞第一位を無性に言いたくなくなったのだ。

シンジ君もこんな気持ちだったのだろうか。

と、まあこんな具合にはつきりとしなないけれども思考が出来ているってことは、とりあえず生きているのだろう。

起き上がろうとしたが痛くて動けない。酸素マスクもつけられていた。

？  
というかそもそも身体に力が全く入らないのだ。これもしかしてやばい感じなのか

半身不随とかなってたらどうしようなどと考えていたら、ドアが開いた。百城がいた。あ、目があった。

「……………」

大腿で近づいてくる百城。心配してくれていたのか泣きそうな顔をしている。しかし美人である。そう考えるとやっぱり凄い。

「……………」よかった」

ベッドの上から覗き込む様に俺を見る百城。

今の彼女にはいつもの様にまるで自分が手綱を握っているような余裕は見えなかった。まあ本当に握られているのだが。

……………というか今更だがニコ下の女子に手玉に取られているってやべえな、男として。ふと心の中に悪戯心が芽生える。

百城がこんなに焦っている姿なんぞこれから見られるか分からない。多分今だけ立場が逆転している。

ドラマとかでよくある展開、それは事故による記憶喪失だ。

彼女の目を覗き込む。そして酸素マスク越しに言う。誰ですか、と。なんかマスクでくぐもっていい感じになった。

「……………嘘。嫌だ……………いや……………」

あ、やばい。これはマズイ。やりすぎたか。百城がぼろっぼろ泣き出した。俺の服に涙で染みを作っていく。

嘘！ 嘘だから！

マジでごめんなさい反省します。やりすぎました。

「……………本当？」

勿論覚えているさ、名前は百城千世子。女優をやっている一四歳だ。

ごめんなさい、魔が差したんです。とにかく謝った。これはもう俺が百パーセント悪い。

「……………ゆるさないよっ…」

ああ、なんて馬鹿なことを俺はしたのだろうか。たった一回の好奇心が俺たちの友情を引き裂くなんて。

心配してくれるお前の気持ちを理解していればこんなことにはならなかった。本当にすまない。

最悪だ、百城を心配させただけでなく更には失望もさせてしまった。年下の女の子をだ。

「……許さないよ、心臓飛び出るくらい驚いたんだからね。けど、私の言うこと三つ聞いたら許してあげる」

え、それだけで良いのか？

甘くない？俺だったら百個とか吹っかけるかもしれない。あ、でも「命令を千個にする」とかやりそう。

とにかく、悪いのは俺だからな、何でもするぞ。ケーキ食いにいくのか、それとも映画見にいくのか。

「今はまだ良いや。考えておく。それまで許さないからね」

百城はそう言って笑った。

俺は綺麗だと思った。とかぶつちやけ見惚れた。だがまあそのことは口には出

さない。

## 第二話

5

現在俺は車に轢かれて入院中。

幸いにも命に別状はなく、後遺症も残らないらしい。マジで良かった。入院は一ヶ月弱くらいだろうという先生からの話を聞き、結構早く退院できることに驚いていた。

いや、一ヶ月入院は充分重い方だと思うが、何ヶ月も病院生活になるのを覚悟していたのでそれに比べれば軽い。

もし予想通り今学期の間はずっと入院せねばならない様な大怪我だった場合、出席日数足りなくて留年もあり得るので無理してでも通学するかもしれないが、そんなことにならない様なので良かった。

親父とかクラスの友達とか色々な人が取っ替え引っ替えで見舞いに来る。枕元には見舞いの品がどっさりと積み上がっている。

うめえ棒三百本とかどうすれば良いのだろうか。

あとこつそりエロ本置いていったの本当に誰だ。探し出してとつ捕まえてやる。

看護師さんに言われるまで気がつかないで恥ずかしかつたんだぞ。しかも内容はナースものというところに悪意がある。

あとは保険会社の人、女の子の家族、俺がぶつかってしまった車の運転手、親父などが集まって話し合いをしていたらしいが俺はあまり関わっていない。

正直運転手さんからしたらあんなの不可抗力だろう、仕方ないと思う。

俺も車を運転するようになったらああいう急な事故にも気を配らなければならないと改めて知り少し運転が怖くなった。

昼飯を食った俺は看護師さんに車椅子を押してもらい病院のカフェに向かう。スポ根の影響で松葉杖に憧れているフシがあるのは否定できないが、左手と両脚それぞれ折れたらしいのでそもそも松葉杖すら不可能。

この看護師さんには俺と同じ年くらいの息子さんがいるらしく、その話題でよく話す。

この時間のカフェにはいつも話し相手となってくれる人がいるはずだ。

窓際の席にその人はいた。

夜風さんという隣の病室で入院している人だ。詳しい病名は知らないが身体が弱っているのは俺でも分かる。よく百城くらいの歳の女の子が二人のちびっ子を連れて来



ており、彼女らが子供らしい。

「あら、こんにはは」

近づいた俺に手を振りながらそう言った。

こんにはは、と挨拶した。夜風さんの向かいの席に座る。

「あんな大怪我だったのにもう部屋から出られる。若いっていいわね」

いや、夜風さんも十分若いですよ、と返す。ちなみにこれはお世辞でも何でもなく本当だ。

病気で痩せて頬は痩けているがなお美人で実年齢より若く見える。

「あら、お上手ね。褒めたって何も出ないわよ」

そう言う夜風さんは微笑んでいる。やっぱり話し相手がいると楽しいのだろうか。俺が面白い話を出来ているとは思えないが。

やっぱりこういうのには慣れが必要だ。

それとこの年代の人ってどんな話題を振ればいいんだろうか、よく分からない。

そういえばこの前来ていた娘さんが「お母さんのカレーが食べたいわ」と言っていた。俺としてはポークなのかビーフなのかチキンなのか気になる。ちなみに俺は豚肉がいい。

それから適当な世間話をする。俺も病院生活で話し相手がいなくて退屈だったので

夜風さんの存在はありがたい。

一時間弱経ったところ、どうやら娘さんがお見舞いに来たらしい。名前は景ちゃんという。

俺も「やあ」と声をかけるんだが、避けられている、というか嫌われている気がする。最初は何故なのかよく分からなかったが、最近理由は何となくだが見えてきた。

夜風さんのお見舞いに父親の姿が見えないのだ。それだけならば長期の出張などのそういう理由もあり得るが、娘さんの言葉に度々出てくる「アイツ」という人物。

その度に娘さんの表情が険しくなることから、多分父親は家を出ていったかどうかしたのだろう。

俺も母さんがいなくなっただので気持ちは分かる。

多分年上の男が母親と話しているだけで父親のことがチラつくのだろう。

そんな訳なので、俺は景ちゃんが見舞いに来たらそそくさと退出することにしていく。大切な家族の時間に俺がいる理由なんて無いし。

席を外す際夜風さんにお辞儀してから戻る。

「今日もわざわざありがとうね」

夜風さんの言葉に俺はいえいえ、と返答しカフエを後にした。

## 6

「うん。もう退院しても大丈夫だよ、お疲れ様でした。まあこれからもリハビリで通つてもらうことにはなるけれども」

俺の担当の先生はモニターを見ながらそう言った。

ようやく入院生活が終わりを告げるのだ。ここまで長かった。

もう途中から暇すぎてメシと夜風さん一家との会話以外に楽しみが無くなった。そのおかげでルイちゃんとレイちゃんとは仲良くなれたのは良かったが。

とうか彼ら兄弟なのに同じくらい背だなと不思議だったが双子と聞いて納得。

俺の周りに双子ちゃんは今までいなかったので初めて話した。確率的には小中高に幾人かはいても不思議じゃないのだが、そういうこともあるだろう。

景ちゃんはまだまあ仲良くなった。なんと言うか、ルイレイ姉弟と比べてとつつきにくい感じがする。

下の子の二人は幼くて無邪気なので俺ともすぐ話してくれるようになったのだが、景

ちゃんとは色々多感な時期だ。

夜風さんの具合は悪いし長女として色々と思うことがあるのだろう。俺は何もしてあげられないのが辛い。

幸いにもこの病院は高校からさほど遠くないので退院した後も夜風さんの見舞いに来ると決めた。

何はともあれこれにて退院である。当分の間ギプスと松葉杖の生活は続くがしようがない。

お世話になった先生や看護師さんに挨拶を済ませると、すでに受付では親父が会計を済ませていた。

駐車場に停めてあった車に乗り込み、帰宅した。

「退院おめでとー」

数日後、俺は百城の家で「退院おめでとーの会」に参加していた。主催者は百城、参加者は俺一人だ。

百城の同級生の中にも俺と仲良い奴はそれなりにいるので、どうせならそいつらも誘えばいいじゃないかと提案したのだが、「その必要はないよ」らしい。

いやまあ俺は別に構わないのだが、こいつは二人しかいないのに部屋をモールとかで飾り付けて虚しくないのだろうか。

俺が部屋に来てからも「まだちよつと待ってて」と言い照明に何か変なカパーを被せたりカーテンをふりふりしたもので装飾しているが、とても笑顔。

テレビで見るこいつも綺麗ではあるがそれとは違う感じがする。なんて言えいいのか分からない。

あと二時間くらいで片付けるだろうにこんなに準備してくれる。嬉しいのだが何か違和感がある。

もしかしてこういうパーティーが初めてなのだろうか？

美人だし友達多い奴だと思っていたが、かわいそうなので触れないことにする。

ともかくここまでやってくれて嬉しいのは確かだ。ありがとうと言った。

入院中のことがあり怒っていないか心配だが見た感じは問題ないようだ。ほつと胸を撫で下ろす。

「もう、本当に心配したんだよ？」

いやそれに関しては本当に申し訳ないと思っている。俺としてもまさかあんな状況

に遭遇するとは考えてもいなかった訳で。こうして五体満足で生きているんだから儲けものだ。

ところで、百城がクッキーを焼いてくれたらしい。

中学校にいる百城千世子ファンクラブに一枚十万くらいで売れそうだと脳裏を悪魔が過ぎる。

いや、そんなことは流石にしないが。

だがまあこいつ程の美人にクッキーを焼いてもらう機会なんて殆どない訳だ。なので今日は出来るだけ多く食ってこうと思う。

病院食は味気ないものばかりだったから余計に美味しく感じる。

「……………どう？美味しい？」

本当のガチのマジでめっちゃ美味しい。語彙力が著しく低下したがとにかく美味しいということは確かだ。

「たくさん作ったからもつといいよ」

そう言つて百城はテーブルの上にドン！と山盛りを追加する。

……………いや、でも流石にこんなに食えないから持ち帰るわ。一週間あれば食い切るだろう。

そんなこんなで菓子を食べながら適当に話をする。入院中の出来事や、芸能界の近況

とか。

俺としては芸能界というものに対する警戒心というものは全く解けていない。もし百城が枕営業なんて持ちかけられた日には事務所に突撃するかもしれない。

しかし、彼女の所属するスターズは大手芸能事務所でありそういった不祥事は調べてみても見当たらなかったものでとりあえずは大丈夫だと思っっているが。

ていうか、こいつ学校の出席日数とか大丈夫なのだろうか。芸能の仕事が大変とはいえ中学校留年とかなったたら流石に笑えない。

そうなる前に学校側と事務所で最低限だけは出席させてくれるように調節するのだからうけども。

いや、そもそも中学って留年するのか？ 身の回りでは聞いたことはないが。

あとは、とにかく百城を褒めた。

俺には演技はよく分からないので何がどう凄いかは言語化出来ないが、映画やドラマをいくつか見れば俺でも彼女がテレビに出られている理由が分かる気がする。他の俳優と比べて遜色なかった。

ただまあ『役』ってよりは『百城千世子』がそこに居る、って感じだったけど。

巷では天使って言われているし、芸能界で頑張る姿には素直に尊敬する。

無理しすぎず親御さんに心配をかけないようにな。

「……うん。私頑張るよ。応援してね、あなたはファン一号なんだから」

彼女のファンになったことを明言した記憶は無いが、彼女が言うならそうなのだろう。

あ、もしかしてサイン貰った時か。あれらは俺の部屋の壁に飾られている。

俺は百城のファン一号だぞ、と将来更に有名になったら称号みたいになるのだろうか。それはそれで面白そうだ。

是非とも百城には夢に向かって頑張つて欲しい。応援している。

「……それとね」

ん？ どうした百城、真剣な顔になって。

どうした、そう聞こうとしたら、ぐいって近づいてくる。

なんか距離近くない？

「入院ね、私凄く不安だったんだよ。……もしかしたら死んじゃうかもしれないって」

お、おう。マジでそれはすまん。だからちよつと離れてくれない？

あ、なんかいい匂いする。

「あなたの目が覚めない日とか、ずっと泣いてた。もう会えないのは嫌だつて思つて」

涙目になる百城。おい、さっきまでの元気はどこ行つたよ。なんかお前が泣いてるとこつちまで調子狂うんだが。



いつもはケラケラ笑っているから余計に。

「私がどんなに心配だったかわかる？ 多分分らないだろうね、ほら、あなたって馬鹿じゃん？」

は？ いきなりデイスられたんだが。

お前今俺のこと馬鹿って言ったか？

こちとらテスト学年一位なんだが？

通知表オール5なんだが？

抗議の目で百城を見てみると、こいつはクスリと笑った。

「……そういうところだよ。まー、おバカさんには私の言っている意味は分からないだろうけど」

そう言って笑う百城。涙は引っ込んだようでもいつもの様子に戻った。

最近役者としてのスキルが上がったらしく、涙を流すのは自由自在らしい。羨ましい能力だ。

そういう技があるため、先程の百城の涙は本気なのか演技なのか俺には判別がつかん。

それと、百城の顔を改めて見てみると物凄い美人である。

今までも美人だったが女優を始めてから更に磨きがかかった気がする。芸能界特有

のナニカがあるのだろうか。

あ、それとも男ができたのだろうか。恋を知ると美人になる、とはよく聞く話だ。

鬼のようにモテていたこいつであるが、終ぞ首を縦に降ることは無かつたらしい。そんな百城を手に入れる男というのはどんな奴なんだらう。

ちなみ何で俺が今までの百城の交際事情を知っているのかといえは、俺がこいつをストーキングしていた訳ではなく、百城が俺に言ってきたからだ。

何で俺に言ったのかは今でも不明だが、おそらく彼女なりに何かの意図があるのだらう。

「ん、どうしたの？」

まじまじと百城の顔を見ていたのがバレたらしい。まあそりやあバレルか。

別に隠すことでもないの。「美人だと思っていた」と正直に伝える。

「へえ。つまり私に見惚れた訳だ」

まあそういうことになる。

だからといって恥ずかしいから言わないけどな。

俺はクッキーを数枚口に放り込み、お茶で流し込んだ。甘くて美味しい。



それから数週間後、校長先生から呼び出しをくらった。

何かやらかしたかと自分に問うたが答えは出ず。

とりあえず謝罪のパターンとして一七種類ほど用意して校長室に行っただが、とんだ無駄であった。

何でも、この間の事故について県警から人命救助の賞状を貰うらしい。

それだけならば良かったが、新聞やテレビのニュースにも載るらしい。俺は断ったが、校長先生はぜひ出てほしいとのこと。

周りには校長以外にも教頭や学年主任など、主だった人たちがたくさん。

そこまで頼まれたら断るわけにもいかず、了承する。

校長先生の話も分かる。

広告費というものは大変高価なのだ。看板作ったり、ポスター作ったり、チームのスポンサーになってユニフォームに名前を入れたり。

最後のは言わずもがな、ちよつと宣伝するだけでも大金が必要だ。

だが、生徒が何らかの形でメディアに乗り多くの人の目に触れれば、数十万円、数百万円分の宣伝効果が生まれる。

それが例えば部活に力を入れている学校ならば夏の甲子園だったり、冬のサッカー選手権、ラグビーの花園などだ。

反対に学力の高い進学校ならば東大京大、早慶MARCHに何人受かったとか。

あとは今回の俺みたいにボランティア的な活動がメディアで紹介されることもある。だからそういった活動に力を入れる学校がある。

生徒の自主性や社会的な能力の向上など学校教育としての側面がある一方、こうした旨味があるのだ。

今回の俺の形で言えば、新聞にテレビ、更にはネットニュースにも載るといふのだからそりゃあもう本来ならば地道に大金をかけてやらなければならない宣伝効果を生み出しているという訳だ。

うえ、そう考えると急に吐き気に襲われる。吐きそう。

形は違えど芸能人も宣伝という意味では本質は同じ。企業の広告やテレビ出演を主として、メディアを通じて大量の金が動く。

だからこそ好感度や知名度が重要なワケで。故にスキャンダルや炎上が多く損失

を生み出すこともある。

そう考えるとそんな世界にいる百城すげえな。マジで尊敬する。今度メシ奢ってやろう。

それと、俺が車に轢かれた直後の画像がネットに上げられていたらしく、そちらも大分広まったらしい。

追加で轢かれる一部始終を捉えた映像も。改めて思う、ネットって恐ろしいな。

通行人のキャー！ という絶叫やドン！ という生々しい衝突音は結構シヨツキング。

よく生きてたぞ、俺。

こんな動画があるんだ、と先生からスマホで見せて貰ったためにちよつと重くなつてしまった部屋の空気を軽くするため写真を見ながら、サイバイマンにボコされたヤムチャみたいになつて面白いですね、と笑つたら頭を心配された。

失礼な、俺は正常だ。

どうか本当にそういうコラ画像があつたんだが。作つた奴頭イかれてんのか、高校生の写真でこんなの作んな○すぞ。

自分で言うのは良いが他人にやられると無性に腹が立つ。

と、まあこんな具合で俺はインタビューを受けることに。

せつかくテレビに出れるんだからおめかししなきゃねということで、サッカー部が誇るイケメンモテ男の須藤に眉毛剃りとか校則に触れない範囲の化粧もしてもらった。

インタビューとか怠いわー、と思っていたが、結構ノリノリな自分がいることに驚いた。

そして有名な美人のアナウンサーにインタビューを受けたことでは内心テンション上がりつつ、カメラに向かって「自分のしたことは大したことではない。当然のことをしたまでだ。女の子が無事で良かった」的なことをキメ顔で言っちゃった。

これで好感度上がるかな、と割と最低な気持ちはあったことを認める。とんだペテン師だ。

クラスメイトからは映りは好評だった。今度百城にも感想を聞いてみるか。

それと以前ふと好奇心から百城のアンチスレを覗いてしまいネットの恐ろしさを知った俺は、ウェブ上でのインタビューに対する反応を見るのが怖かったのでそちらの方は封印している。

人間知らない方が良いことも世の中にはあるのだ。



それから数ヶ月後夜風さんが亡くなった。

泣き止まない景ちゃんたちを慰めながら死後の整理とか手伝っていたのだが、ある時夜風父が現れたのだ。

景ちゃんの彼に抱く憎しみは充分理解しており、二人の会話を眺めていたものかどうか考えても父娘の仲直りという事態には発展しないだろうと予想。

よくアニメや漫画作品に登場する「実は娘のことを考えていたが不器用だった父」なんてモンじゃない。

とりあえず遺体の前で面倒なことになる前に二人を引き離れたのだが、景ちゃんたちの心配を微塵もしてなさそうな彼にカチンと来てぶん殴ってしまった。

流石にどんな理由であれ人様の父親を殴ったというのはまずいだろうということで、その後景ちゃんに謝った。

もしこの行動のせいで生活資金的な問題が生じてしまうのなら、殴った責任をとって自分も協力するとも。

土下座までしたのはやりすぎだっただろうか。

それから暫くして景ちゃんと喧嘩した。喧嘩と言うよりは彼女が俺を拒絶したと言う方が正しいか。

まだ中学生だし、母親の死去という事実は精神的に辛いのだろう。

だから出来る限りのフォローをしようと思ったのだが、彼女は気持ちが溢れてしまったらしい。

確か「お母さんがいなくなった気持ちなんてあなたには分からないでしょ！ 同情なんて要らないわ」的なことを言われたので俺もこの前母親いなくなったから分かるよ、と言ったのだが、景ちゃんにはそれが予想外の返答だったようで互いに沈黙する気まずい雰囲気になった。

どうやらどデカイカウンターを食らわせてしまったらしい。

この気まずい状況をどうするかと悩み、とりあえず腰を据えて話し始める。

そうしたら俺も何だかお袋のこと思い出して泣いちゃって、それを見た景ちゃんも泣いて、心配そうに部屋の外から除き見ていたルイくんもレイちゃんも泣き始めた。

心のさざ波を抑えるには何か別のことに集中するのが良い。



女子中学生の家で泣きながら腕立てする高校生、というよく分からない状況が生まれ  
たが結局泣き止むことが出来たので結果オーライだ。

7

「すまん、遅くなった」

待ち合わせの時間になっても、いつもは必ず十分前行動をするあの人が来ないから、  
ルイとレイも心配し始めた時。

背後から聞き慣れた声がかけられる。

今日は友達？ もしくは先輩？

関係性はよく分からないけれど私たちはお世話になっている人とご飯に行く約束を  
していた。

ルイが描いた絵が市で金賞を貰って、そのお祝いに最近CMでやってるルイが食べた

いと言っていたチーズハンバーグをレストランに食べに行こうと、彼が提案してくれたのだ。

通っている高校も住んでる街も違うけれど彼は私よりも二つ年上の高校三年生で、数年前から私たちは付き合いがある。

私が中学生の頃、お母さんが入院した時に怪我で隣の病室にいた人で、話が合ったらしくお母さんと仲良くなっていた。

それを当時の私はアイツの影がチラついて避けてしまっていたけれど当の本人は全く気にしていないらしい。

自分が退院した後もお母さんのお見舞いにずっと来てくれて、お母さんが死んでしまった時は葬式や遺品整理も手伝ってくれた。

お母さんの葬式の時いきなり現れたアイツを彼が殴ったのは痛快だった。

最初は物腰静かな印象だったけれど、次第に彼の態度も変わって来てレイとルイの前で笑うことが多くなっている。

私たちに関わっても得なんて無いのに色々世話をしてくれ、尚且つ勉強も部活も両立しているのが彼だ。

そんな彼を見て私は自分が嫌になりキツく当たってしまったことがあった。

ある時「もう来ないで」と言ってしまった。

本心ではなかった。感謝していた。でも言葉は止まらなかった。

大分声が響いたらしくレイとレイも心配そうに見ていた。

色々あり、彼も私たちもみんな泣き出してしまったのだが、そんな時彼は急に腕立てを始めたのだ。

彼曰く「泣き止むには身体を動かすのが良い」らしい。

ポカンとする私たちを置き去りにして泣きながら黙々とそれを行う彼を見て大笑いした。そんなことがあった。

なんだか変な人だと思っていたが、もしかして彼は頭がおかしいんじゃないだろうか。そう思った瞬間だ。

「おにーちゃん遅刻だ！」

「悪いな、色々と立て込んで」

学校帰りにそのまま向かってきたのだろう、彼は学ランとリュックサックのままだった。

今年受験だし最近色々忙しそうにしていて家に来る回数も減っている。

レイとレイはそれを残念がっていたので今日久しぶりに会えて嬉しそうだ。

「今日何食べても良いって本当!？」

「ああ好きなものを食べ。金は十分持つて来た」

「じゃあピザとかお寿司も良いの？」

「もちろん」

そう言いながらポケットを叩く彼。あの膨らみは財布だろう。

特に最近の彼は色々とルイとレイに色々なモノを買ってくれている。

この間会った時レイは新しい服を買って貰っていたし、流石に悪いと思つて断つたのだがそれは却下された。

ずっと我慢していたのだからこれくらい許されるだろうと彼は言っていた。

それに彼曰く、夏休み中にマグロ漁船に乗り込んで纏まったお金が手に入ったらしい。

証拠として、二メートル位の吊るされたマグロを背景に日焼けした漁師さんと写つている写真を見せてもらった。

やっぱり都会の高校生ってすごいよね。短期間でお金を稼げるなら来年私もやつてみようかしら？

体力には自信あるし。

「景。腹は空かせてきたか？」

「ええ、でも私の分は自分で払うわ。これだけは譲れない」

「いつものお礼だって言ってるのに……お前俺がメシ代払おうとしても受け取らないじゃん」

「それとこれは話が別よ。第一その分はレイとルイに買って貰ったもので済んでるわ」

「……そう」

「そうよ」

ルイを肩車してレイと左手で繋ぐ彼。二人と学校での出来事を語りながら歩いていく。

電車で駅を一つ越えて、降りたところから十分ほどで目的地に到着した。

そこは家族向けからおつまみまで色々な食べ物があるご飯屋さんで、私たちは初めて入る。

畳の和室に案内された。

へえ中つてこうなっているのね。知らなかったわ。

「レイ、ルイ。何食う？」

「ハンバーグ！ あ、あとピザ！」

「これ結構量がありそうだぞ。いけるか？」

「大丈夫！……だと思う」

「まあ無理なら俺が食うよ。レイは？」

「わたしパスタが良いです」

彼はうどんを頼んだ。何だか普通ね。彼のことだからもつとゲテモノを頼むと思つていたのに。

平然とした顔で「入口の水槽にいたタコ一匹丸ごと揚げてもらえることできますか？

一目惚れしました」とか聞きそうだわ。

私たちの前だからって我慢してるのかしら、きつとそうよ。

私はどれにしようかしら。どれも美味しそう。

だけど好きなものを全部食べたら太りそうだわ。

一日くらいで変わると思えないけど心配するのはしょうがないと思うの。それに全部頼んだらお金もかかってしまう。

なかなか煮え切らず彼の方をチラリと見る。

あ、目が合った。

私が迷っていることに気がついたのか、『関係ない、行け』と彼は言葉は発しなくともアイコンタクトで私に語りかけた気がした。

決めたわ。私、今日は我慢しない。

「焼き鳥、あとあさりの味噌汁。……あ、冷奴も食べたいわ」

「和風だな」

彼は水を飲みながらそう言った。

「そうだ。俺もプリンでも頼もうか」

「今日はやめて。またしようゆとわさびかけるつもりでしょ」

「何故だ、たった数百円で高級食材を味わうことができるのに」

「見た目が悪いのよ、見た目が」

彼はプリンに醤油とわさびをいつもかけて食べている。

彼曰く「現代の錬金術」らしいがそれは大袈裟だろう。

たとえウニの味がするって言ってもプリンはプリンのまま食べたいわ。

あれには流石に彼に懐いているルイとレイも引いていた。

そんな間に料理が運ばれてきて、みんなで食べ始める。ルイとレイはとても嬉しそう  
だ。

「レイ、ソースがついてる」

レイのほっぺにソースがついているのを見つけた彼は、おしぼりで拭いてあげてい

る。

こうして見ると兄妹みたい。

レイは照れているのか頬を赤くし、それに気がついたルイがレイを揶揄っている。わいわいと本当に楽しそう。今日は来て良かったわ。

「おにーちゃん、ウルトラ仮面のモノマネやって！」

「一回だけな。『やあルイ君、こんばんわ！』……これでどうだ？」

「本当にウルトラ仮面みたいだ！ ねえお願いもう一回だけ！」

「本当に最後だぞ。『下がっていてくれ、怪人たちは私が倒す！』」

「すげー！」

彼は色々と器用だ。料理はあまり上手でないけれど、大抵のことは頼まれたらやってしまう。

レイとルイへの接し方も上手で二人とも懐いていて、スマホにはたくさんの連絡先が入っている。私もああなったら学校に友達ができるのかしら。





「——じゃあそろそろ帰るか」

「ええ!?! もつとお話したいわ!」

「そうは言ってもなレイ。そろそろ帰らないと、明日も学校だろ? 話すならまだ帰り道があるさ」

「ご飯も食べ終わって、たくさん話もして落ち着いた頃彼がそう言った。もう時計を見れば八時半になる。」

今日は特別だから九時までに寝るルールは無いとはいえこれ以上遅くなるのもまずい。

二人は嫌がっていたけど仕方ない。荷物をまとめて会計を済ませる。  
電車で揺られながら家に帰る。

こんな時間まで遊ぶのなんていつぶりかしら?

レイは疲れたみたいで寝てしまい彼におぶられていた。ふとレイが彼に対して口を開く。

「ねえ、おにーちゃんはコレいるの？」

「……最近の小学生ってませてるのな」

「別にふつうよ」

レイは小指を立てている。本当にいつの間覚えたのかしら。でも私も気になるわ。変人だけど色々器用だしいても不思議じゃない。

面倒見もいいし、そのせいか彼のスマホには連絡先がたくさん入っていた。

「……レイの想像に任せる」

そう言った彼の声は何だか震えている気がした。

8

色々と濃い時間を過ごした高校生活も終わり、受験も無事成功して俺は大学生になった。

確か人生の体感時間の半分って十九歳位だったか、時の流れって早いんだと俺は知った。

んで、大学にて。

せつかくだから何かのサークルに入ろうと思ったが、どうしようかと決めあぐねていた時のこと。

美人の先輩から「キミ、一緒にテニスやらない？」と言われた。何でも歩きから俺の体幹を評価したのだとか。

もちろん男なら大学でテニスといえればテニサーを思い浮かべる。これは絶対だ。

そしてテニサー⇨ヤリサー⇨飲み会⇨お持ち帰りという図式が組み上がる。この間僅か0.2秒。

俺はソッコー了承した。仕方がない、男はこういう生き物なのだ。

だがすぐに後悔することになる。俺が誘われたのはテニスサークルじゃなくてテニス部だった。

新入部員の大体は高校までテニスやってるガチの人達だったのだ。

同期の中には県大会優勝とか、関東大会ベスト8とかが何名かいる。部室には「目指せ私大打倒!!」と書かれていた。

俺の場違い感は半端じゃない。

でもやりますと言った手前なので今更やっぱいいですなんて言い出せない。俺はチキンなのだ。そのまま俺は入部届けを出した。

そのことを百城に電話で話したら笑われた。チクシヨウ、俺は割と本気で悔しがっている。

女の子とキャツキャウフフな大学生活を予想していたのにそれがスポ根に早変わりしたのだ。まあやると決めたからにはやり切るが。

その後も適当に近況報告とかをしていたのだが、ある時急に百城の声がワントーン下がった気がした。

「——でもさ。どうしてテニスサークル入ろうと思ったの？」

どう答えようか。飲み会でお持ち帰りできるかもしれないと思っていた、なんて答えたら幻滅されてしまうかもしれない。

これまでの交流のせいでもう俺に尊厳なんて無いに等しいが。

困った果てに誘ってくれた先輩が可愛かったからと言う。

俺の脳内シミュレーションではこの返答を聞いた百城が『もうおつちよこちよいだなーあはは』と笑っている予想がされる。

それか『今度は気をつけないとダメだよ』と言うか。

完璧とまではいえないが問題ない返答、そう思っていたのだが。

『へえ、その先輩ってどんな人?』

……なんか怒ってないか?

本人の手前そんなことも口に出せず、正直に答えてしまった。黒髪ロングで背高い人と。

『…その人と一緒にお酒飲んじや駄目だよ。あなたつてお酒弱そうな顔してるから』

いや俺そもそも未成年だし飲めねえよ。て言うかやっぱり百城怒ってるんだけど。何故だ。

やべえ考えても思いつかない。

とりあえずごめんなさいと謝ろう。

『じゃあ今度一緒にご飯いこーよ。この間ロケでおいしいお店見つけたんだ』

百城がロケで行った店…何となく高級そう。よく分からないフルコースとか出てきそう。

でも百城に払わせる訳にはいかない。

彼女はよく「別に私が払うからいいよ」と言うのだが、それに対してはいつも通りN Oと言わなければ。

彼女はもう既に並の大人の生涯年収程度は稼いでいると予想できるが、だからといって他人に奢ることに慣れてほしくない。

典型的な貧乏大学生である俺に金を出すことに慣れて、それが巡り巡って将来ヒモ男に貢ぐきつかけとなってしまったら俺は泣くだろう。

『あ。ちゃんとお洒落してきてね。楽しみにしてるから』

そう言うと百城は電話を切った。

そういえばあいつと遊びに行くのも久しぶりだ。それなりに楽しみにしている自分がいることに驚いている。

お洒落、ね。

ぎゃふんと驚かせてやろうか。俺は高校までとは違うのだ。この間古着屋で友達にオシヤレな感じの服を選んで貰ったばかりである。

あいつの顎が外れるほど驚かせてやろう、そう思うのであった。

あと、百城に教えられた店の情報を調べたら別に高くなかった。学生でも全然余裕なレベルである。

案外大物女優は庶民的だな、と思ったのだが考えてみれば当たり前だ。ほんの数年前まで彼女も一般人だったのだから。

最近テレビの向こう側の百城しか見ていないので、どうしてもそういう感覚が薄れてしまう。

## 第三話

9

景の奴がスターズのオーディションを受けたらしい。

スターズは言わずと知れた大手プロダクションで現在人気エゲツないことになっている百城と同じ事務所だ。

今回のオーディションは三万人も応募があつたらしい、やはり有名どころは規模が違う。

そんなスターズのオーディションだが、景はなんと最終試験まで残つたのだとか。

景は超が付くほどの美人であるし演技が凄いで意外ではない。

景の演技はなんと言えばいいのか、一瞬でまるで別人の様になるのだ。憑依と言うべきかそんなレベルだ。

たまに感情がリセット出来ないと言つて映画を見て感情を思い出す。あれがどんな感覚なのか俺には想像もできないが、ああいう人間を天才と言うのだろうか。

百城もあれだけ人気なことから天才の一人なのだろうが、それとは別のベクトルに振り切れている。

あんな人間そこら中にぼんぼこ生まれる訳がないし、当然最後まで受かると思っていたのだが結果は落選。

緊張で上手くできずに失敗するタマでもなし、セクハラしてきた審査員でも殴ったのかと心配したがそうでは無いらしい。

「バカでも分かるように演じたのに落ちたわ」

景はそう言っていた。

スターズの審査の基準はよく分からないが、多分景よりもっと凄い奴がいたのだろう。やはり芸能界はとんでもない連中が集まるのだ。恐ろしい。

景が受ける前、俺は百城に連絡して「カメラや他人からどう見られているのかを四六時中考える」というアドバイスを聞き出したのだがやはり彼女はとんでもない連中の筆頭だ。

それをそのまま伝えても助けにならないので「とにかく頑張れ」という当たり前のことしか景には伝えられなかったが。

百城はそれを誇張でもなく本当にやってのけるのだから今の活躍があるのだろう。

この前家に行ったらゼリー飲料片手にずっとパソコンを開いてエゴサをしていて



ちよつと怖かった。それで全部数字としてまとめているのだという。いやほんとにすげえわ。俺だったら発狂しているかもしれない。

流石に百城の身体が心配なのでおにぎりを握った。

そこで一旦休憩するとばかり思っていたのだがよほど集中していたらしく、俺が百城に食べさせると言ってきたきやがった。流石にそんなことをするのは長い付き合いでも初めてだからこっちは心臓バクバクだったのに百城はパソコンに相変わらず集中していた。

そういう所だぞと俺は言いたい。

今までに何人の男が泣いてきたのだろう。俺の予想では百を超えていると見た。

「——おねーちゃんは役者にならないと！ おにーちゃんもそう思うよね?！」

そう言ったのはレイだ。レイとルイ、そして景の三人は今さつき風呂から出たばかりで頬が赤くなっている。

俺はバイトの帰りに夜風家に寄らせてもらい夕食をご馳走になったのでこの場にいる。

急にどうしたのかと思っただが、どうやら景が入浴中にいきなり泣き出したらしい。

しかもその理由が不合格の悔しさではなく「悲しみの感情が残っていた」なのだとか。確かにこいつもちよつと怖い。

景は役者になるべき才能を確実に持っている。が、オーディションに落ちてしまったのだからどうしようもない。

高校を卒業したら景は就職する予定らしい。

俺は夜凧さんが亡くなる前に病室で「レイとルイを立派に育てる」と約束していたのを立ち聞きしたことがある。

彼女はその約束を守るために今までやってきたのだ。そして彼女の行動の優先順はこれからも変わることはない。本当に偉いと改めて思う。

レイの気持ちも分かる。レイは役者ではない夜凧景が怖いのだ。俺を含めた一般人はコロコロと別人みたいに変わることはない。

役者ならばそれが長所になる。この前こつそりレイは俺にそのことを言ってきた。俺もその考えには共感する。

だがレイには悪いが俺は景側につく。やはり下の子二人を育てるにはどうしても金が必要なのだ。それに絶対に芸能界で金を稼げるようになるという保証もない。

「えっ……おにーちゃんの裏切り者！ もう嫌い!!」

そう言つてレイは頬を膨らませながら俺からそつぽを向く。

こつちを向いてと言つても向いてくれない。どうやら嫌われたらしい。シヨックで湯呑みを落としてズボンに茶が溢れる。熱いが我慢してレイに謝り続ける。

「あー。おにーちゃんがレイを怒らせた」

「まずお茶を拭きなさいよ」

景が風呂場からタオルを持ってきてくれた。さつそくズボンを下ろして下半身を拭く。

湯呑み半杯分という結構な量をこぼしてしまったためズボンはびしょ濡れだ。帰るまでハンガーとか借りれるだろうか？

「……その前にここで脱がないでよ！」

景にそう言われた。

……失敬、女子の前だということをすっかり忘れていた。そつぽを向いていたいつの間にかレイはこちらを向いている。

顔を両手で隠しているが指の間からチラチラ見ている。

「露出狂よ！ スケベ！ 変態！」

やめてくれレイ、小学生から変態扱いは心にくる。

というかレイとはレイと俺と一緒に三人で風呂入ったことあるし、景は市営プールと

かで俺の海パンを何回も見ているから今更ではないだろうか。もしかしてそういう問題ではないのか。

「うおー！ おにーちゃん脚の筋肉すごい！」

ルイは超笑顔だ。お茶で赤くなった太ももをペチペチと触る。

十年弱の間スポーツで鍛えた、密かに気に入っていた部位なので筋肉を褒められるのは嬉しいが、このままでは俺は小学生男子に脚を触らせた本物の変態になってしまうので夜風家に置いてある予備のズボンを急ぎ履く。

危ない、あと三秒遅かったら景の拳が出ていた。

「命拾いしたわね」

そう言つて拳を下ろす景。本当に危なかった、目がマジだ。

それはそうと、景はどんな仕事をするのだろうか。

景は器用だし体力もある。どんな仕事だつてこなせるだろう。俺の同級生には高校卒業してそのままJRに行った奴とかいた。それかやはり今のご時世公務員が安定だろうか。

……いつそのこと景は美人だしマイチューバーとかどうだろうか？自宅までできるし。

ちよつと際どい服でサムネを撮つて商品紹介とか。いやこれ以上考えるのは止めておこう。人として越えちゃいけないラインだ。本当にすいません夜風さん。

「……公務員。良いかもしれないわ」

勉強もできるし景なら試験は問題ないだろう。もし必要とあらば俺が教えることも出来る。

その時、レイが欠伸をした。目も微睡んでいる。

時計を見れば八時半、いつもより帰るのが遅くなってしまった。もう帰宅しなくては三人に悪い。

濡れたズボンをポリ袋に入れ、バックに詰める。もう帰る旨を景に伝える。

「じゃーね、おにーちゃん」

「バイバイ」

「またいつでも良いわよ」

玄関で三人に見送られながら俺は夜凧家を後にした。

後日連絡が来たのだが、景はどうやら最終審査に進めたらしい。何でもウルトラ仮面が家にまで迎えに来たのだとか。

何をやっているんだアキラ君。そう尋ねたいが忙しそうなので連絡はやめておく。

ウルトラ仮面の俳優であるアキラ君が夜風家に来たとなると近所の奥様方は黙っていないのではないかと思つたが、やはりちよつとした騒ぎになつたらしい。

確かにそりやそうなるだろう。スターズの社長でありかつて名女優だつた星アリサの息子。顔は母親の遺伝子を引き継ぎ超がつくイケメンで運動神経も良い。

彼の筋肉は男の俺から見ても惚れ惚れするものだ。まあ、俺の方が上だが。

顔面偏差値ではどう足掻いても勝てないので、他のところで勝たなくてはならないのだ。

「おねーちゃんかつこよかつたー」とレイは興奮気味にそう言つた。

しかし結局はグランプリに受からなかつたようで、途中でレイと電話を代わつた景の声は落ち込んでいた。まあ気を取り直せと励ましたところで、レイが俺に言いたいことがあると再び電話を替わる。

宿題で聞きたいところがあるのか、そう思っていたのだが。

『あのね、おにーちゃん。ええと……おねーちゃんがひげのおじさんに誘われたの！』

今さつき家まで来ておねーちゃんをスカウトしてたわ！ あの顔は絶対にえつちなビデオの監督よ！』

レイから告げられた言葉を聞き、頭をハンマーで叩かれた様な衝撃が走つた。重大な

事件の匂いがした。

## 10

「スタジオ大黒天」という文字が付けられたワゴン車が走っている。運転手である男の名は黒山墨字。無精髭のこの男はカンヌ、ベルリン、ヴェネツィアの世界三大映画祭全てにおいて賞を獲った稀有な日本人監督である。

黒山はスターズの女優オーディションにおいて審査員を務め、その際に夜風景という才能の原石を発見した。

黒山は夜風景に役者としての経験をいち早く積ませるため、彼女をワゴン車に乗せC Mの撮影現場に向かっている。

これはもはや半ば誘拐であるのだがそんなこと関係なかった。

「おはよう夜風。迎えに来たぜ」

黒山は右手でハンドルを握りつつ左腕で夜風を抱きかかえるようにしているのを離した。そのまま車の進行方向を見つつ口を開く。

「このまま撮影所連れていつてやる。一刻も早く芝居を教えたい。学校に欠席の連絡を——」

黒山は気が付かない。

彼の左隣で夜風が自身の拳を息で温めていることに。そのまま黒山が言い切る前に、夜風は黒山を殴る。

夜風は黒山に何の説明もないままこうして連れてこられているのだから彼女の気持ちは大いに理解できる。

「ぐおっ!? 何だお前! 運転中だぞ危なえ!!」

「説明もなしにいきなり車に乗せて、誘拐よ!」

運転中だというのに運転席と助手席で取っ組み合うような形になる黒山と夜風。スタジオ大黒天のワゴン車はこの間フラフラと蛇行している。

世間一般的に見て、運転中のこのような行為は大変危険なので控えた方が望ましい。「つたく、少しは落ちついて——ん?」

掴みかかってくる夜風を強引に引き離した黒山は、バックミラーを見て何かに気がつ



いた。

車の背後から何かが近づいて来るのだ。次第にはつきりとするそのシルエットは、ワゴン車の横にぴったりとくつつき並走する。ママチャリに乗った若い男だった。

「なんだこいつ!?!」

黒山の心からの驚愕だった。車を追って来る見知らぬ人間など、いきなりその姿を見た黒山からしてみればホラー展開でしかない。

黒山はふと彼が小学生の頃に聞いた百キロババアの都市伝説を思い出した。

高速道路で百キロものスピードで車に追従するその老婆に追いつかれたら死ぬ。彼はちやうど都市伝説が流行った時代に子供だった。

「んなやついるわけねーだろ。くだらねー」と言い捨てた少年時代の自分が脳裏に浮かぶ。

「この車六十五キロだぞ!! お前の知り合いか!?!」

カメラ片手に世界を回って来た黒山だが、こんな奴を見たことはなかった。ましてや日本では言うまでもない。彼は割と本気で焦っている。

そんな彼に対して夜風の表情は明るかった。まるでヒーローを目の前にした子供のよう。

助手席の窓を開け、外にいる男に向かって言う。

「このヒゲが急に私を車に乗せたの！ 誘拐犯よ誘拐犯!!」

夜風の言葉を聞いた青年の顔は眼光が一段と鋭くなり、黒山を睨みつけた。彼の中では黒山＝誘拐犯という考えが確信される。状況を見ればまあ間違っちゃいない。

「お前人を犯罪者呼ばわりするんじゃない！ こいつが勘違いするだろ！」

「事実よ事実！」

ママチャリの男は並走しつつ口を開いた。

「こいつがエロビデオの監督か!?!」

「ええそうよ！」

「おいお前は何か勘違いしている！ 違えぞこの野郎！」

黒山は大声で否定する。名だたる映画祭で賞を獲っているが日本では無名の監督。

ただでさえ映画監督というのはメデイア露出の多い演者と違い、一般人からしてみれば知名度は低い。加えて黒山の作成した映画は現在日本では見つけることすら難しい。

一握りの映画に詳しい人間たちからしてみれば彼の存在は有名ではあるが。

だからこそ「黒山監督ですよ」と声をかけられたことなど数える程しか無く、当然エロビデオの監督だと言われたことも初めてであった。

だが青年からしてみれば黒山が何を言おうと関係ない。

知り合いの女子高生がヒゲの男に誘拐された。しかもそいつはエロビデオの監督だ

と聞いている。

はいそうですかと引き下がらるわけがない。

彼は昨夜のレイによる不審者情報を聞き念のため、大学に行く前にレイとレイが小学校の友人と合流する地点まで見送った。

その後偶然夜風を発見した所で、彼女は青年の目の前でスタジオ大黒天のワゴン車に引きずり込まれた。状況を見れば言い逃れは出来ない。

男は更に速度を上げ、ワゴン車よりも前に出て、スケートボードの様に自転車のサドルの上に立ちそこから車へと飛び移った。

車体の左側に横向きにしがみついている。時速六十五キロで走る車の空気抵抗に力で耐えながら、夜風が開けた窓から中に入り込んだ。

この場にいるのが夜風と黒山でなければ抱く感想はドン引きであろう。

まるでアクション映画のワンシーンの様な光景に思わず黒山も笑いが漏れる。

「ハハッ……何だお前大道芸でもやってんのか。どうだ、ウチでスタントマンとかやるか?」

だが黒山を見る夜風と男の視線は冷たい。

「おい、こいつ男まで……」

「違えよ!」

「降りたら警察に届けましょ」

「だーかーらー！ 違うつての！」

夜風をドア側に寄せ、彼女と黒山の間にも男はいる。とりあえず、万が一にでも夜風に危害が加えられないような位置を男は保持しつつ、車が事故を起こせば危険であるので暴れることはしない。

「……そういえば、自転車は平気なの？ 置いて来ちゃったけど」

「……あ」

青年の移動手段は基本的に徒歩か自転車である。それを豪快に乗り捨ててしまった。

「……このヒゲに弁償してもらいましょ」

「これに関してはお前のせいだろ」

そのまま三人を乗せたワゴン車が走って行った。

(……遅い)

柗雪は手元の時計を確認してそう思った。彼女の相棒であり雇い主でもある男、黒山墨字は未だ姿を現さない。

今日は新発売のシチューのCMを黒山が発掘した新人女優で撮るといふから、柗は黒山の指示通り先に現場に入っていた。だが黒山はまだ来ない。

何かに手間取っているのか、果たして。

「あ、来た」

そんな時、彼女の見慣れたワゴン車が駐車場に姿を現す。

停車しドアが開き、降りて来たのは三人だった。黒山と、制服を着た高校生と思われる少女、そして見たことのない青年。

まだ幼さの残る容貌と、今の時間帯に制服ではないことを考えると大学生だろうか、と柗は思った。

今日の撮影は「父の日に少女が仕事帰りの父親のためシチューを作る」という内容のため少女の方が、黒山の言っていた今日の役者だろうと柗は予想する。

だとするともう片方は何者なのだろう。

「暴れる夜風を抑えてくれて助かった」

「そんなことしなくて良いのよ!」

「いや、事故つたらまずいだろう……」

「そうだ、もつと言つてやれ!」

「いや、俺あなたへの警戒解いた訳じゃないんで」

黒山と夜風の距離は一定を保たれている。もつと言えば、近づこうとする黒山を夜風が避けている。

そしてその間に、夜風を黒山からガードするようにして立っている青年。

三人の空気は良くなかった。

それにしても、初対面の相手からここまで警戒されるとはある種の才能ではないだろうか。多分、また黒山が何かやらかしたのだろう。と、今日の主演と思われる少女、そして監督である黒山の関係は一目で分かるほどに良くない。

今日の撮影には重要なクライアントが参加する。この業界では信頼が最も大切だ。

もしこれからの撮影が不和によって上手く行かなければ、と決してありえなくない未来を想像して終は思わず冷や汗をかく。

そもそも今日は、本来他の女優を起用するところを黒山の意向によって変更したのだ。

「役者と監督の仲が悪くて撮影は上手くいきませんでした」ということなど許される筈がない。

大丈夫、あの黒山墨字だから大丈夫。

かつて柗が高校生頃の頃、講師であった黒山と出会い、映像に関する技術を教わり、そしてコンビを組むまでに至った日々を思い出す。

黒山は確かに滅茶苦茶な男ではあるが、やる時はやる男だ。

それは近くで見ていた自分が一番知っている。だから大丈夫。

柗は自身に言い聞かせた。



「スタジオ大黒天の黒山と柗です。小さいけれど一応ちゃんとした会社なの」

撮影セットの横に置かれたテーブルを黒山と柗、そして反対側に夜風が挟むように座っている。

そして夜風の背後には青年が立っている。

「このヒゲのせいで説得力ないかもだけど……ほら謝って下さい」

「やだ」

「謝れ」

「やだ」

頑なに謝罪しない黒山と、それをさせようとする柗。

スタジオ大黒天の社員はこの二人のみ。

会社における立場としても業界に携わっている年数ににしても、黒山の方が上のはずなのだが人間的にしっかりとしてるのは柗の方だった。

「この子にうちの事務所入って欲しいんでしょ!？」

「うん。でも嫌だから謝らない」

「このヒゲガキオラア!!」

何故か幼児の言葉使いをし始めた黒山についに柗はブチギレた。若いのに大変だな、と青年は心の中で柗に同情した。

それと同時にこの会社大丈夫かと不安になる。当然のことであった。

「まあ…場所が場所だから基本的には信用したけれど……」

「ほんと!?! じゃあうちに——」

「いや待て景。この会社はヤバイだろ。柗さんはマトモだがもう一人は……」

「……確かにそうね」



「ちよ、ちよつと!? 本当に謝りなさいよこのヒゲ!」

目の前に準備されているセットはごくありふれた台所のものであり特におかしいところはない。

現場には多数のカメラや関係者がおり確かにちやんとした撮影なのだろう。

故にいかがわしい撮影という誤解は解けた。

だが、それだけで目の前の二人を信用できるかと問われれば答えはノーである。特に黒山。

「私はもうこの人が生理的に無理なのよ」

「あー」

「『あー』じゃねえだろ!!」

黒山に中指を立てる夜風。そんな彼女の言ったことに同意する終。

「お前もフォローしろよ助監督だろ! あいつはマジで『金の卵』なんだよ」

「誰が『金玉』よ訴えるわよ」

「無意識に聞き間違いついてまでキレてますよ。心底信用されていないからもう無理だつて」

キレル夜風と、それを見てもうスカウトは不可能だと悟る終。夜風の黒山に対する好感度は地の底まで落ちた。

「……帰るか。」

「ええそうね。今日日直だから 早く帰りましょ」

「柘さん、車出してもらうこと出来ます?」

「柘さん、車出してもらうこと出来ます?」

「ええそうね。今日日直だから 早く帰りましょ」

「あーあ。せっかくお前を主演にCM撮る予定だったのにな」

「……CM?」

CM。その単語に夜風は氣を取られた。

映像メディアを点ければ誰だつて目にするソレの主演が自身だと聞けば当然の反応だ。

「ああ。新人の役者にはめつたにないチャンスだ。役者稼業の入口としては贅沢なくらいだぜ。まあでも——」

黒山の口角が上がる。挑発するような口調で続ける。

「要するにお前腰抜けだろ? 初めてスタジオ見てビビっちゃった? いいよ帰れ帰れ自称役者(笑)。年上の男に守られてお姫様気分か? オイオイ」

「なっ……」

黒山は悪人の顔をしていた。人を小馬鹿にした様な表情で夜風の神経を逆なでする。

彼がもし役者であつたならば、こういつた役にハマるだろう。

夜風は顔に青筋を立てている。対して青年の表情は動かない。

あまりにもあからさま挑発、流石の夜風でもこれには乗らないだろう、黒山の夜風に発破をかけるという意図が見え見えだ。

そう思っていた。

「——私は役者よ!! 演つてやるわよ!! 見てなさい!!」

夜風は乗つた。

無事黒山の挑発に乗せられてブチ切れ、やつてやろうという気持ちにさせられた。

マジかお前。青年はそう呟く。

「あ、お前も残つとけよー!」

青年に右の人差し指を向けながらそう言つた黒山。

元より夜風一人をこの場に残すつもりも無かつたので別に構わないが、終に親指を立ててグッドのポーズをしている目の前のヒゲに対して何だか腹が立つてきた。

それはそうと、友人に連絡を入れるため一旦外に出る青年。

体調不良により休む、と鼻をつまみながらそれっぽい声で友人には連絡した。

帰つてくると、夜風と黒山は既に撮影の準備に取り掛かっている。

とは言つても、衣装としてはエプロンを一枚着るのみであるが。

夜風は通っている高校の制服で撮影をするようであるが、それで差し支えないのだろうかと青年は思う。

制服から学校を特定されそれが住所に繋がる、そういう心配がある。

だがまあ顔を出す時点で一緒か、と彼は一人納得した。

「いや……なんかその、ごめんね？」

柊が青年に近づきそう言う。

黒山への容赦ない言動を見るに、彼女も苦勞しているのだろう。

「……お疲れ様です」

青年は彼女を労った。



「——父の日にシチューを。新発売のシチューのウェブCMだ。お前は一人で初めてキッチンに立った少女。仕事から帰ってくる父親のために慣れない手つきで手料理を作っている。喜ぶ父親の笑顔を思い浮かべながら味見をして終わり」

黒山が撮影における夜風の役の背景を説明した。

父親。その単語に青年は反応した。

夜風にとって父親とは家族を捨てた憎むべき存在であり、手料理を振る舞ったことなど無い。

それを彼は知っていた。

夜風の方を見ると、今のところ特に意識している様子ではない。

「簡単だろ！　しょうもない企画だが金にはなる！　演れ！」

「後ろにプロデューサーとクライアントいるから言葉選べよマジで」

歯に衣着せぬ黒山の発言に青筋を立てた椀が彼の頬を抓る。

青年はスタジオ大黒天の関係者ということで撮影現場にいることを認められ、黒山と椀の後方から夜風を見ていた。

黒山は現場の人々に「ウチの新人スタッフだ」と青年のことを紹介していたのが気に食わないが。

彼にはスタジオ大黒天のスタッフになることを承知した記憶などない。

また、その様な事実も無かった。

第一彼には映画やドラマなどの撮影に関する知識は無い。

そんな彼は黒山の発言にはドン引きである。

確かに彼にとってはそうなのかもしれないが目の前で言うか普通。

彼は今まで様々な人間と出会ってきたがここまでののはなかなかない。

「要するにこの大きなリカちゃんハウスの上でシチュー作ればいいのよね？」

「そうだ!!」

「じゃそう言いなさいよ。話が長いのよ」

「ああ!?! やんのか!?!」

「ケンカすんな!」

夜風の言葉にキレル黒山にキレル柊。

その様子を見てクライアントがプロデューサーに「あの人達本当に大丈夫ですか？」と聞いている。

青年は何だか胃が痛くなってきた。

大丈夫、夜風なら演じさえすればこの場をうまくまとめられる。

彼は自分に必死に言い聞かせた。

「テスト! テストよーい」

柊の声が場に響く。彼女の手に持つカチンコが鳴った。

まるで熟練のシェフのような手さばきで人參の皮を剥き、玉ねぎを刻み、具材を炒めて更にフランベまでするという圧倒的な料理スキルを見せつける夜風。

「カアアアット!!」

そうじゃない!

青年は心の中で叫んだ。彼の胃痛が増した。

「達人かお前は!!」 『初めて一人でキッチンに立った少女』の役だぞ!! 真剣にやれよ!!」

「真剣よ!! 味見してみろ!」

「『真剣に作れ』じゃなくて『真剣に演じろ』ボケ!」

口論をおっぱじめた黒山と夜風。

その横で終は焦っていた。夜風景は芝居を全く分かっていないと。

CM撮影はこの日が初めて、だから仕方ないとは決してならない。

黒山や終の身を置く映像業界はスポンサーや広告など役者や監督を通じて常に多額の金が動く。

故に信頼がなければ商売が成り立たない。

であるが、この状況。誰の目にもマズイ状況であることは明らか。

青年は今すぐこの場から逃げ出したい。

黒山の意向により夜風をこの現場に起用することを了承したプロデューサーは今の状況に大変焦っており、クライアントはキレている。

クライアントは怒りの籠った目で青年の方を向いた。

彼らは目の前の青年がスタジオ大黒天のスタッフだと聞かされている。故にこうなるのは当然だった。

プロデューサーの男が小走りで青年の方に向かって来る。

「おいキミ、あの役者は大丈夫なのか？　いくら黒山が目をつけた新人とはいえ……」

「……申し訳ございません」

「あのなあ、申し訳ございませんじゃ済まないんだよー」

青年は頭を下げて謝罪した。

青年は世の中の理不尽には慣れていたため行動に移すことは迅速だった。

腰を直角に曲げた見事な謝罪のポーズである。

（ああっ……本当にごめん！）

その様子を見た終は心の中で謝った。

今はとてもじゃないが手が離せない。

「お前芝居を何だと思ってる？」

「……思い出す」とっ」



夜風のその答えを聞き、「他人を演じる」ことが芝居だと考えるクライアントはついに夜風が本当に役者なのかまで疑い始めた。

それに対して頭を下げ謝罪するプロデューサー。この男も被害者の一人であると言える。

そう考えると青年は急に同情心が湧いた。

「お前なあ……分かつているなら早く演れよ。初めて親父に料理を作った日を思い出せ」

黒山は続ける。

「カチンコの合図と共に過去に戻りカチンコの合図と共に現在に戻ってくる。『メソッド演技』。過去の自分の感情を現在に蘇らせる。それがお前の芝居だろ」

プロデューサーとクライアントは黒山の発言を理解できていない。

「過去に戻る」そんな芝居をする人間は夜風以外にはほばいない。

「……私父親に料理を作ったことないの。戻るべき過去がないわ……」

「……この際相手は誰でもいい。初めて手料理を作った日を思い出せ。俺が撮りたいのはお前の愛情だ。誰かのために努力するお前が観たいんだ」

黒山の言葉を受け、夜風は何かをはつと思いついた様な表情になる。

彼女の記憶が思い出される。

「カレーライスだったわ」

夜風はかつての自分を思い出し再び料理を作り始める。

彼女の頭の中には、母親が死んで間もない頃の自分がある。

夜風とその幼い弟と妹に料理を作ってくれた彼女の母親は数年前に他界した。

幼いきょうだい達は毎日泣き、そんな彼らに笑って欲しくて夜風は思い出の味であるカレーを作ろうとした。

遺品の整理で夜風家に訪れていた青年は手伝うことを申し出たが、当時彼に対して心を開いていなかった夜風はそれを断る。

初めて包丁を握る彼女をルイとレイは心配そうに見ている。

急に料理の手際が悪くなった夜風に周囲の人間は驚く。

その姿はまるで初めて料理をする子供のよう。

そんな姿を見て黒山は確信した。夜風がメソッド演技に入り込んだと。

夜風は玉ねぎを切る際、自身の指に刃が当たってしまい出血する。

「——とても痛かったけど2人が泣くといけないから笑ってごまかしたの」

夜風はそう言って笑う。

柀をはじめとした現場の人間は夜風の芝居に息をのんだ。

この業界に長いこと在籍している者でさえ心を揺さぶられる。それは数年の付き合いがある青年でも同じ。

彼らは一様に確信した。夜風景は本物だと。

「味は？」

「コゲて苦くて皆で笑っちゃった」

## 12

撮影帰りの車内。

助手席に座った青年の隣で柵は運転している。

「いやー、本当にごめんね？　うちとは関係ないのに謝らせちゃって」

「別に平気です」

「本人がそう言っただし良いんだよ」

「黙ってるヒゲ」

終は青年が撮影中にプロデューサーから叱られたことについて謝っている。それを別に気にしていない青年と黒山。

夜風はパソコンで先程撮影された素材を見て一人笑っていた。

「いつまで素材見て笑ってんだよ気持ち悪い」

「わっ……笑ってないわよ」

「カメラの前で演じたの初めてだったもんねけいちゃんは」

黒山に指摘された夜風は再び手元の液晶に視線を落す。そこにはシチューの味見をする夜風の姿があった。

「……うん驚いたわ。私って思ったより綺麗なのね」

「は？ あんな半端な芝居しといて何が綺麗だバーカ」

「な、何よりその言い方！ 皆褒めてくれたわ！」

「素人の言葉に浮かれてんなバアカ!! お前の才能はあんなもんじゃねえんだよ!!」

「何よそれ!! ツンとデレどつちよ!」

「ツンだよ!」

「暴れんなお前らあ!」

行きと同じ様に喧嘩をおっぱじめる夜風と黒山、そしてキレる終。

車は蛇行するが助手席の青年はもはや動じない。スタジオ大黒天の空気に慣れてしまった。

どうにか終と青年で夜風と黒山の喧嘩を収める。

この一日で青年の中で終に対する好感度は爆増した。

「ねえ私綺麗よね？」

落ち着いてしばらくした後。夜風が青年の方を向いてそう尋ねる。

「ああ綺麗だ」

即答だった。

百城千世子の影響で様々な映画をこれまで見て、素人ながらに多少は目が肥えている彼だったが、画面の向こう側にいる名だたる役者と比べて遜色無かったと彼は本気で思っている。

「ふふ、やっぱりそうなのね」

夜風はその答えを聞いて誇らしげである。

「ねえ例えばどんなところ？」

車の前列席にぐいつと身体を乗り出した。

「そうだな、上手く言葉に出来ないが…あの場で景だけが初めてカレーを作ったあの日にタイムスリップしたみたいなの？ 本当に中学生に戻ったみたいだった。よくあんな

の出来るな、すごいよ」

「や、やっぱりそうかしら?」

「ああ」

青年に褒められ嬉しそうな夜風を見て柗は雷に打たれたような衝撃を感じ、何かに気がついたようだ。

黒山は頬杖をつきながら車窓の外に広がる風景を見ていた。

柗は己の好奇心に従い聞いてみることにした。

「そういえば、二人つてどんな関係なのかなあつて……」

「関係……普通に友達ですよ。なあ景」

「ええそうよ」

友達。柗はその単語を自身の中で反芻する。

青年と夜風は距離感が近くそれを気にしているそぶりもない。

話を聞く限りかなり昔から交流があるようである。

柗がこの短時間で得られた情報はその二つのみであるが、彼女の中の女の勤と呼ばれるものが反応している。

夜風は少々抜けているところが、青年の方は主に百城千世子の存在によりそこら辺の感覚はバグっているのだが柗は知らない。

が、とにかく本人たちがこう言っているのだしと深入りすることはしない。しつかり大人だった。

「へえ仲良いんだね。そういえば今日はどうしてここに？ 今更だけど」

柘は青年がここに來た理由を知らされていない。

夜風は黒山が無理やり連れて來たと聞いているが。

明らかに怪しい黒山と夜風を一緒にさせてはいけなさと考えて一緒に來たのかな、程度に柘は考えていた。

「黒山さんが景を車に引き摺り込んだのを偶然発見しましてね。これはヤバイと思って追いかけてきたんですよ」

「……ん？」

柘は青年の回答に違和感を覚える。彼は黒山の運転する車を追いかけてきたと言った。しかし彼は現場に到着した時は一緒に車に乗っており、まさか走って追いつける訳もない。

「あれ凄かったわ。私あんなに速く漕げないもの。何かコツとかあるの？」

「兎に角全力で脚の回転を上げることだな」

「案外単純ね。私も今度やってみようかしら」

「危ないし怪我するかもだから止めた方がいいぞ」

「分かったわ。じゃああの車に飛ぶやつは？」

「グツとやってピョーンって感じた。こつちもやらない方がいい。ミスって景の顔に傷が残っちゃ仕事が出来なくなるかもしれないからな」

「ちよ、ちよつとストロップ！」

予想していなかった単語のオンパレード。

柘は青年が最初何かを漕いでいたところまでは理解できる。彼女はそれを自転車だろうと予想した。

自転車で追いかけているながら大声で呼び止めたという状況は有り得る。

しかし、「車に飛ぶやつ」とは何のことだ。撮影以外でまさかそんなことをする人間を柘は知らない。

「あ。ここで止めてもらっていいですか」

柘の方を向いて青年はそう言った。

道端にはカゴが潰れたママチャリが転がっている。

ここは青年がスタジオ大黒天のワゴン車に飛び乗った場所だった。

「何かあったら電話しろよ、景。黒山さんと柘さんもさようなら。ここまで送ってくれてありがとうございました」

「うん。またね」



車から降りた青年は自転車に乗って帰って行く。

## 第四話

13

景のまるで憑依の様な演技は「メソッド演技」というらしい。先日番号を交換した終さんから電話で聞いた。

過去の自分の感情を自在に蘇らせるといふ、俺には想像もできない様な世界の話だ。

シチューのCMの撮影を行なった日の後にも、景は終さんと黒山さんの三人で撮影現場に向かったという。

役者としての、彼女の二度目の仕事である。

時代劇の撮影現場での、侍に斬られる少女を見殺しにするエキストラ。

演じる個人にスポットライトは当たらないが、彼ら無しでは撮影が成り立たない大切な存在である。

終さんは撮影のため着物を着た景の写真を送ってくれた。本当に美人というのは何を着ても似合うのだから羨ましい。

ルイとレイの二人もその写真を見て喜んでいたのでか。

終さんから聞いた話によると、景は役に入り込むあまり殺される少女を見捨てること  
がどうしてもできずに主演俳優にドロップキックを食らわせたらしい。

そのせいで事務所同士の仲が悪くなったり、芸能界に悪評が広まったりしたら大変だ  
と冷や汗が流れたが、終さんとの会話中であつたのであくまで平静を装う。

その後黒山さんのアドバイスやらがあつて、自身の過去に戻る景は役者としてまた一  
つパワーアップしたのだとか。

自分を通して役を追求する、芸術家の本質。

終さん曰く「不知の知」の喜び。

何はともあれ、成長したのなら良いことだ。

それともう一つ。

知って驚いたが、黒山さんはカンヌ、ベルリン、ヴェネツィアの世界三大映画祭の全  
てで入賞している実力者だった。ただの頭おかしいおっちゃんではないようだ。

インターネットの記事のみではとても信じられなかったが、海外の賞を受賞した際の  
映像に黒山さんと終さんの両名はバッチリ映っていた。それを見れば信じる他ない。

やはり芸術家には変人が多いというが、彼もその例に漏れないらしい。

景が人気漫画を原作とした映画「デスアイランド」のオーディションに参加する。こちらは柊さんから聞いたのではなく、景本人から聞いた。

俺も以前出版社の公式アプリで無料分を読んで気に入ったので単行本を買った。特に三巻からの展開がマジ面白い。

この映画はスターズが主催するらしく、出演する若手俳優二十四名のうち半数にあたる十二名がスターズに所属しており、残りをオーディションで決めるのだとか。

その都合により発記者会見に出ていた百城の透明感というか、無邪気さというか、そういうった「天使」としての姿は、彼女を見慣れている俺からしても綺麗だった。

思わず下宿のテレビで会見を見ながら一人拍手したくらいだ。

ただしその本性はとも天使とは言えないものだ、と百城のファンに言ってみたいがそんなことはしない。

彼女の築いてきたモノを崩してしまうし、彼女のファンからしてみれば身近に男がい

るといふ事実だけで色々と想像して脳が破壊される人々もいるだろう。

最悪俺はブチ切れたファンに刺されて殺されるかも。

芸能人にとってそこら辺は本当に大事だ。透明感というか、処女性と言うべきか。特に百城のような売り方をしている女優には。

俺だってそれくらいは弁えている。

この欲求は、全校朝礼を行なっている最中の体育館でいきなり大声出したらどうなるのだろう、とつい考えてしまう現象と同じものだ。

誰もが一度は考えるが、結局はやらない。そんな様なもの。

因みに俺だって最近ファンとなった役者である「湯島茜」の友人を名乗る男が実はこの子はこういう人間なんですよ、と饒舌に喋り出したら複雑な心境になること間違いない。

因みに湯島さんの出演作品は子役時代のモノから大体目を通した。

何というか、彼女からは母性を感じるのだ。くどくない関西弁なのも良い。言っていて自分でもキモイと思うが事実なのでしようがない。

百城の奴に今度湯島さんと共演する予定があるか聞いてみよう。アイツ色々な映画やドラマに出ているしもしかしたらあるかもしれない。

もし都合が合う様子だったら百城を経由してサインを貰うこととか出来るのだろうか

か？

……しかし、先日あの会見で出演するのは百城ではなくウルトラ仮面ことアキラ君の予定だったはずなのだが、会場に現れたのは百城の方だった。

前日にアキラ君と電話した時は「明日のデスアイランドの記者会見に出るからもし予定が合えば見てくれよ」と言っていたので「頑張れ、応援してる」と返事した。

こういうのを見ると、芸能界というのはやはり大変な世界だと改めて思う。

直前まで関係者にはアキラ君が出ると予告していたので、恐らく直前で交代したのだろう。

大人の事情というやつなのだろうが、アキラ君にはこれを糧に更に頑張ってもらいたい。

とりあえず百城にはお疲れ様という言葉と、客席から登場するパフォーマンスの際にパンツの写真撮られてるかもしれないから気をつけるよという二つの内容を送ったのだが、後になって「これセクハラじゃねえか」と心配になってきた。

昨今のハラスメントに敏感になって世の中の的にはアウトな気がする。

メッセージを消去するか迷ったがその頃には既読がついていた。

とりあえずそんな意味は無いのだと、単なる心配なのだと自分に言い聞かせて堂々とすることにした。

『これセクハラだよ？』

まあそうなる。

とりあえずスターズに訴えられたら勝てないので電話でめっちゃ謝った。年上の威厳など無いに等しい。いや、元々無いが。

おそらく百城は今の段階で俺の生涯年収くらいは稼いでいるのだろう。

彼女は完全に社会的に格上だ。

『じゃあ今度遊んだら許してあげる』

とのことだったので当然了承した。

行き場所は動物園でも遊園地でも、俺が決めて良いらしい。

それならば、前回は遊園地に行ったので今回は動物園が良い。と言っても、前回は四ヶ月ほど前だが。

彼女はとても忙しいのだ。食事を一緒に摂ったり、数時間街をぶらぶらする程度ならば今までも可能だった。だが、百城が丸々一日のオフをもらい、尚且つ俺の予定も同様により一日中空いている日は滅多にない。

別に数時間で良いじゃないかと言われればそれまでなのだが、俺はせっかく料金を払って利用する施設は一日中滞在していたい人間である。隅から隅まで園内をゆっくり楽しみたいのだ。

果たしてこの約束もいつ果たせるやら。

ただし、並立されている昆虫園には絶対に行かないが。俺は昆虫、というより虫全般が嫌いなのだ。

フォルムとかそういう問題ではなく、虫の持つ全ての要素。もはや俺にとって遺伝子に刻まれた拒絶反応に近い。

原因はトラウマなどではない。

母親の子宮から出てきて、成長して自我を持った頃から変わらない性質だ。

そんな俺なので、昆虫が好きで家で飼育までしている百城はある意味尊敬している。別に虫好きになりたい訳じゃないが。

そんなやり取りが昨夜あった。

大学の授業も終わり、今日はバイトも無いので何をするか決めあぐねているとスマホに着信が入る。

スターズのアキラ君からだった。

『急にメッセージごめんね。もし大丈夫なら今日いつもの場所で七時から会えるかい？』

何だかおっさんが不倫相手に送るような文章みたいなのが気になったが特に気にしない。



彼は今を時めくイケメン俳優なのだから。

俺は「問題ない」と返信した。

15

都内の某スポーツジム。

スタッフは全員がスターズをはじめとした芸能界の関係者で、それ故にプライバシー保護などが頑丈らしい。アキラ君がそう言っていた。

実際過去に何度かテレビで見るとような有名人を目撃したことがあり、中には握手をしてくれた俳優さんもいた。

何というか、やっぱり本物はオーラが違うのだ。

本来ならば俺みたいなのが利用出来る筈はないのだが、アキラ君の紹介によりたまたま利用している。

オーナーのご厚意により割引はしてもらっているが利用料はきちんと払ってる。

アキラ君とは数年前ランニング中に偶然出会い仲良くなった。

まだ高校生の頃百城の奴が「撮影見に来てよ」と言っていたのでギャラリーとして現地向かい、百城の撮影が終わった後、人が少なく丁度良さそうな河川敷の土手があったので走っていた。

運良く当選した東京マラソンをひと月後に控えていた俺は練習として三時間ほどそれなりのペースで走っていたのだが、ある時マスクとフードで顔を隠した男が抜き去る。

季節外れのその格好に一瞬不審者かとビビったがただのランナーらしい。

が、俺を抜く際にチラリと横顔が見えた。超イケメンだった。

しかも汗だくなのにフルーティな匂いがした。

百城の影響を受け人の横顔を気にする癖がついてしまった俺の目は誤魔化せない。

イケメンには顔で勝てないにしても体力では負けたくないので俺はスピードを上げて彼を抜く。決して嫉妬からではない。

そのまま距離を空けようとしたら、謎のイケメンも焦ったようにスピードを上げた。俺も追いつかれないように更にスピードを上げる。

そこからは名前も素顔も知らない彼との、ただの争いではなく男の意地と意地のぶつ

かり合いだった。

身体能力の限界に挑戦した一時間だった。俺の背後三メートルほどの位置を彼は終始キープし続けた。

どちらが「もうやめよう」と言ったわけでもなく、夕日が落ちて暗くなる頃俺たちは十数キロのコースを一周してスタート位置に戻ってきた瞬間足を止めた。

その場に座り込みながら「中々やるな」「そっちこそ」という感じのやり取りをした気がするが、俺も体力は限界だったので憶えていない。

途中から彼はマスクもフードも上着も外して走っており、そこで彼が俳優の星アキラだと気がついた。

彼は人気芸能人だったが別にそれによってどうしたということも無く、向こうもその方が気持ち的にも楽なようで、その後二人で銭湯に行つて飯食つて連絡先を交換した。

芸能人がその日に初めて会った人間に連絡先を渡して良いのかと尋ねたら、向こうは百城経由で既に俺のことを知っていた模様。

百城から聞いていた話と、そして実際に会ってみて、俺ならば信頼に足るそうだ。

一体アキラ君に俺のことをどのように語っていたのかは知らないが、とりあえず彼の俺に対する印象を良くしてくれていた百城には感謝のメッセージを送った。

それとどうやら、アキラ君は百城が撮影していた翌日から現場入りする予定だったら

しく、あの日は現地に前乗りして身体を動かしていたらしい。

そういうのを後日彼から聞いた。

そんな出来事があり俺とアキラ君はそれからも定期的に連絡を取り合ったり会ったりする仲になった。

俺の自意識過剰でなければ友達と言えるだろうか。

「やあ。急に呼び出してすまない」

トレーニングルームに入ると、そこには汗を若干かいているアキラ君がいる。

既にトレーニングを始めていたらしい。俺はスポーツウエアでここに来ているのですぐに始められる。

ところで、運動した後は速やかにタンパク質と糖質を摂取することが大切だ。リカバリープロテインは持って来ているが、それだけでは物足りない。

今は午後六時半。

特に時間は決まっていないもののトレーニングが終わるのは八時くらいだとして、その頃には互いに空腹だろうと予想される。

そこで、この後一緒に飯とかどうだろうか。

値段が高くなっていい感じの飯屋を見つけたのだ。個室であるのでアキラ君が使用しても問題ない。

もちろんアキラ君の都合が合えば、だが。

「いいね、楽しみだよ」

そう言つてニコリと笑うアキラ君。やつぱりエグいほどのイケメンだ。

俺が女だったら惚れてるわこんなん。

そうと決まれば早速動き始める前に店舗へ電話予約をした。

そこからは個人で気になる部位を鍛えたり、互いにフォームを確認し合つたりして気がつけば百分ほど経っていた。

筋トレというものに出会つてからというもの、送り込まれた血液により筋肉がパンプする感覚がクセになる。

このためならばどんなキツイメニューだってこなせるだろう。

アキラ君に至つては筋トレ、というかスポーツ全般が得意であることはメディアで広く広く知らされ、そつち方面の仕事もちよくちよく来るらしい。

実際にテレビではたまに見る。

これらの結果は彼の努力の賜物だ。

十八歳の爽やかな好青年である「星アキラ」としてのイメージは崩さぬようにゴツクなり過ぎず、それでいて色気のある男らしさは感じられるくらいの筋肉。

先月のウルトラ仮面は舞台がプールであり、そのため水着姿のアキラ君の腹筋が映つ

たのだがその日は朝から奥様方の黄色い悲鳴が聞こえてきたらしい。

シャワーを浴びて、着替えてジムを出た頃には八時半を回っている。

そのまま徒歩で飯屋へ。

当然アキラ君はマスクと帽子で変装している。もし彼が街中で身バレしたら大変なことになるだろう。

席につきアキラ君は変装を解く。

店員が来た時だけカツラと帽子を被れるように近くに置いている。

適当に料理を注文してそれらを食べつつ、他愛もないことを駄弁る。

最初はいつものアキラ君だったが、次第に心の内側に隠していた本音が出てきた。

「……やっぱり、結構心に来るんだよね。……慣れているつもりだったんだけどな」

やはり昨日の記者会見のことを彼は悔しがっているのだろう。

幼い頃から芸能界に身を置く彼は今までに数々の仕事を獲得してきたが、そのルック又は評価されても演技力としてはそうでもない。

元大物芸能人で現在は所属事務所の社長という母親をもつ彼は「ゴリ押し俳優」などと批判されることも珍しくない。

そんな周囲からの評価を見返すために様々な努力を継続している彼だが、成果は今一つ。

いや、素人である俺から見ればウルトラ仮面といい、充分成果として表れていると思うのだがアキラ君に言わせれば「まだ全く」らしい。

「百城君の方が僕より人気がある。数字として結果が出る。……本当に彼女は凄いいよ、一瞬で会場を魅了したんだ」

俺と一コしか歳は違わないが、彼が身を置く環境は俺とは一線を画す。

役者は毎日が闘いなのだ。

容姿も才能も併せ持った新人が日々絶え間なく参入し、それらとの競争に負けることは即ち自分の価値がなくなること。

きつと俺には想像もできないような葛藤や苦悩が彼にはあるのだろうが、そんな中でも腐らないアキラ君を俺は人として尊敬している。

だがそんな健気な彼とはいえ、たまに心が疲れている日もある。彼はまだ十八歳なのだ。

今日のアキラ君はいつにも増してトレーニングを一心不乱に行っていたし色々ともるモノを晴らしたかったのだろう。

そんな日に俺も呼ばれるということは、多少なりとも信頼されているということだ。

いのだろうか。

まあ、とりあえず飲めよということで彼のコップにコーラを注ぐ。

映画などではこういう場合にビールを飲むのだろうが、俺たちは互いに未成年だ。

何より人気若手俳優が未成年飲酒など決してはいけない。

彼は子供たちに夢と希望を与えるウルトラ仮面だ。

「……ありがとう」

ともかくパーツとやって楽になっちまおう。

俺が彼に対して出来るのはこれくらいだ。

役者という職業に対する専門的な知識やスキルがあるわけでもなく、彼と同じ景色を

見ているわけでもない。

俺はたまにこうやって友人として彼と接するしかない。

「デスアイランドの映画が公開されたら初日に観に行くよとアキラ君に言う。

「ふふ、じゃあ頑張らないとだ。ちなみに目当ては百城君と僕のどっちなんだい？」

おい、それは卑怯だぞ。もちろん両方だ両方。満遍なく見るさ。

そういうえば景も出演するかもしれないのか。ただしオーディションに受かればだが。

……ん？

確かこの前ルイが「家にウルトラ仮面が来た」と言っていたな。一度落選したスター



ズの最終審査の時だ。

となると、アキラ君は景のことを知っているのか。

色々あつてすっかり忘れていた。

景はつい最近役者になったばかりであり、出演経験もシチューのCMと時代劇のエキストラの二つのみ。

しかも後者の方はカットされ放送されないと柗さんからは聞いた。ドロップキックの方だ。

世間一般からの知名度は無く、芸能界に親しい知り合いがいるわけでもない。

もし景がデスアイランドのオーディションを突破したら。

景は少々変わっており最初は周りと馴染めないかもしれない。

そんな時アキラ君という共通の知り合いの一人でもいれば、随分気持ち的に楽だろう。そう考えた。

なあアキラ君。

夜風景って知ってる？

俺はそう尋ねた。

その瞬間。

ぶぶつと、アキラ君はコーラを口から吹き出した。勢い良く顔にかかった。少し鼻に

コーラが入り込む。炭酸の刺激でピリピリする。

いきなりどうしたのだろう、そんなに驚くことだろうか。

「す、すまない!」

いや、全然問題ない。

そう言つて俺は顔を拭きながら笑つた。

16

最近我が家から何かと金が出ていく。

俺の大学進学や下宿の契約から始まり、上の妹が「制服が可愛いから」という理由で今年から私立高校に進学、更に来年には下の妹も高校に進む。

短期間に結構な額の金が出ていったし、これからも出ていく予定だ。

しかも何やら親父が再婚しそうな雰囲気だ。

俺は本人から何も言われていないが最近親しくしている女性がいるらしく、食事に行くこともあるらしい。妹からの情報である。

もしかしたら結婚式を行うかもしれないし、そうしたら更に金がかかるだろう。

だからと言って別に生活が困窮しているわけではないのだが、長男として、そして現在最も家計を圧迫している要因の張本人としてその辺りはかなり気にしてしまう。

親父は世間一般よりも多少高めの給料を貰っているとされた。

現在はスーパードと弁当屋、そして最近新しくスタジオなどに機材を運ぶバイトを始めた。

大学に通い勉強しながらやるのは結構キツイが、無理ではない。最悪留年しないくらいに成績は取れるだろう。俺は結構要領が良いのだ。

しかも俺は凄いに気がついてしまった。

俺はこれまで一日の睡眠時間を七時間は取っていたが、これを二時間ずつ減らせば月に六十時間も自由に使える時間が増えるのだ。

それだけの時間があれば勉強など大体のことはできる。俺つてもしかして天才なのではないだろうか。

そんなことがありつつ。

現在バイト終わりの俺は東京の街中を特に理由もなくぶらぶらしている。

さっさと家に帰ってシャワーを浴びて勉強した方が良いのだろうか、夜中の東京を当てもなく歩きたいという欲求には勝てなかった。

何となくカツコいいから。

帽子をいつもより目深に被って目線が隠れるようにして、道端の椅子に腰掛け道行く人々を観察すれば手っ取り早く秘密警察っぽい気分になれる。

流石に恥ずかしいからやらないが。

時計の針は夜の八時を回ろうとしている。

腹が減ったからこのまま牛丼でも食うかと思つたその時、ポツンと存在する小さな公園のベンチで見慣れた制服を見た。

白と水色のシンプルなセーラー服。

それを着ているのはこれまた見慣れた黒髪の少女。先日スタジオ大黒天の役者となつた景だつた。見間違ひではない。

だが何だか様子がおかしい。ぼーっと前を向いている。

今日は確かデスアイランドの三次審査だつたはずだが、また何かやらかしたのだろうか。

とりあえず声をかけてみることにした。

目の前に立つても気づいていない様子は無し。声をかけながら肩を揺する。ようやくビクリと反応して俺の方を向いた。

「……驚いたわ。いつからそこにいたの？」

いや、本当に気がついていなかったのか。景に今さつきからだと伝える。

というか家に帰らなくて良いのか？

ルイとレイは事務所であの二人と一緒にだろうがやはり景がいないと寂しいだろう。

「……今日は、ちょっと一人でいたい」

やべえめつちや落ち込んでいる。審査で何かあったなこりやあ。

ずーん、という効果音が聞こえてきそうだ。

とりあえず話を聞こう。こういうのは第三者に話した方が楽になるんだ。別に俺は他人に話を流したりしないから安心してほしい。

しかも俺は知っている。

女性はこの感じで精神的に参っている時が危ないんだ。

俺は散々同じ様なシチュエーションの成人漫画を読んで精神破壊された経験が何度もある。

景は美人だし、ここは都会。それも日本一の。

東京は娯楽の多い都市であり様々な人間が集まってくる。故にそういう目的の男が近寄って来ても不思議じゃない。

別に俺は本人が幸せで納得しているなら口は挟まないが、ルイとレイの泣く顔は見たくないので夜風家のためにもふしだらな目的で近づいて来る男は全員弾き返そう。

「……皆私と同じ様に今回のオーディションに懸ける気持ちがあつたの。暴走する私を制御するために頑張ってくれたのに……」

景の目に涙がジワリと滲み、そして頬を伝った。

一次二次はそれぞれ書類と映像による審査だというのは柊さんから教えてもらつていた。三次審査は実際に会場で演技を行うのだという。

景の話からすると、恐らく数人のグループで審査を受けたのだろう。

そして、時代劇の撮影の際主演俳優にドロップキックをかました様な暴走を役に入り込むあまりしてしまった、という訳か。

うわあ、確かにキツイ。

ソロならともかく集団で審査を受けるとなると一人のミスが全員の落選に直結する。

「私だけ一人で好き勝手やって、審査をめちゃくちゃにしちゃって……」

俺もチームスポーツをやっていたから一人のミスが全体をぶつ壊す怖さは十分知つている。

自分のミスでチームの雰囲気や試合の流れが悪くなって、他のチームメイトは流れを元に戻そうと必死になるのだが自分だけ取り残されて泥沼にハマっていくあの感覚。

何というか、脳ミソがふわふわして手足が錆びたように動かなくなるのだ。

出来ることならもう経験したくはない。

自分が当事者になるのは勿論のこと。他校の選手がその泥沼にハマっているのを見るのでさえ精神上よろしくない。

気持ち分かるよ。いや本当に。

しかも、失敗しても大体は許される学生の部活と違い、役者にとつてオーディションというものは一つ一つが自身の運命を左右する重大なものだろう。文字通り参加者は人生を懸けて挑んでいるはず。

それでやっちゃったのか。

「茜ちゃんは、高校やめてバイトしながら今回のオーディションに懸けていたのに……」

うわ、まさか同じグループだった子の背景まで聞かされたのか。

やべえ吐きそう。俺だったら狂ってそうだ。そして俺まで涙出てきたんだけどどうすんだこれ。

俺は結構涙脆いんだ。

既に二十回以上視聴したドラマ版の仁でも今なお泣ける。

しかも俺の身に降りかかった事例を更に濃くしたようなのを語られて、心が痛まない訳ない。

「私、このままじゃ駄目なの。どうしたらいいのかしら」

とりあえずやっちまったモンは仕方ない。

切り替えてすぐ次：に行けたら苦労はしねえんだよなあ。

うん、とりあえず今はとにかく泣いて全部洗い流しちまおう。それが良い。俺は深く考えるのをやめた。

俺の胸に飛び込んでわんわん泣く景。

急に接近してきたことに驚いたが、事情が事情なので今日くらいは別に良いだろう。

いつもなら無理やり引き剥がしていた。

何だか良い匂いがあるが何も考えない。無我の境地に己を持っていく。気を抜けば

俺のマグナムが起立しちまう。

そのまま五分ほど経っただろうか。ようやく景は顔を上げる。目は泣き腫らして真っ赤だ。

「……その、ごめんなさい」

別に問題ないと景に答える。

俺はバックからハンカチの入ったチャック付きポリ袋を取り出すとその中の一枚を



景に手渡す。

俺は毎日こういうこともあるのかとハンカチやテツシユ、更には消毒液や絆創膏は常に持ち歩いている。

備えあれば憂いなしという言葉がある。今までに何度も活躍した。

ルイとレイに懐かれているのも、彼らが公園などで転んだ際速やかに手当てをした経験があったからだろう。

そして今日はこうやって景の役に立った。

一時期「主人から命令される前に完璧な仕事をこなす執事」みたいな存在に憧れていた時期があり、百城で練習していた。

おかげで危機察知というか、空気を読むというか、そういった能力は養われたと思う。あの百城をして「このままでダメ人間になりそうだからもうやらないで」と言わしめたのは結構自信になった。

実際今回のは高校生である彼女にとっては重すぎた経験だ。芸能界に頼れる大人が柘さんと黒山さんしかいない現状であるので、前から付き合いのある俺を頼ってくれて全然構わない。

だが今回の一件は役者としての良い経験にはなったのではないだろうか。いや、むしろそう信じたい。

そう信じなければやっていけない。

それにこういうのは、黒山さんに聞いた方が良さだろう。

凄いな監督らしいし、あの人なら景にアドバイスをくれるのではないだろうか。

「……うん、ありがとう」

そろそろ帰るか。ルイとレイは心配しているだろうし。

ていうかシャツ汚ねえな。景の鼻水とか涙でびちよびちよになっている。

……まあ別にいいか。歩いているうちに乾くだろう。帰って洗濯機で洗えば済む問題だ。汚いけど。

「何だか恥ずかしいわ」

別に状況を考えれば仕方ないと思うが、やはり景も高校生なのだしああいったことは恥ずかしいと思うのだろう。

まあさっきのことを他の誰に言う訳でもないし、俺と景の心の中で留めておけばこれ以上のことはない。

「ふ、二人の秘密ってことかしら？」

秘密……まあそんなところだろう。何だか表現が大げさな気がしなくもないが口には出さない。

「わ、わかったわ」

そう言つて頷く景。

その時、景のポケットから着信音が鳴る。この間のシチュウのCMの給料で彼女はスマホに乗り換えたばかりだ。

「このお金は受け取れない、と返却しようとしていたらしいが景は真面目すぎやしないだろうか。」

「雪ちゃんから……多分向こうにいるレイカルイからだわ」

景はそういつて画面をスワイプし、通話を開始する。

「もしもし」

『——おねーちゃん今まで何してたの!? もう遅いよ!』

この声はレイカだ。怒っているのと心配とが混ざっているようだ。

スピーカー設定なので俺にも声は聞こえる。

「ごめんね。色々あったの」

『事故とかしてない!? 何も連絡とかないから心配だったんだよ?』

「……うん。大丈夫。今から帰るわ」

「あとね、レイカが『寂しいからおにーちゃん呼ぼう』って言つてただけど、おにーちゃんには電話つながらなかったの」

その発言を聞きすぐさま俺もスマホを確認する。

……本当に着信が入っていた。ちょうど働いている時間だったから気がつかなかったようだ。

今日は大丈夫だったから良いものの、万が一緊急事態が起こった時にこれだとまずいな。

スマートフォンオッチでも買っていていつでも着信に気がつけるようにするか？ 検討しておこう。

「彼なら今ここにいるわ。話する？」

『え、おにーちゃんそこにいるの!? おねーちゃんもしかしてずっと一緒にいたの?』

「違うわ。さつき会ったのよ」

『と、とりあえず代わって!』

俺は景からスマホを受け取る。ルイにこんばんはと言った。

『おにーちゃん。おねーちゃんにへ、変なこととかしてない!?』  
変なことって何だよ。

別にいつも通り話してただけだ。景に抱きつかれながら泣かれたのは初めてだが、これは別にレイに教える必要はないだろう。重要な情報ではない。

というかもしかして俺レイに警戒されてるのか？

懐かれていただけにちよつとシヨックだが、考えてみれば高校生の美人な姉と男が夜中に会っていたらそう思うのも仕方ない。

それに最近景と会う回数が多いしな。狙っていると思われるのかも。確かにそれは心配だ。

その後いくらかレイと話し、ルイに代わつた。ルイはいつも通りだった。

景にスマホを返す。

「それじゃあ、今から帰るから一旦切るわ。待っててね」

『うん、わかった』

十分ほど話して景は電話を切る。

そしてスマホをポケットにしまいベンチから立ち上がった。

「さて帰りましょ、もう遅いわ」

このまま直接下宿に帰っても良いのだが、今日は心配なのでスタジオ大黒天まで景を送っていくことにする。

こういう日は最後まで気をつけなければ、何が起こるか分からない。

それに話し相手がいた方が気も楽だろう。

「……してもらつてばかりで何だかあなたに悪いわ」

俺は景のその返答を聞いて首を横に振る。

こういう時はお互い様なのだ。いつもみたいに後でカレーをご馳走してくれればそれで良い。

それで十分釣りは来る。景の料理は本当に旨いからな。

俺は何故かレシピ通りに作っても不味くなる。百城曰く「二種の才能」らしい。そんな才能欲しくなかった。

「そ、そうかしら……」

何だか照れているのか顔を赤くしている。こういう景はレアだな。この光景は記憶に収めておこう。

まあ、何はともあれさつさと帰るか。もう直ぐ八時半になる。

俺たちは公園を出て、駅に向かった。

## 第五話

17

景から「私デスアイランドに出られるわ」とラインが来た。どうやらオーディションに合格したらしい。

景には悪いがてつきり落選したとばかり思っていたのでその事実は意外だった。とりあえず俺はおめでとうと言う。

高い倍率を潜り抜けたということと普通なら手放して喜ぶのだろうが、景にはオーディションにおける一件があるため喜んでばかりではいられない。

「このままじゃ駄目だわ」と景は言っていたことから、本人もそれを自覚している様だ。

それから数日後、公式サイトにて正式にキャストが発表される。

百城とアキラ君をはじめとした十二人のスターズ所属俳優。そしてオーディションを合格した十二名の計二十四名。もちろん景も入っていた。

そして驚くべきことに、その中にはなんと湯島さんも含まれている。あの湯島茜である。

これでデスアイランドを見に行く理由が一つ増えた。

そう思い喜んでいたのだが、俺の頭には一つのこと浮かび上がる。

確か公園でのあの夜、景は「茜ちゃん」と発言していた。

あの時は景が泣いており深く追求できるような空気では無かったので特に気に留めていなかったのだが、景の言った「茜ちゃん」と俺が好きな女優である湯島茜は同一人物かも知れない。そう思った。

景に聞いてみたら、一緒にオーディションを受けていたのは湯島茜であることは確からしい。

驚くべき新発見だ。

だがあんなことがあった後では迂闊に話題に出すのも憚られるのでそれ以上景には聞いていない。

既にオーディション組と百城の顔合わせは済んでいるらしく、景に百城のことを聞いたら何だか怯えていたのだが一体何があったのだろう。

別にイジメとかする奴ではないことは俺が十分知っているのでその心配はない。



天才同士何か惹かれ合うモノがあり、百城はつつい距離を詰めすぎてしまったのかな、と思っていたのだがどうやら景は「綺麗すぎて人間じゃないみたい」と言ったのだとか。

それは確かに百城の地雷を踏んだ気がする。

何というか、百城は自分を兎に角美しく見せることに全精力を注いでいる人間なのだ。

天使として在る為には日々の絶え間無い努力を惜しまない。

言語化するのには難しいが、言うならば天使としての「仮面」を被っている、とでも言うべきか。

そして、景は百城とはまるで正反対の演技をする。

過去に経験した自身の感情を蘇らせる、メソッド演技と呼ばれるモノ。そこには仮面などは存在せず、むしろ全てを曝け出す。

多分百城は景の言葉に怒りを感じたのだろうが、それをいつまでもずるずる引きずるような奴じゃないし撮影は景とも上手くやるだろう。多分。

景としても、撮影の度に暴走しては敵わないから百城の技術を実際に近くで見て、そして習得できれば理想的なのではないだろうか。

百城の技術は一朝一夕で真似できるものでは無いのだろうか参考にはなるだろう。

何しろこの国の若い女優の中では一番の売れっ子だ。人気なものには当然理由がある。景は電話で「天使さんみたいに自分をフカンする力を盗んでくるわ」と言っていた。最近俺は勉強やら部活やらバイトやらで忙しく夜風家に顔を出せていないが、大黒天の二人がいるしルイとレイも楽しくやっていることだろう。

そのせいなのかは分からないが、最近景からの電話の本数が増えた気がする。スマホを買ったばかりの頃やたら友達と電話したくなる現象なのだろうか。

あと、どうやら出発は三日後らしい。

多分出発の前日辺りにもう一度「頑張ってこいよ」的な内容の電話はするのだろうが、それはそれとして「応援している」と言った。

湯島さんと景は顔合わせの際再会したらしいが未だに気まずそうである。であるので湯島さんの話題は出しづらく、「頑張って仲直りしろよ」程度のことしか景には言っていない。

もし機会があればサインを貰ってきてくれ、なんて今の景に俺から言えるはずもない。

そんなことを景と電話でやりとりし終えた俺は飯を食うことにした。時刻は八時半。いつもに比べてちよつと遅い時間だ。

冷凍庫から特売で買い込んだ冷凍うどんを取り出し、レンジでチン。

それを皿に出して生卵とめんつゆをかけて料理終了。所要時間は約四分だ。あと納豆一パック。

一人暮らしを始めて、キラキラした私生活の一環としてお洒落な自炊に憧れないこともないがやはり楽な方がよい。

うどんからエネルギーとなる炭水化物を摂取して、納豆と卵から俺の血肉となるタンパク質を。更に野菜ジュースも飲んで俺に隙はない。

卵は栄養が豊富な完全食として知られているし、大豆は畑の肉と呼ばれる程の良質なタンパク質が含まれている。

本当にこれらの素晴らしい食品をあんなに安く買ってもバチが当たらないのだろうか。

昔見たテレビ番組の記憶が正しければ、納豆と生卵は栄養素が損なわれるという理由で一緒に食べない方が良さしいのだが面倒くさいので俺は特に気にしていない。

外食する日か、夜風家でメシをご馳走になる日以外はこの一ヶ月間毎日コレである。理由は単純。安くて早くて簡単だから。つまり最強。

しかし、普通に美味しいのだが流石に飽きてきた。今度は袋パスタでも買って来ようかとは考えている。

でも、味付けとか面倒くさくなって結局素パスタに納豆と生卵をぶっかけるだけにな

る未来が見える。それじゃあ今とほとんど変わらない。

ちなみに俺は料理がド下手である。口が裂けても上手なんて言えない。

練習すれば恥ずかしくない程度にはなるのだろうか、今はそんなことに割く時間は無い。

だから多分卒業するまで下手なままであるのだろうし、故にできるだけ過程の少ないシンプルな料理でなければ食事の度にその微妙な出来で落ち込むことだろう。

だったら毎食チルドかインスタント食品で良いじゃないかと言われそうだが、なんとなく身体に悪そうなので避けている。

だから俺は料理上手な景を尊敬しているし、夜凧家での食事はとても楽しいのだ。うどんの上に乗った黄身を箸で潰し、つゆと卵と麺を絡める。

いざ食おうとした時、机の隅に置いていた俺のスマホが鳴った。

メッセージではなく、通話の着信である。画面に表示されているのは百城のアイコンだった。

無視する理由もないので画面をスワイプして通話を開始する。

『今電話大丈夫？』

俺は現在家にいるので別に問題ないと答える。

百城は今何処から電話をかけているのだろう。彼女は売れっ子なので仕事なかもしれない。

『事務所だよ。さつきまでマネージャーさんとか他の子たちと打ち合わせしてたの。デスアイランドのね』

こんな時間までご苦労様だ。そういえば景が、顔合わせの日には百城以外スターズの役者は来なかったと言っていたな。

やはりスターズ所属ともなると各々が忙しくて、中々集まれる機会がこれまでなかったのだろう。

『あ、アキラ君も事務所にいるよ。この後代ろうか？』

いや、彼には俺から電話をかける予定だ。だから問題ない。

それに歳の近い男同士色々積る話の一つや二つくらいある。それは女人禁制だ。それにしても、今回のアキラ君の演じる役は彼にぴったりなものだった。

クラスで人気者の爽やかなスポーツマン、そしてイケメン。

まだデスアイランドの実写映画が発表される前、漫画を読みながら「このキャラはなんだかアキラ君に似ているな」と思っていたのだが、偶然にも的中した。何だか嬉しい。作中では序盤に急な勾配の坂を走って登る場面があるのだが、アキラ君ならあのシーンを自分でこなせるだろう。

彼は運動神経がいい。もしかしたら彼の安全のためにスタントマンを使うのかもしれないが。

兎も角、俺はこの作品でアキラ君の良さがもつと大勢の人間に知られて欲しいと思っている。

星アキラの名が出演者として発表された時、主催がスターズということもあり「またアキラかよ」といった様な声が少なくない数出ていたが、是非ともそういう意見を跳ね除けて頑張つて欲しいものだ。

『そっか、了解』

百城のデスアイランド出演にもやはり同じような意見はあつたが、件の記者会見の後には随分と数が減つた。

記者会見における百城の客席からの登場を各社メディアは報道して話題になつてい

る。  
やはり皆天使の美しさに心を掴まれたのだろう。チョロいな。

『あ、そうだ。何かお土産で欲しいものある?』

確かデスアイランドの撮影は沖縄県の離島だったはずだ。柊さんに教えてもらった。

沖縄土産、何が良いのだろう。

ぱっと思いつくのはソーキそばに紅芋タルト、あとサーターアンダギーなどだろう

か。

ちんすこうをうら若き女優である百城に買わせるのは何だか気が引けるから言わない。別に変な意味は無いが。本当だ。

とりあえず百城のチョイスならハズレはないだろう。彼女は俺よりも遥かにセンスが良い。俺は「百城に任せる」と言う。

『えー。それが一番困るのに』

まあ、アレだ。貰ってからのお楽しみというやつだ。そっちの方が面白いだろう。

『分かったよ。じゃあ楽しみにしておいてね』

俺は百城にありがとうと感謝を伝える。

ちなみにSNSを覗いてみたところ、撮影現場を見に行く予定の人間はかなりいるらしい。しかもその九割くらいが百城目当てなのではないだろうか。

それくらい百城の人気は現在凄まじい。それを改めて意識させられた。

女性ファンも多いが、当然男の割合の方が高い。

男は皆美少女が大好きなのだ。

それは彼女の並外れた容姿もあるが、メディアに露出する際の無邪気さや清楚なイメージも理由としては大きいだろう。

そんな訳であるので、「百城千世子熱愛か!」的な記事が出回ったらどうなるかは火を

見るより明らか。

一体何億の損失が出るのだろう。俺の生涯年収より多いのは確かだ。

もし俺と街をぶらついているところを週刊誌にすっぱ抜かれた場合、俺は一生百城に頭が上がらなくなるだろう。

何しろそれによって世間からの評価がガラリと変わってしまったかもしれないのだ。そうなったら腹を切るかもしれない。

そうだ、百城に湯島さんのことを聞いてみよう。

「湯島茜どうだった？」と百城に言う。景から聞いた話では、この間の顔合わせの時に会っている筈だ。

『……顔合わせの時に会ったけど、何かあるの？』

どうもこうも、俺は彼女のファンである。

何と言うか、「ザ・年上のお姉さん」感が良い。俺の方が一コ上だけだ。

子役の時から出演作を見てみると芝居の技術も毎回上達していて、彼女の努力が画面のこちらまで伝わって来る。

あと、彼女を語る上で関西弁は外せない。標準語圏の人間からすると方言で喋るといっただけで魅力的なのだ。



俺は百城に、湯島茜という役者の魅力を語る。何だか早口になってしまったが仕方ない。

高校の頃の友人だった山田君はガンダムの話をする時早口になっていたが、今の俺なら彼の気持ちを理解できる。

『……湯島さんのファンなんだ。初めて知ったよ』

今一番好きで応援している役者である。彼女はマイフェイバリットだ。

最近忙しすぎて湯島さんの出演作を観れていないから、脳が湯島さん成分を求めている。今週末に何本か借りてこよう。

何故こんなにも彼女にハマったのかは自分でもよく分からない。もしかしたら俺は母親がいないから母性に飢えているのかもしれない。

『……一番？』

一番。その言葉に百城は反応した。

声がワントーン低くなる。思わず背筋が震えた。

何だろう、湯島さんに対する百城の対抗心が刺激されたのだろうか。

俺は百城のファン一号であるので、そこら辺りも関係あるかもしれない。

あとはプロの役者としての自負とかならうか。世間から見た人気は当然百城の方が高い。

『私より湯島さんが好きなんだ』

おい、その台詞だと俺が浮気したみたいじゃないか。付き合っていないけれども。もしアキラ君あたりが聞いたら誤解を招くぞ。

あと声は何だか怖い。嫉妬か？ 嫉妬なのか？

それと別に百城は俺の中では殿堂入りみたいなもんなので、一番とか二番とかそういう感じじゃない。

どちらか片方しか全員が絶対に応援できないと言われたら流石に俺は百城を選ぶだろう。俺はフアン一号なのだから当然だ。

ただし、湯島さんの出演作を全て見るくらいにはお気に入りだ。

『じゃあ私とどっちが良いの？』

そう質問されると困るな。どういう基準で判断すれば良いのか分からない。

役者としての技術なら百城が上だし見ていて安心感は凄く、そして何だか今の俺の心にグツとくるのは湯島さんである。

「良い」という曖昧な表現だと答えづらい。

あと、ここで返答をミスったら終わる気がする。何となくだが俺の直感は結構当たるのだ。

故に俺の答えは沈黙。俺はクラピカを信じる。

『……へえ。そこで迷うんだ』

まあ、どっちを選ぶかと言われれば当然百城だろう。

別に長い付き合いだから惰性でそうするのではなく、俺も役者百城千世子のファンの一人であるのだ。

百城の出演する作品も全て目を通してている。

決してビビったとか、そういう理由ではないのだ。絶対に。

『じゃあ、まだ私が一番でいいんだね？』

何だかやたらと一番に拘るなこいつ。

だがまあ、たとえ薬物やって警察に捕まっても俺は百城を応援するだろう。

だけれど、ヤクは絶対にやるなよ。

芸能人にとって男女関係の問題はもしかしたら何とかなるかもしれないが、そっちは完全にアウトである。昔からの友人が容疑者なんて笑えない。

「ごめんなさい」ってベロをチラリと出しながらあざとく謝っても世間の人間は許しては……いや、もしかしたら一定数は許すかもしれない。

やっぱり百城ほどの美人は最強だと分かる。

だが、もしやってたら百城をぶん殴ってでも止めに行こう。

『別に平気だよ、やる理由もないし。あと、「百城をぶん殴る」って言ったところだけ録

音しといたから』

「これどーしようかな」とワザとらしく言ってみせる百城。

うわやりやがったこいつ。

発言の悪質な切り取りを百城はメディアに何度かやられたことがあるが、まさか百城本人がやる側になるとは予想していなかった。

電話の向こう側からは百城の笑い声が聞こえる。やはりこいつはとんでもない悪女なのではないだろうか。

まあ百城なりのからかいなのだろう。本当に事務所に届けたりはしない……よな？

これで一つ新たに弱みを握られた訳か。一体何個目なのだろう、多すぎてもはや数えられない。

つーか何で電話を録音してるんだよ、怖えよ。それとも色々と厄介ごとのありそうな芸能界なら普通なのか。

『それにしても湯島さんかー』

さっきの音声は持つてて良いから、湯島さんのサイン貰ってきてくれないだろうか。現場だと色々事情があるのは理解しているので、別に無理そうだったら諦めるが。

『しょうがないな。良いよ、向こうで言ってみるよ』

ありがたい、恩に着る。

あと出来れば宛名も入れて欲しい。

百城にも湯島さんの素晴らしさを布教するため、今度家に行く時は一緒に視聴するか。

いや、もしかしたらもう既に見ているかもしれないけど。

『……負けないよ?』

百城はそう呟く。湯島さんをライバル認定したのだろうか。是非とも歳が近い役者同士切磋琢磨して頑張つて貰いたいものだ。

それによつて二人とも実力を伸ばしてくれること程嬉しいことはない。

『……あ、結構長話しちゃったね。そろそろ切ろうか?』

確かに、電話を始めてもうかなり時間が経っている。

俺もさつさとメシを食つて勉強でもするか。万が一留年にでもなつたら目も当てられない。

百城に「身体に気をつけろよ」と言う。そんなことは百城本人が一番よく知っているのは俺も承知しているので、さりげなく伝えるだけだ。

『ありがと。じゃあね、またかけるよ』

そう言つて百城は電話を切った。まだ事務所に残つて話し合いとかするのだろうか。

華やかな世界に憧れが無いと言えば嘘になるが、やはり芸能人も大変だな。

特に百城レベルになるとちゃんと寝ているのか心配になる。

夜更かしは肌に悪い。俺でもそれくらいは知っている。

百城の肌は白くて本当に綺麗で、目の下に隈などもないので睡眠不足ということは無さそうだが。

それとも時間は少なくとも効率が良いとかだろうか。

考えても分からないので今度聞いてみよう。

人気芸能人が番組で「あの時期は本当に忙しくて、毎日殆ど寝ていませんでした」と語っているのはたまに見かける。

アイドル的な人気が百城は高いので、もしかしたら彼女のルックスに影響がある程の激務は事務所が許可しないのかもしれない。

しかしまあ、今はテレビを点けりやあ一時間に一回は必ず何かしらで百城が出てくる様な人気ぶりだ。CMなりドラマなり番宣なりで。

百城の仕事量がとんでもないだろうというのは素人の俺でも想像は出来るがそれほどどんなモンなのか具体的にイメージできない。

あと、食事がゼリーだけの時があるのは頂けない。あれは駄目だ。俺でさえ毎日人間らしい食事はしているというのに。

あ、しまった。

景のことを言うのをすっかり忘れていた。

まあ言いか、別に言わなくても。

景のことを頼むと伝えておいたアキラ君がいるのだから。彼はとても真面目で色々  
と器用である。

大抵のことはそつなくこなしてしまふ人間なのだ。

百城に言うのは今度電話が繋がった時で問題は無いだろう。

## 18

デスアイランドの撮影二日目。

夜風は俯瞰の視点を持つことを己の目的とし撮影に臨む。

彼女の脳裏には前日に見た百城千世子の演技のイメージが映し出される。

初日の撮影は物語の導入部分であった。

修学旅行中の生徒を乗せた船は嵐に巻き込まれ、気がついたら謎の無人島に漂着していた。そしてスマホの中にはデスアイランドなる謎のアプリが――

それがこの映画の冒頭部分。所謂プロローグだ。

何とか生徒たちは合流を果たしたが、様々なイベントにより互いに疑心暗鬼に陥る。そして遂には、デスアイランドの介入により決裂は決定的となり殺し合いが始まる。

昨日はそこで終わった。予定よりも三時間早い撮影終了だった。

それを可能にしたのが、百城演じるカレンをはじめとしたスターズ組によるスムーズな撮影進行。

一例を上げるとするならば、湯島と百城が生きて再会したことを喜び合う場面において、緊張から台詞が詰まってしまった湯島をフォローするようにカメラから彼女を隠した場面だろう。

カメラの位置関係を全て把握し、自分達がどのように撮られているかを完璧に理解している彼女だからこそ可能な芸当だ。

百城だけではない。

緊張によって自身の実力を十全に引き出せていないオーディション組に比べて、キャストの半分を占めるスターズ所属の俳優たちは初日から力を発揮した。

オーディション組は完全に雰囲気吞まれてしまっている。



そんな内の一人である湯島が宿舎にて自分たちの現在の状態を危惧していたように、確かに良くない滑り出しだ。

もしこのままではスターズ組の引き立て役で撮影は終わってしまうだろう。

各々で撮影に臨む気持ちは異なれど、初日はそういったように、スターズとそれ以外ではつきりと二分されて終了した。



「——皆……逃げて」

目の前でクラスメイトが斬り殺された。芝居であるのにもかかわらずその事実には吐きを抑えられない夜風はカメラのフレームから一旦外れる。

デスアイランドのアプリの指示に従わなかったことにより同級生が無惨に死に、それに怒りを覚えた女子生徒が元凶となった男子生徒を殺害するだけの、たった十数秒の撮り場面。

にもかかわらず夜風には、自分が嘔吐を我慢できる自信は無かった。

そこで彼女がとった行動がフレームアウトである。

吐くのをどうしても我慢できないのならばそれをカメラに収められなければ良い、と彼女は考えた。

自分を俯瞰する能力。夜風がその力をつけつつある証拠だった。

視点を増やす。それが夜風にとって必須の課題。

これをクリアできなければ、どんなにメソッド演技の才能があろうとこれからのステツプアップは期待できない。

それは彼女も理解している。

自分がどう見られているのか、どう映れば良いのか。その視点が今までの彼女には欠けていたのだ。

だからこそ主演男優にドロツプキックをかまし、オーデイションにおいて演技に入り込むあまり周りを鑑みることが出来ないという事態に陥った。

カメラの届かない所までしゃがみこみ、そこで夜風の口から吐瀉物が溢れる。彼女の狙い通り撮影カメラにはその瞬間は映っていない。

いくら迫真の演技とはいえ女優の嘔吐は映せないと、流星の夜風でも知っていた。

因みに彼女はこの日朝食を多く摂取した。

今回の映画撮影は人気コミックシリーズが原作、しかも大手のスターズが主催ということもあり予算が潤沢である。故に役者の待遇は良かった。

ホテル施設の充実も夜風にとっては嬉しかったが、何よりも食事が豪勢なことに彼女は惹かれる。

この日は撮影二日目、そして初めての朝食。

朝からバイキング形式であり、食材にも高級なものがふんだんに使われていた。

夜風家の財政事情では今まで口にするのできなかった料理のオンパレードであり、テンションの上があった彼女はレイとルイに申し訳なく思いつつもガッツリ食べた。

そのせいかは不明だが、夜風の勢い良く飛び出した吐瀉物は、斬り殺される生徒の役

——堂上竜吾に少しだけかかった。

彼にとつてはトラウマものであろう。御愁傷様としか言いようがない。

「良かったな、美少女のゲロだぜ」と羨ましがる人間はこの地球上に何名ほどいるのだろうか。

夜風は嘔吐しきると再びフレームインする。

彼女は口に手を当てており、顔は真っ青。完全に病人の様相だ。

もう一度言うが、今日の彼女は体調不良だという事実はない。

「ケイコ」という本来原作には登場しないキャラクターに完全になりきり、だからこそクラスメートが斬り殺されるという状況に耐えられないほどに感情が揺さぶられたのだ。彼女のメソッド演技はその領域に達している。

場面のセリフが全て終了すると同時に夜風はその場に倒れこむ。彼女は身体が限界を迎え立つことすらできない状態だった。

周囲の人間は夜風の容態を心配する。演技中に吐いたのだから、どこかが悪いのかと心配されるのは当然のことである。

「カット！ OK！」

そんな騒然とする現場にデスアイランドの監督である手塚の声が響く。



夜風は自室のベッドで目を醒ます。あの後倒れた自分を誰かがここまで運んでくれたということだけは理解できた。

視線の先には白い天井、そして照明。続いて彼女が自覚したのは空腹感だった。

「……………お腹空いた」

彼女が力なくそう眩くとぐう、とお腹が鳴った。

朝食べた分は全て撮影中に吐き出して、それから何も摂ってないので胃の中は空っぽである。

「そりゃ本番中にゲロ吐いたらお腹も空くわ」

「!? 茜ちゃん……」

いつの間にかベッドの傍に椅子を用意して座っていた湯島茜。その存在に景はびっくりと身体を震わせる。

昼間の撮影ではまだ二人のやりとりがぎこちなかったことを夜風は意識している。

オーデイションの日を考えれば仕方ないことだ。

「しかもあのテイクがOKになってすぐ倒れてまうし。現場騒然やったで」

「ごめんなさい。倒れるとは思ってなくてまた迷惑かけた」

布団に潜り顔だけ出して湯島と会話をする夜風。

こういった所作からも、夜風が湯島に対してまだ申し訳無さなどを抱えているのが見てとれる。

「吐くのは折り込み済みみたいない方やね。あれがなんでOKなんか分からなくてあ  
の場でOKテイク観せてもらってん、皆で」

一拍置いて、湯島は続ける。

「夜風ちゃん、すごいね」

湯島の頭には、オーデイションの際の夜風とのやり取りが浮かぶ。

夜風が同じ組として審査を受けた他の三人に語った、「芝居をしていると勝手に身体が動いてしまう」という言葉。

あの時の湯島は眉唾として真面目に受け取っていなかったが、目の前の夜風が他ならぬその体現者だということに気がついた。そして、審査の際の暴走も。

「あれ、ほんまやったんやね」

「……?」

「ゴメンね」

「どうしてあやまるの? 私結局また迷惑かけたのに」

湯島はオーデイションの日、自らの思うがままに演技をする夜風を審査の途中で押し倒して「人の気持ち分からないのなら役者をやめてしまえ」と叫んだ。

あの時、夜風に審査をめちやくちやにされたと判断したからだ。

高校を中退してまで目指した役者の道。彼女はデスアイランドのオーデイションに全力を懸けていた。

湯島の考えは別に間違っではない。

一般的に見れば暴走したのは夜風の方で、他の三人はそれを制御しようと必死だった

のだから。それは他ならぬ夜風本人が認めている。

湯島が夜風に謝る道理は特でない。

だが、現在の湯島の考えはそれとは異なるようだ。

「夜風ちゃんを誤解してオーデイションめちやくちやにしたんは私やろ。迷惑かけたのは私の方や」

「ううん、私あの時武光君を本気で殺していたかも知れない。茜ちゃんが止めてくれなかつたら大変だった！」

武光君を殺していたかも知れない。湯島はどこかズレている夜風のそんな返答を聞いて、思わず笑いが溢れる。

「あっはっ」

「あははは」

その様子を見た夜風も湯島と一緒に笑った。双方の表情は明るい。これまでの様子で、ぎこちなさといったものは無かった。

何はともあれ、これで二人の間の軋轢は完全に取り払われた。

彼女らはこれで「友人」となる。笑い声は部屋の外にいる人間まで聞こえた。

烏山武光と源真咲。共に夜風、湯島とオーデイションを勝ち抜いた俳優だ。

夕食を食べていない夜風のために、軽食を運んできている。

彼らも様子を窺いつつ、部屋の中に入った。



「あ、そうだ。レイとルイに電話しないと……」

夜風はベッドから出ようとする。幼い二人のきょうだいは心配しているだろうと予想した。

彼女のスマホはバッグの中だ。そのバッグはデスクの下にある。ベッドから降りて歩いていかなければ届かない。

夜風は先程までベッドの端に腰掛けて、腿の上にプレートを置いて夕食をとっていた。

「動かんでもええよ夜風ちゃん。ええと……この中やな？」



「あ、ありがとう茜ちゃん」

「別に構わへん」

湯島はバッグを持ってきて夜風にスマホを手渡した。

「夜風ちゃんきょうだいおるの?」

「弟と妹がいるの。弟がルイで、妹の方がレイ。今日は雪ちゃん……じゃなくて、スタジオの人と留守番してるの」

「へえー夜風ちゃんのきょうだいなら可愛いんやろうなあ」

「二人ともとても可愛いわよ」

どこか得意げな夜風はスマホを操作し、スタジオ大黒天でレイとルイを預かっているだろう柘雪に電話をかける。

シチューのCMの給料で購入した当初はタッチパネルの操作がおぼつかなかった彼女だがやはり彼女も現代の高校生らしく、今では操作も慣れたものだ。

呼び出し音が部屋に響く。

柘が電話に出るのに十秒もかからなかった。

『あ、けいちゃん今日どうしたの連絡遅かったけど。二人とも何だか心配してるみたいで布団に入っても寝てないの』

「ごめんなさい、撮影中に吐いちゃったの」

『ええっ!? 吐いたの!? 大丈夫!?』

「大丈夫よ。体調悪くなったとか、そういうのじゃないわ。でね、さつき起きたばかりなの」

『お大事に……あ、ちよつと待って』

「おねーちゃんから電話きたの!?!」という声が聞こえる。これはレイの声だ。柊が呼んだのだろう。

ドタドタと近づいて来る足音。電話相手が代わった。

夜風家の特殊な環境故か同年代の子より大人びているレイだが、こういう所は年相応である。

可愛い妹に思わず夜風も頬が緩む。

『おねーちゃんどうしたの? 雪ちゃんのスマホから 電話かけても出ないから心配になっちゃった』

「吐いたの、オエって」

『へ、平気なの!?! 食中毒とか?』

柊と同様にレイも焦ったような声を出す。姉がロケ先で吐いたとなれば心配になるのは当然だった。

夜風の説明により、役に入るあまりそうなってしまったのだと理解したレイはほつと

胸を撫で下ろす。湯島は「それで納得するんか…」と呟いた。

夜風家の人間は、夜風の役に入り込む力にすっかり慣れていた。

それから、レイは今日の出来事を適当に話す。

柊が夕飯を作ってくれたこと、黒山は珍しく仕事で事務所にいないこと、あとは学校で起きたことなどだ。途中からレイも参加する。

きようだい三人での楽しそうな会話を聞き、湯島も烏山も源も何だか心が温かくなるのを感じた。これがきようだい愛の力である。尊い。

特に湯島の景を見ながら浮かべる笑みは柔らかく、どこかの誰かが見たら枕に顔を埋めて叫んでいることだろう。

『おねーちゃん、おにーちゃん以外の友達できたの?』

「ええとね、今部屋にいるわ。茜ちゃん、武光君、真咲君。ビ、ビデオ通話していいかしら……?」

友人と一緒にビデオ通話をするなど夜風には初めての経験で緊張している。

高校では友人も少なく、故に彼女にとっては大きな一歩だった。夜風家に入入りしている青年が見れば拍手でお祝いするだろう。

「全然ええよ。むしろ私も妹ちゃんと弟君と話してみたいわ」

「俺も構わない」

「同じく」

「じゃ、じゃあやるわね……」

恐る恐るといった様子で景がカメラの形をしたアイコンをタップするとビデオ通話に切り替わる。

画面を上下の半分に分けてレイとルイが映し出される。

柗はレイたちの背後にいるのだろうが見えない。

きょうだいの時間を邪魔しないようにという気遣いだった。

「わー、妹ちゃん可愛ええなあ」

『お人形さんみたいで可愛い……』

「え、ホンマ？嬉しいなあ、ありがとう」

湯島とレイは女子同士何か惹かれ合うものがあるのかすぐに打ち解けている。

烏山と源は女子同士の会話を邪魔しないためにフレーム外に一度出た。

女子の会話というのは男が入っていけないものではない。

『あ、おねーちゃん。この後おにーちゃん来るんだって。ルイが電話したらいいよって言うてくれたのよ』

「え、本当に!?!」

『うん、今日は泊まるんだって。もうすぐ来るはずなんだけど……』

夜風は目を輝かせたように反応した。青年は最近夜風家を訪れていない。

以前の公園で会った日から、夜風も度々誘ってはいるのだが「忙しい」という理由で断られていた。

「あれ、夜風ちゃん家って四人きょうだいなん？」

「いや、違うわ。レイの言っていたおにーちゃんっていうのは、私たちが仲良くしている人なの」

夜風家の会話からしておにーちゃんなる人物と親しい関係にあるのだと予想した湯島は、どんな人間なのか興味が湧く。

それに、夜風の反応に湯島は何かを感じ取ったようだ。

その時、インターホンが鳴る。

『あ、来た』

こんな時間にスタジオオ大黒天を訪れるのは、これから来るといふ約束をした青年か酔っ払いか頭のおかしい奴の三種類だ。

後者の二種類は滅多におらず、確率的には青年が一番高い。

レイはスマホを持ったまま玄関に向かう。

『はいはい、今開けまーす』

万が一不審者だった場合のことを考えて鍵を開けたのは終だった。

そこにはレイの予想通り青年が立っていた。左手にはポリ袋がぶら下がっており、中には数種類のアイスが見られる。

スタジオ大黒天にいる人間のために道中買ってきたものだ。

玄関に腰掛けて靴を脱いでいる青年にレイは近づく。ルイも玄関に迎えに来た。

その間内カメのまま夜風たちには、久しぶりに夜風家を訪れた青年と喋っているレイだけが見えている。

青年の姿は映らず声のみがデスアイランド組に伝わっている。

『ねえおにーちゃん、今おねーちゃんの新しいお友達と話しているの』  
『つて言うと……向こうで仲良くなったのか』

『うん、そうみたい。おにーちゃんも映る？』

『いや、俺は別にいい。俺が混ざったら悪いだらうし』

『そんなこと言わないで話しましょ』

『ほら、おねーちゃんもこう言っているんだし』

レイと景にここまで言われては、青年は断ることも出来ない。

「とりあえず手洗いうがいで済ませて」と洗面所に青年は向かい、その間にレイたちは部屋に戻る。

カメラのフレーム外にいた鳥山と源も湯島が手招きして呼び、青年以外の全員がカメラ内に揃った。

「それにしても、夜風ちゃんに友達がいるのってほんまやったんやな」

「なっ……! ひ、ひどいわ茜ちゃん! 本当に仲良いのよ!」

「冗談やて、ごめんな」

そう言つて夜風の頭をポンポンと撫でる湯島。そんな二人のやりとりを見て、本当に仲直りしたのだと改めて思う鳥山と源。

デスアイランドのオーデイションが終了したばかりの頃ではとてもではないが考えられなかった光景だ。

『二人とも仲よさそうだね』

ルイが湯島にそう言った。

「そうやでー。ええと……確か君はルイくんやな? もしかしてレイちゃんと双子ちゃんなん?」

『うんそうだよ!』

「やつぱり。きょうだいにしてもやけにそつくりやなーと思つてたんや」

そんな会話をしていると、大黒天側からドアが開く音がする。

レイが画面の外側に視線を向けながら手招きしている。どうやら青年が来たらしい。

くつついていて座っていたレイとレイが間を一人分空け、そこに青年を誘う。

二人の間に座った青年はカメラに向かって頭を上げて挨拶をする。

『この度は撮影お疲れ様です。ええと、夜風の友人です……う？』

「なんで疑問形なの!?! 私たちお友達よね!?!」

「あはは、真面目な人やなあ。ども、自分は湯島茜つて言います」

青年がスタジオに来たのはレイから「おねーちゃんいなくて寂しい」と言われたからだ。彼はバイト終わりに直接スタジオ大黒天に足を運んでいる。

そして訪れていきなりデスアイランドに出演している役者たちとのビデオ通話に参加しろと言われ当惑していたが、面の皮は厚いのでそれを表には出さない。

とりあえず無難に挨拶をしたのだが、スピーカーから夜風以外で何やら聞き覚えのある声があった。

顔を上げてみると半分に別れた夜風側の画面に映っているのは四人いた。

元から青年の知り合いである夜風景は勿論として、その他には烏山武光、源真咲。

この二人はデスアイランドのキャストとしてホームページに載っており、それを見ていた青年は二人を一方的にだが知っている。

そして最後の一人は湯島茜。

青年が今一番推している女優だった。思わず目を見開く。



『……』

「あれ、どうしたの？」

「え、夜風ちゃん。この人いきなり固まったんやけどどしたん？」

「この人たまにおかしな行動をするのよ」

いきなりの急展開に青年の脳はパンクしていた。

彼は百城千世子にサインを頼んではいたが、まさか本人と会話を出来るとは思って  
みなかった。

最初はそっくりさんかと疑ったが見れば見るほど湯島茜本人である。

それに、彼は口下手な夜風があとまで気まずい関係になったのをほんの二日で解決  
できると予想だにしていなかった。

このような理由から、青年は理解した。「あ、これ夢だわ」と。

たまにやけにリアルな夢があり、これもその一種だと一人納得する。

理解は完全に間違っていた。しかしそれを教える人はいない。

これまで青年は何度も湯島が夢に出てきた経験があるが、その度に起床した時の喪失  
感を感じていた。彼は夢の中で湯島と会話を楽しんでいたが、朝目が覚めてそれが自分の良いように作  
り出した虚像でしかなかったのだと知りなんとも言えぬ虚しさを覚える。

例えるなら、底の果てしなく深い賢者タイムのような感覚。

「何やってんだ俺」と思わず頭を抱えてしまう案件だった。

彼がそんな経験から学んだことは、傷はまだ浅いほうが良いということだ。

たとえ自身の欲望が作り出した偽物だとしても会話をしてみたいと思うが断腸の思いでそれを我慢する。

夢の中のイマジナリーな存在とは長く関わった分だけ起きた時のダメージは大きい。

目の前の湯島茜を無視せねばならないという事実に思わず涙が溢れた。

「な、なんか泣き出したんやけど……」

「ど、どうしたのかしら……?」

急激な青年の変化に柗はあたふたし始める。

湯島は若干引いていた。それなりに長い付き合いのある夜凧も理解できていない。

青年は立ち上がり壁の方に向かって歩き始める。壁に手を添え、頭を思いつきりぶつめた。ドゴオ!と鈍い音が鳴り響く。頭から血が流れる。

『えっ、ちよ、ちよつといきなり何してんの!?!』

柗の絶叫がスタジオに響いた。

## 19

昨日借りてきた本を布団で読んでいたらつい夢中になってしまい、「あとちよつとだけ」を繰り返して気がついたら早朝の四時を回っていたのは今日の出来事。

流石に徹夜はマズイと思い、それから一時間だけ寝ていつも通り五時に起きて朝勉強して、大学行って授業受けてバイトをこなした。

そして下宿に帰ろうと思ったらルイから連絡が来た訳だ。

景が一ヶ月の間撮影に行つて、しかも今日は子供には面倒見のいい黒山さんも仕事でいなくて寂しいから、俺がスタジオ大黒天に来られるか。

そういう内容だった。

最近夜風家と直接会う機会が少なかったもので、俺もレイとルイに会いたくなくなつてしまつたし、スタジオの入っているビルの一階にある銭湯で風呂にゆっくり浸かつて疲れを取りたいとも考えた。

あの銭湯、ゆっくりするには本当に丁度いいのだ。

風呂からあがった後の牛乳も堪らない。腰に手を当てながら一気に飲み干すと三割増しくらいで美味しく感じるのだ。

そうしたらさっさと寝てしまおう。そう思っている。

全然寝てなくて、更に一日中何かしら動き回っていたからクソ眠い。

気を抜いたら直ちに睡魔に負けてしまうだろう。今なら立つたまま寝られる自信がある。

そういう経緯があり、俺はスタジオ大黒天に足を踏み入れる。

鍵を開けてくれたのは柘さんだ。今日は柘さんが二人の面倒を見ているらしい。

自分の分も入れて四つ。風呂上がりにも食おうと思いついたコンビニのアイスを彼女に手渡す。

美人に「ありがとう」と言われたのは悪い気分ではない。買ってきて良かった。

玄関で靴を脱ぐために座り込んだら、何やらレイがスマホを持ったまま近づいてくる。

柘さんのスマホで景と電話をしているのだろう。

そう思っていたのだが、どうやら景だけでなく向こうでできた友達とビデオ通話をし

ているらしい。

あの景にたつた二日で友人ができたことにも驚いたが、更に意外だったのは俺も出ると言われたことだ。

レイに「おにーちゃんも一緒にお話しようよ」と言われた時は断った。

景のきょうだいであるレイとルイはともかく、向こうの人と一切面識のない俺が会話に混じっても浮くだけ。そう思った上での返答だ。

だが景にも参加して欲しいと言われれば参加するしかない。気が進むとか、進まないとか、そういう問題ではないのだ。

俺はそこまで言われた上で断れる性格をしていなかった。

とりあえず手洗いうがいをして三人の所に戻ってくれば、レイとルイは真ん中を俺のために開けてくれた。

別に端っこで良いのだがわざわざ言うことでもあるまいし、そのまま従う。

景の新しい友人というのにも興味が無かったというわけでは無いが、それ以上に向こう側の人に悪い印象を与えないように気をつける。

俺が通話に参加する以上、向こう側には俺は景の友人であると伝えられているのだから、なので俺の印象が悪くなれば景の印象も落ちてしまうかもしれない。

せっかくなので友人は是非とも大切にして欲しいのだ。彼女のこれまでを考えると

それはもう切実に。

『ども、自分は湯島茜って言います』

そんな考えで通話に入っていたのだが、目の前に湯島茜がいた。

もう一度言う。湯島茜がいたのだ。

百城にサインは一応頼んでおいたが、まさか本人と会話できるとは少しも予想していなかった。

そこで、寝不足と疲労で大いに鈍った俺の脳は、これは夢の中だと結論を出す。

俺にとって湯島さんの夢を見るのは初めてではない。それによってこれまでに何度も痛い目を見てきた。

流石に懲りている俺は夢から醒めるために壁の方向に歩いていく。



『あはははっ！夜凧ちゃんの友達、面白いなあ』

腹を抱えて笑っている画面の向こうの湯島さん。笑いすぎて過呼吸になっている。

やばい、マジで恥ずかしい。穴があつたら入りたい。俺の顔は今どんな惨状になって

いるのだろう。多分くっ殺状態だ。

「あはは、おにーちゃん顔真つ赤！」

ルイが俺を見ながら笑っている。最早何も言えずに下を向いた。このままさつさと帰りたいのだがそれで構わないだろうか。

今の俺の頭には包帯が巻かれている。

さつさと夢から醒めようと考えた結果壁に頭を打ち付けたことで出血したのを柊さんに治療してもらった。

幸い血はすぐ止まったようで、さほど大黒天の床を汚すことは無かった。

柊さんは「どうしてももう血が止まってるの」と驚いていたが、俺は昔から怪我が治るのは早い方なのだ。

多分俺の体内の血小板ちゃんは他の人より働き者なのだろう。

それにしても、体内の血球まで擬人化して大人気コンテンツにしてしまうとは、日本人というのは業の深い人種だと思う。

それはさておき向こう側からしてみれば、俺は通話に出てきていきなり自傷行為を始めたただのヤバイ奴である。

これじゃあまるで俺が頭おかしいみたいじゃないか。

睡魔に負けそうになっていっている状態で奇行に走るのは俺に限ったことではない。

だから仕方ないのだと自分に必死に言い聞かす。そうしなきゃ恥ずかしくすぎて正気を保ってられないだろう。

眠気もすつかり吹っ飛んだ。

とりあえず画面の向こうの四人には「湯島さんの大ファンで興奮したのと、寝不足と疲労で思考回路がおかしくなっていた」と説明したら、湯島さんと烏山君が笑ってくれたことで兎に角助かった。

こりやもう徹底的にネタとして昇華しなければやってられない。

源君は見るからにドン引きしていたがしようがない。誰でもそうなるだろう。

「確かに夜風の友人なら……」と景の方を見ながら納得していたのは本当に申し訳ないと思っている。

『うちのファンって本当なん？ めっちゃ嬉しいわあ』

マジでファンです。出演作全部見てます。俺はそう言い切った。

笑っている湯島さんは後光が差している様に見える。百城が天使なら湯島さんは女神だろう。そうに違いない。

『えー。例えばどの作品が好きとかあるん？』

色々あつて一つに絞るのは難しいが、強いて言うならば一つの作品が挙げられる。



それが発表されたのは三年前。撮影時期を考えればもつと遡るのだろうが、当時中学生であつただろう湯島さんは学園ドラマにてとあるネームドキャラを演じていた。

それが多分今まで見た中で一番好き。別に俺はロリコンじゃないが。

俺はそれを湯島さんに伝える。

『え、それ見てくれてるん!? キミ随分マニアックやね。うちのには会心の出来やつたんやけど、あんまり知ってくれている人いなくて嬉しいわ』

やはり彼女にとつても演技が上手くいっていた作品らしい。

これで「あー、確かにそんな役もあつたなあ」と、覚えていないのにとりあえず話を合わせているようだったら更に恥ずかしい思いをしていたことだろう。

やばい、マジで会話が楽しい。今まで生きててよかった。

「おにーちゃん凄く嬉しそう……」

レイが意外そうにこちらを見ている。

夜風家の前では良き歳上で在るように意識しているので、確かにこんなに表情を表に出すことは少ないかもしれない。

別にはしやぎ過ぎないよう、これでも心を抑えている筈なのだが。

『ず、ずるいわ茜ちゃんばっかり!』

その時、景が身を乗り出してそう言う。

言われてみれば、俺ばかりが湯島さんと話をしていた。景もレイやレイともっと話したいのだろう。

そのことを湯島さんとの会話に夢中になるあまり失念していた。

カメラに向かってすまないと頭を下げ俺は席を立つ。

もう十分話したので俺はお暇することとしよう。

『え、ちよ、ちよっと?!』

景の焦った様な声が聞こえる。

柊さんとレイは「マジかお前」と言いたそうな目で俺を見ていた。

「行っちゃ駄目だよ。何してるの?」

柊さんは目がマジだ。

彼女の圧に押され、俺はもといた場所に再び座り直した。

『ええと……あ、あのね、今日初めての台詞だったのよ私!』

勢い良くそう言った景に、俺は「お疲れさま」と言って笑いかけた。

どうやら夜はまだ長いようだ。

## 第六話

20

撮影三日目の夜、時計の針は午後九時を指し示している。

今回のデスアイランドの撮影に参加している赤毛の少女、湯島茜は先程まで監督である手塚に宿泊しているホテルのラウンジへと呼び出されており、たつた今彼女に割り当てられている自室へと戻ってきたところだった。

呼び出された理由は、当事者である彼女が一番よく分かっている。

今日の撮影において、殺人鬼と化したクラスメートから逃げるために崖下の川へと飛び込むシーンがあった。いや、本来ならば合成で済む筈で彼女が実際に飛び込む必要は無かったのだが。

そのシーンに参加していたのは四名の女優。

一人は他ならぬ湯島であり、その他には、つい昨夜湯島と関係を修復するに至った夜風景、以前夜風が受けたスターズのオーディションにおいてグランプリを受賞しスター

ズ所属となつた若月千、そして夜風と湯島と同じくオーディション組である木梨かんなどである。

夜風は監督からのカットがかからなかつたため芝居に入り込んだまま役を続行し川に落下、夜風がやったのだから、と湯島もそれに続く。更には若月も、夜風が落ちたスターズの賞を自分は受け取つたのだという自負と対抗心によつて飛び込んだ。

木梨は川に逃げることもなくその場で斬り殺される役であつたのでそれには含まれない。彼女は飛び込みについては怖がつており実行できる自信は無いようなので幸運と言うべきだろう。

その結果、この日の撮影は予定よりも三時間遅れて終了した。

監督をはじめとして「仕方ない」「良い画が撮れた」と言い特に気にしていない者もいるが、そうではない人間がいることも事実。

それは特に切羽詰まつたスケジュールで動いているスターズ組に顕著だ。

例えば星アキラのように、この映画の撮影中も他の作品の予定が入つているため島をたびたび出入りしている役者もいる。彼らは現在業界で売り出し中の若手であり、故に多忙であつた。

スケジュールの乱れは彼らの行動に大きな影響が生じる恐れがあつた。

別に本当に飛び込む必要は無く、そのシーンだけ後撮りをしてCGと合成すれば済む

話であるというのが一般論。それで万が一怪我をしたら撮影は中断となり予定されていた撮影期間内に終わらないかもしれない。そういう心配もある。

事実として今日の彼女たちの演技により現場の空気は多少ひりついてきていることも危惧されていた。

「はあ」と湯島は自室のベッドに腰掛けながら溜息をついた。

まだ撮影二日目だというのに疲れを感じるのは、それなりに場数を踏んできた彼女でさえ滅多に経験しない大規模な撮影だからだろうか。

彼女の手には先程自販機で購入したお茶があった。

まさか自分があそこまで熱くなるとは。

湯島はふとそう思った。

彼女は役者というものを自分の天職だと思っている。

最初は自分の意思ではなく、親の言うことに従って入った芸能界。当時から子役ながらに整った容姿だった彼女は、現在熱狂的な人気を集めている百城千世子程ではないが、テレビからの仕事もそれなりに入っていた。

成長するにつれて子役というアドバンテージも無くなり徐々に仕事は少なくなっていくが、彼女は未だ役者の道に立っている。

それは子役になったばかりの昔とは違い、他ならぬ彼女の意思だ。

一度役者という職業の面白さを知ってしまった彼女には、その道を諦めるといふ選択肢は現在無い。

芝居に専念するため高校も中退し、本気で取り組んだ結果がデスアイランドの出演。今では関係は修復されたが、そのオーディションでは夜凧と一悶着があった。が、それも彼女のオーディションに懸ける想いを考えれば当然のことである。

なかなか上手いかない撮影に対して今のままではいけない、この一ヶ月で爪痕を残さなくては、と強く思う湯島であるが、それでも以前までの彼女ならわざわざ合成で済むシーンで川に飛び込むという行動に踏み切るかと問われれば、答えは恐らく否。

明らかに夜凧の存在は大きく影響している。役者としての彼女に対する対抗心が湯島の心の中にはあった。

まだ共演して二日目であるが、湯島は夜凧という劇葉によって大きな変化が齎された最初の人間であるのかもしれない。

そして、昨夜の夜凧の友人だという青年との通話。あれも湯島の心には大きく響いた。

歳の近い男子からの「ファンです」という言葉はやはり嬉しいものだった。あの言葉によって撮影を頑張ろうという気持ちが強くなったのは言うまでもない。

そんな時コンコン、とドアをノックスする音が聞こえる。誰だろう、と湯島がドアの方に視線を向けた瞬間。

「こんな時間にごめんね、湯島さん。入ってもいいかな？」

透き通ったような音の高い声。

天使がドアの向こうにはいた。



「いきなりごめんね。すぐ終わるからさ」

湯島がドアを開けた先にはそう言いながらにこりと笑う百城千世子がいた。

ヤバイ、と湯島は思う。思わず背中を冷や汗が伝った。今日の撮影における勝手な行動について説教されるのだと彼女は思った。

正に「天使」と形容できる目の前の可憐な少女の微笑みがかえって緊張感を増幅させる。

加工場へ出荷される直前の家畜に対して生産者が優しくなる現象。それを彼女は思

い出した。

百城の撮影に対するストイックさ、そして懸けている熱量。そういったものは同じ役者である湯島は話としてよく聞いていたし、まだ日は浅いが実際に共演してみてもそれを身を以て感じた。

彼女は高いレベルで映画を完成させることに全力を注いでいて、それは初日の一度もNGを出さなかつた彼女の見事な演技から見て取れる。

湯島が普通ならカットが出るであろう、台詞に詰まるというミスを百城にカバーしてもらったこともその内の一つだ。

百城の描く完成までのシナリオにヒビを入れた、というのは些か大袈裟な表現かもしれないが、夜風をはじめとして、彼女の演技に負けないよう川に飛び込んだ湯島と若月の影響で三日目のスケジュールが乱れたことは事実。

そのことについて天使から注意ないし説教を受けるのだと、湯島は想像した。やつてしまったのは他ならぬ自分なのだからそれは当然だと彼女は頭を下げた。

「いや、ほんまに今日はごめんなさい」

そして恐る恐るといった様子で湯島が顔を上げると、そこにはキョトンとした様子の百城の表情があつた。

「あ、別にお説教しにきたわけじゃないよ?」



よく見れば百城の右手には二枚の色紙、左手には黒のマジックペン。それらを湯島に見せながら。

「あのね、サイン貰いに来たんだ」

そう言つて天使は再び湯島へと柔らかな笑みを向けた。



「私のお友達がね、湯島さんのファンなんだ」

湯島の部屋のベッドに腰掛けながら、百城はそう言った。

陶磁器のような色白の肌にはシミ一つなく、女でさえ見惚れてしまいそうな顔立ちの彼女はそれだけで画になるのだから凄いと湯島は心の中で思う。

湯島はデスクの上に置いてある二枚の色紙に對面している。どこにでも売っているシンプルな金縁の白い色紙。先程湯島が百城から手渡されたものだった。

「それで湯島さんのサインが欲しいって言つてたんだ。私の分も入れて二枚、お願いできるか？」

無論湯島に断るといふ選択肢は無い。それに断る理由も特に無かった。

ただ、百城千世子に自分のサインを渡すという状況を想定していなかったためか、湯島は若干緊張している。

百城は湯島たち若手役者の間では正にトップといえる存在であり、まさかそんな彼女に自分のサインを渡すとは思ってもみなかった。

「湯島さんのファンだつていうその友達、今までの全部の作品観ているらしいんだ」

「そういうのを聞くと嬉しいなあ。その人に『ありがとう』って伝えといてくれん？」

「うん分かったよ」

そんな会話をする二人。

平均気温、湿度ともに一年を通して高い沖縄県の夜は本州に比べて蒸し暑く、それはこのホテルにおいても例外ではない。

そのため湯島はクーラーをつけているのだが、そのせいだろうか。何だか冷房が効きすぎていよう、少し寒いように感じる。ぶるり、と彼女は身体を震わせた。

目の前の天使のニコニコ顔が何だか気になるのは、緊張している自分の気のせいだろうと、湯島は考えないようにした。

湯島は子役時代から芸能界に在籍している人間であり、デビューしてからもうかなりになる。

故にサインを書くことは今までにも多くあったが、やはりファンがいるというのは嬉しいことだ。

昨夜も夜風の友人だという青年にせっかくだから、と彼女の厚意からサインを書いたばかりであるので手の動きに迷いはない。目の前の二枚に対してのペン入れはスムーズに終了した。昨日書いたものは夜風経由で青年の手に渡ることとなっている。

百城の言う友人と、昨晚ビデオ通話をした青年が同一人物であるということを知っている人間は当然この部屋にはいない。

「わっ、凄い上手。やっぱり湯島さんサイン書くの慣れてたりするの?」

「実は昨日も夜風ちゃんのお友達にサイン書いたばかりなんよ。だからそのお陰もあるかもしれないね」

「へえ夜風さんの」

「私より一コ上の男の子でな、電話越しに『めつちやファンです』って言ってくれたんよ。あれは嬉しかったなあ」

「応援に励むためにも頑張らないかん」と昨夜のことを思い出しながら言い笑う湯島。そんな湯島の言葉に百城は何か引つかかったようだが口には出さなかった。

それから和やかに五分ほど会話をして、百城は部屋を後にする。

彼女はこれから監督である手塚の下へ向かう予定だった。

## 21

夕飯も食い終わり、シャワーも浴びて、勉強もひと段落ついたので床に寝転がりながらスマホをいじることにした。

「デスアイランド」「撮影」とキーワードを入力して検索してみるとたくさん候補が出てくる。それらを覗いてみると殆どに百城千世子の名前が出てくるのは流石としか言いようがない。あとアキラ君もかなりの頻度で登場する。

当然といえば当然なのだが、景のことを詳しく書いている人はいないようだ。いたとしても、出演者一覧に出てくる程度のもの。

主演にドロップキックをかました時代劇はボツになったらしいので、景としては今回は二度目の映像メディア出演であるので当然なのだろうが。

件のシチュウCMを調べてみたところ「この役者の演技良いな」という反響はそれな

りに見つけることができたが、知名度を一気に押し上げるまでには至っていないようだ。

そんなことを考えながら適当にネットサーフィンをしていると、百城から電話がかかってきた。最近百城の着信音だけ変えたのですぐにあいつだと分かるのだ。

『この間頼まれた湯島さんのサイン貰えたよ。今度会った時渡すね』

その報告を聞き、俺は百城にありがとうと言った。

実は数日前に湯島さんと電話して、湯島さんの厚意により景經由でサインを貰えることになって、何なら成り行きでラインまで交換したことは言わなくても良いだろう。

旅行先で買ってきたお土産を友人に渡したら「実はこれもう持ってるんだよね」と言われた時の何ともいえないあの感情をせっかく話をつけてくれた百城に味わわせるのは気が引ける。

世の中には黙っておいた方が円滑な人間関係を続けられることもあるのだ。

『どういたしまして』

お札に今度飯でも奢ってやろう。ただあまり金ないから高いのはNGで。悲しくなる事実だが、百城と俺の社会的なヒエラルキーは十段階くらい違うのだ。

「月収いくら?」と野暮なことは聞いたことがないが、もしかしたらポルポル君が買えるのではないだろうか。女優恐るべしである。

あと、百城は話を聞く度に全国を飛び回っているようなので健康面を心配してしまふ。環境が変わると体調を崩してしまふ人も多いから。

その辺りに関して、百城は平気なのだろうか。

『んー、まあぼちぼちやつてる感じかな。別に元氣だよ』

まあ声色も普通であるし、本当に問題は無いのだろう。もしかしたら演技で隠している可能性も無くはないのだろうが、電話越しでは分からない。

「今の顔色チェックしたいから写真送つて」と伝えるのは何だかキモい気がするから言いたくない。

そういえば。デスアイランドの撮影は一ヶ月に及ぶらしいが、この時期は台風とか大丈夫なのだろうか。天気予報を見る限り今は向こうも平気らしいが、これからの天気はどうなるか分からないので心配だ。

せめて撮影時期を少しずらしたりすれば良いのに、とこの間話をした時ふと疑問を抱いたのだが、もしかしたらスターズ組は忙しいので予定がつかないのかもしれない。

『そうだよ。私たちのスケジュールとの兼ね合いでね、こんな時期になっちゃったんだ』俺の疑問に対する百城の返答を聞き、やはりそうだったのかと俺は納得する。

『だから出来るだけ撮影を巻けるように頑張ってるよ。イレギュラーはいつ起こるか分からないからね』

おおカッコいい。何と言うか、凄くプロっぽくて良い。

これが大物女優の貫禄かと一人感動する。

師匠キャラの「俺についてこい」と同じような力強さが先程の百城の発言からは感じられる。現場のスタッフさんとか大助かりだろう。

『あはは、だって私はプロの役者だよ?』

そりやそうだ。今電話をしている彼女はプロ中のプロである。朝起きてから夜寝るまで芝居のことを四六時中考えているような人種だ。俺も百城につられて笑った。

それにしても、百城はデスアイランドにおける主要キャラを演じており、であるが故にセリフ量や収録場面も多くその他にも色々多忙なことが想像できるので、いつ電話をかけて良いのか迷ってしまう。

彼女は「いつでも良いよ」と言ってはいるが、その言葉通りにしては迷惑をかけるしまうというのは想像に難くない。芝居に熱心な百城のことであるので、多分この会話が終わった後も自身の台本や明日の共演者のチェックはするだろうし。

今回みたいに向こう側の都合の良いタイミングで電話をかけてくれるのがこちらとしても有難いのだ。

その点メッセージを送るだけなら百城の邪魔にならないので楽である。

『んー、次電話できるのはちよつと後かも。色々忙しいから』

やはり百城は忙しいらしい。次に電話する時に喋る話題でも探しながらこの数日は過ぐすとするか。でも別に面白いことなんてそうそう起こらないのが現実だ。

食パン啜えた美少女と曲がり角でぶつかるイベントとか起きたりしないだろうか。もし現実には起きたらそれだけで一時間くらい語れそうだ。

人生経験の濃さでは百城に敵わない。彼女みたいに大衆から人気のある人生というものに憧れが無い訳ではないが、まあ無理だと分かっているので嫉妬もクソも無い。むしろ尊敬している。

22

景が撮影に行つて二週間以上が経過した。

その間レイとルイもスタジオの二人と仲良くやっているようだし、景の不在によつて特に問題が起きていないわけではない。あの二人は他の子供達より精神的に大人びているのだ。これくらいで元気がなくなるタマではない。



毎日の掃除を徹底されてスタジオの空気が良くなった、と終さんは言っていた。レイとルイに従って掃除に取り組む大黒天の二人を想像したらつい笑ってしまったのは仕方ない。

終さんは掃除をしているイメージができるが、黒山さんの方はさっぱりだ。

景から連絡は毎日大体二回来る。

朝食の時間に電話をかけてきて今日はどんな撮影をする予定だとか、そんな話を五分钟左右するのが一回目。次が夕飯の済んで少し経った二十一時くらいで、現場でどんなことがあったとか夕飯にこんなのが出たのだとかそういう内容。

別にそんなに細かく電話しなくても差し支えはないのだろうが、俺からは特に言ったりしない。

多分、俺という第三者に一日の出来事を話すことで色々と振り返っているのだろう。

俺も野球やってた時は「野球ノート」といって、練習や試合の内容とそれによって得られた結果、そしてそこから次にどう繋げていくかということを書いて監督に提出していた。

自分で自分のことを客観視するということは簡単そうに見えて案外難しく、故に大切なのだ。

多分景も役者としてやっていくにあたり、俺に対するこまめな連絡もそんな意図があ

るのだろうか。

ただ、それにしても芝居の関係ない世間話みたいな会話の占める割合が多い気がするのだが、多分気のせいだ。

そんな俺は今スタジオ大黒天で朝飯を食っている。昨日はバイト帰りにそのままスタジオに寄ってそのまま一泊した。

トースターでこんがり焼いた食パンを咀嚼しているとスマホが鳴る。見てみると、相手は景だった。

「誰？」と正面に座っているレイに尋ねられたので、景からだと答えて席を立つ。そのまま隣の部屋に移動してから画面を操作して会話を開始する。

『千世子ちゃんと友達になるにはどうしたらいいと思う？』

急だな。俺はそう言った。

景が俺に電話をかけてきたのはこれを聞くのが目的なのだろう。ただ、普通の人ならワンクッション置いてから本題を口にするところを景は開口一番に言った。

これでは質問の前後関係が分からないから返答に困ることがある。

芸能人としてなら天然ぼくてキャラ立ちとしては良いと思うが、日常生活では相手を困らせてしまうことがあるかもしれない。

『あ……あの、私ねクライマックスのシーンで友達として千世子ちゃんを庇って死ぬ役

なの。だけど私千世子ちゃんと友達じゃないから演じられないかもしれないと思つて……』

成る程、事情は把握した。景の言う千世子ちゃんは同じ現場にいる百城のことだろう。

景の演じる「ケイコ」は作中において百城演じる「カレン」と友人関係であり、故に景は百城と友達になる必要がある、と。

そして最期はカレンのために死ぬらしい。そうやって死ぬのか……。

何だか特大のネタバレをされたが聞かなかつたことにする。

景演じるケイコはこの映画のオリジナルキャラであり、どんな形で原作に関わるか楽しみにしていたのだがまあ仕方ない。これは予防線を張つていなかった俺が悪いのだ。

『あつ……ご、ごめんなさい……』

いや、俺は何も聞いていない。ケイコがどんな最期を迎えるかも全く知らない。だから景が謝る理由もない。そういうことだ。

『わ、わかつたわ』

顔は俺に見えていないが、恐らく向こうで景はこくこくと頷いているのだろう。長い付き合いの俺には分かる。

『もしあなたが殺されそうになったら身を挺して守ると思うわ。これって友達だから当

然よね?』

え、何だか重くない? そう思ったが口にはしない。

よく考えてみれば俺だって、夜風家の面々に危機が迫ったら腕の一本や二本は捨てるつもりで助けるだろうし、多分お互い様なのだろう。

『やっぱりそうよね!』

「ああそうだと」と俺は返した。

それにしても、百城の奴と景はまだ仲良くなっていないのか。あいつは人当たりもいいし別に普通に話しかければ問題はないと思うのだが、やはり最初は誰だって緊張するものなので仕方ないのかもしれない。

『だから私も千世子ちゃんと友達になりたいの。だからその、アドバイスとか…あるかしら?』

俺から言えることは、兎に角フレンドリーに接しろということだろうか。頑張つて百城との距離を詰めるんだ。大体の人間はそうすれば仲良くなれる。

だがまあ行きすぎて引かれてしまつては元も子もないので、そこら辺りは塩梅を見て判断しろとしか言いようがないが。

『とにかく頑張つてみるわ』

何だろう、積極的に友人を作ろうと努力している景を見ると涙腺にくる。

今までは生活費を稼ぐためのバイト漬けの日々で、高校の友人と遊んでいるところなど見たことがなかった。

景がもつと自由な時間をとれるようにと、俺のバイト代の何割かを渡すことをかつて提案してみたものの、それは悪いと断られたため結局俺は殆ど力になることはできなかったが。

金銭問題という一家の一大事に毎日追われる生活をしているものだから、当然外部の人間との関係は希薄になるし、彼女はそれを受け入れていた。

そんな景が自分から友人関係を構築しようとしているのだ。感動しないわけが無い。

『あっ』

景が思い出したようにそう呟いた。

どうしたのだろうか、何か言い忘れたことでもあるのだろうか。

『その……この映画公開されたら一緒に見に行かない？』

ふむ、確かに今までレイとルイを連れて四人で映画を観に行くことは無かった。今回のデスアイランドは景も出演するのだし、あの二人も喜ぶだろう。

確か公開は来年だった筈なのでまだまだ先の話だが。

そういえば百城とアキラ君の二人からも一緒に観に行かないかと言われていたが、まあ三回観れば良い話である。

地雷映画だったら途中から嫌になりそうだが、毎回それぞれの役者に注目して視聴すれば飽きは来ないだろう。あとは細かい小ネタみたいなのを探したり。俺は案外そういうのは好きだ。

デスアイランドの手塚監督は今までも原作有りの実写映画を何本か手がけており、故に原作ファンが喜びそうなポイントを把握しているだろうから、もしかしたら見つかるかもしれない。

それに湯島さんが出演しているので多分問題ない。寧ろこれでお釣りが来るのではないだろうか。

『そ、そうじゃなくて』

ん？ そういうことじゃないとは、どういうことだろう。

『二人で行かない……？』

二人で。その言葉の真意を何度も噛み砕き、反芻を繰り返して脳内にしまい込む。危ない危ない。思わずドキツとしてしまったが、幸いそれを表に出すことは無かった。あくまで冷静に、いつも通りだ。これでオーケー。

これで動揺しているようではダメだ。落ち着いて考えれば理解できる筈なのだから。景の言葉はそういう意味ではなく、「レイとルイがいるとどうしても賑やかになつてしまいゆつくりと自分の演技を振り返ることができないから」二人の方が良い」という

意味の方だろう。経験を積んだ俺には分かる。何の経験かと聞かれたら答えられないかもしれないが。

全く驚かせやがって。

勿論了承する。断る理由は無い。

『た、楽しみにしてるわ！』

俺も楽しみにしていると返答する。

『だから私撮影頑張るわ。だから、その、応援していてね』

それからは適当にレイとルイについてだったり、スタジオオ大黒天の二人に関する話を五分ほどして電話は終了した。

何やらドアの向こう側でレイとルイと柗さんが俺たちの会話に聞き耳を立てているのに途中から気がついたが、どうするべきか迷って結局触れないことにした。

何故気がついたのかといえば、「ちよつと押さないでよルイ」というレイの声だったり、「しーっ。気づかれちゃうよ」といった柗さんの声がバツチリ俺まで聞こえていたからだ。普通に声は大きかった。それでバレないつもりなのだろうか。

もしかしたら柗さんは天然ちゃんなのかもしれない。それはそれで可愛いので別に良いと思う。

## 第七話

23

天使こと百城千世子が演じる「カレン」と、新人女優夜風景が演じる「ケイコ」の兩名が全ての元凶である黒幕に接近するという映画デスアイランドのクライマックスシーン。

台風が直撃している中で実行された、その撮影現場にて起こった予想外の出来事。

それは、撮影中の役者二人を襲った大雨による川の増水だった。

百城の足が水に取られ、斜面に流される既のところ、夜風が百城を庇う。

台本とは異なる形で、「ケイコ」は「カレン」の身代わりとなり最期を迎えた。

当然現場のスタッフや離れた地点から兩名の撮影を観ていた他の役者らは肝を冷やす。

それは百城も例外ではなく、スタッフに対して夜風を救出してくれと叫ぶ際の彼女の行動は紛れも無い本心からだった。



このシーンの最後。

ケイコによって命を救われたカレンが「ありがとう」と口にするシーン。それを言う百城の顔に仮面は無かった。夜風の芝居が百城の仮面を壊したのだ。

結局、夜風は事前に張り巡らされていた安全ネットのお陰で軽傷で済んだが、その日から高熱を出して寝込んでいる。

大雨に長時間打たれ、挙げ句の果てには全身に水を浴びたことが原因だった。或いは、この一ヶ月で溜まった疲労の影響もあるかもしれない。

彼女が水に流され、そして死を意識した瞬間。

彼女の頭にまず浮かんだのは、関わりのある人々の姿よりも、自身の顔に傷がついているかどうか。

芸能人にとって顔に目立つ傷が残ることは、運が悪ければ役者人生の終了を意味するかもしれない。それを彼女は心配した。

幸いにも、夜風の顔に傷はない。

今までと変わらない、滑らかで白い肌がそこにはあった。

自身の出番が全て終了した夜風だったが、体調不良のためクライマックスシーンの撮影から三日間が経過した現在でも自室のベッドから出られていない。

かと言って発熱した初日と比べればだいぶ楽になり、快方に向かっているという自覚は彼女自身にも存在する。

鉛のように重く感じられた身体は幾分か軽くなり、何より食欲が戻り始めていた。

夜風はスタツフが部屋に持ってきてくれたパイナップルを咀嚼する。

甘酸っぱさが怠い身体に染み渡るのを感じながら、その美味しさに驚く。

スタジオ大黒天にいるであろうルイとレイにも食べさせたいと思うも、無理であるので一人で舌鼓を打つ。

そんな彼女が次に行ったのは、知り合いである青年とのチャット欄の確認だった。

青年との最後の連絡は三日前の朝。

つまり夜風が撮影中の事故にあった日である。

朝食後の七時三十七分。

その時間に八分間電話をした形跡が残っていた。それから丸二日間、メッセージのや

り取りは無い。

その間夜風は高熱によって苦しんでおり、それによってメッセージを送る余裕がなく、そして青年側からも何かを送ってくるという事は無かったからだ。

夜風はその事実には微かな不満を感じていた。

撮影に来てからの一月弱毎日の様に電話をしていた相手から急に音沙汰が無くなったのに、向こうからの動きは何もない。

夜風の身に何か起こったのかと、連絡の一つや二つ入れてくれればいいのに。

夜風はそう思い頬を膨らませる。

実際には、青年はスタジオ大黒天にいるルイとレイから夜風の発熱のことは聞いており、高熱で大変な彼女に返信の手間をかけさせるのは悪いと思つての行動だ。

夜風は熱を出した当日の夜、湯島の助けを借りて何とか終に「今体調を崩している」と伝えている。

青年はそれを知った。

だが未だに熱が引ききつておらずその影響で頭がよわよわになった夜風にはそんな背景を考える余裕はない。

そんな時。

ピロリン、と機械音がスマホから丁度鳴る。

『身体は平気か?』という短い一文。タイミングの良いことに、青年からだった。噂をすれば何とやらだ。

文脈を見るに、自身が体調を崩していたことをどうやら知っているらしい、と夜風は理解した。

自分から連絡をしていないことで彼の頭の中から忘れられた訳ではないのだと知りほつとする。

夜風にとつて青年はレイとルイを除けば最も信頼している人間であるので、それに向ける感情は案外重い。

現在の時刻は午後五時を少し回ったところ。

青年は学校帰りなのか、毎日の様に入っているバイトや部活はまだ始まっていないのだろうか。

夜風は色々と疑問を抱くが、とりあえず通話を試みることにした。

大分体調は回復しているということを伝えて、メッセージのやり取り程度は問題ないということ伝える必要はないと考える。

何故か緊張する夜風の心境に対して、数回のコールであっさりと青年は出た。

『もしもし』

「あ、えーと……こんにちは……?」

『二日間電話しなかったくらいで他人行儀になる必要はないぞ?』

開口一番、どこか余所余所しい話し方の夜風が面白かったのか、返答には多少の笑い声が含まれていた。

『景が熱出したってレイから聞いたよ。もう大丈夫なのか?』

『結構良くなつてきてるの。まだベッドから出られないけど』

『なら良かった。昨日も見舞いの電話でも入れようかと迷ったんだが、病人にわざわざ余計な体力を使わせるのもどうかと思つてな』

『ぜ、全然大丈夫よ!』

『そうか』

夜風の胸にあつた、青年に対する不満の類は既に消えている。

電話をして来なかつた理由が自分の体調を心配してのことだったのだと知つて一安心した。

寧ろ心配してくれたことに対する嬉しきの方が優つていた。

『前回の電話で台風による雨風が凄いと云つていたが……その中で撮影したのか?』

『うん、千世子ちゃんと二人で撮影したの』

『ええ……大丈夫なのかそれ』

青年の驚きは尤もだ。

「彼は三日前、つまり夜風の最後の出演日に、夜風からホテルの外の様子を映した動画を送られている。

水桶をひっくり返した様に轟々と地面を叩きつける雨、木の枝や幹を容易くしならせる程の強風。

そんな中で撮影を行うなど正気ではない。

新人である夜風は兎も角、メディアに引つ張りだこの百城に万が一のことがあればタダでは済まされまいだろう。

だが台風の中の撮影は他ならぬ百城の意向でもあった。

「それでね、私ちゃんと千世子ちゃんのことをカレンだと思ってお芝居出来たの！ それに空から爆弾が降ってくるのもはつきり見えたわ！」

『爆弾……？ そんなシーン原作にあったか？ まあ俺には詳しいことは分からないが、納得のいく芝居が出来たのなら良かったじゃないか』

青年は夜風の発言を聞き一瞬ギョツとしたが、まさか本当に撮影で空から爆弾を落とす訳はないだろうと考え直す。

夜風が言っているのは恐らく地面に設置された火薬か何かのことで、役に入り込んだお陰でそれらが本当に空から降ってきたように思えたのだと。

彼は数秒遅れて理解した。

数年に及ぶ付き合いのお陰で、青年は夜風の発言を翻訳する技能が上達している。流石にレイとレイには及ばないが。

「千世子ちゃんを庇った時、本当に死ぬかと思ったわ」

『はは、そんな大袈裟な』

「山の斜面から水がぼーって流れてきたのよ。千世子ちゃんがよろけちゃって、引つ張りあげたら私の方が流されちゃった」

『……』

「?……どうしたの?」

青年は既に一週間程前、電話にて不意に夜風からケイコの最期に関するネタバレを喰らっているため、そのことを話話の話題に出すことは特に気に留めていない。

彼が気を取られたのは別の箇所だ。

斜面から水が流れてきて流された。そんな、夜風が命の危険を感じる程に危険なシーンを演じたのかと彼は驚いている。

『随分ハードな台本なんだな』

「あ、それについてなんだけどね。私結局台本通りにお芝居することが出来なかったの!」

『……ん? さつき水に流されたって言っただろう?』

「それは本当は台本にはない展開なの」

『……つまり事故ということか？ 斜面を流されたことも？』

「うん」

夜風的には顔に傷が残っていないので、事故のことは特に何も気にしていない。

だが青年にとってはそうはいかなかった。

夜風の話を纏める。

台風の中撮影を継続した結果事故が起こり、夜風と百城の運が悪ければ最悪の事態もあり得た。字面としてみると大分リスクである。

『……本当に頭は大丈夫か？』

「えっ!? い、いきなり酷くないかしら!？」

『ああすまん、言い方が悪かった。俺が意図していたのは頭をぶつけていないかという意味だ』

「あ、そういうことなのね。ううん、別に平気よ」

『他の箇所は？』

「どこも大丈夫」

『本当に？』

「本当よ」



彼は百城から撮影現場のことを聞くことはしばしばあるが、「事故で死にかけた」などと言われたことは一度もない。

彼は声色や態度には出ていないが内心途轍もなく心配している。

映画撮影中の死亡事故というのは偶に聞く話であり、夜風と百城がその当事者にならなかったことに安堵していた。

それはそれとして、もし撮影地が本土だったなら交通機関を乗り継いで現場に殴り込みに行つたかもしれない。彼はこういう場合案外短絡的である。だが流石に沖縄は距離が遠すぎた。

撮影日数の関係で撮影の続行は映画のクオリティの為には致し方なかったこと等を彼は知らないのです、友人が危うかったと聞けばこう考えるのも仕方ないかもしれない。「……あれ、もしかしてちよつと焦ってる?」

何と夜風は青年の動揺を見破った。これも数年に渡る付き合いの賜物かもしれない。青年としてもまさか電話越しで気付かれるとは予想していなかった。

「心配してくれてるの?」

『……まあそういうことだ』

「……ふふ、そうなのね」

『おい、なんで笑う。なんか小つ恥ずかしいな』

青年が自分を心配している。

それだけのことなのに、夜風は心のどこかが満たされる感覚を抱く。「嬉しい」とも「楽しい」とも違う、絶妙な感情。

彼女は今まで経験したことのないものだった。

夜風は布団に包まりながら電話を続ける。夜風にとって時間はまだまだ残っていた。

## 25

全ての撮影の終わった最終日。

未だ現場に残っている役者とスタッフによる打ち上げのバーベキューも終了し、手塚らが持ってきた花火を各々が楽しんでる。

スターズ組は多忙故にクランクアップした者から東京へと帰って行ったので初日よりも人数は減っているが、それでも大規模な撮影が終了したことへの達成感を一人一人

が抱いているためだろうか。会場であるビーチは活気に溢れていた。そんなビーチにて。

天使こと百城千世子は共演者らの輪から離れる様に歩いていく。

共演した夜風景との、デートという名の反省会も既に終了した。

花火に混ざりたい気持ちもあるが、花火と、これから彼女が行おうとしていることを心の天秤にかけてみて重かった方は花火ではなかった。

堤防の上に繋がる階段に誰もいないことを確認して腰掛ける。

彼女が座っている場所のお陰で目線が下にいた頃よりも高くなったので、階段脇の鉄格子の隙間からはビーチが一望できた。

百城はスマホを取り出し、とある人物へ電話をかける。

この曜日、そしてこの時間ならば恐らく何も予定が入っていないだろうということを彼女は把握していた。

『あーもしもし?』

百城の予想通り、彼女がコールをした相手は電話に出た。

彼女と最も親しくしている人間の内の一人である青年だった。

その口調は友人に向ける様な軽いものであり遠慮は感じられない。

「今、大丈夫?」

『別に問題ない。飯食つてたところだ』

「奇遇だね。私達も今までご飯食べてたんだ。この後私のインスタ見てみなよ、皆と撮影の打ち上げのバーベキューやったの」

『夏らしくて良いじゃないか。羨ましい限りだ』

「じゃあ今年やる？ これから私の予定が合えばだけど」

『別に無理して予定入れなくていいんだぞ？』

「……無理じゃないよ」

そんな終着点の無い会話をだらだらとする二人。

青年の方がどう思っているかは分からないが、百城はこの時間が好きだった。

百城は青年と話している時には天使としての仮面を被らなくても良く、ありのままの自身でいられるのだから。

女優という不特定多数の人間の目に触れる職業柄、ストレスや遣り場の無い怒りなどが溜まることは珍しくない。

ましてや百城は未だ十七歳。

未だ発達中の、多感な少女の心。

そこに負の感情をただ積もらせているだけではいずれキャパを超え、精神的に限界を迎えてしまうだろう。

若くして彼女のその双肩には、数々の映画やドラマの成功という重荷が乗っている。投入された資金だけでも莫大な金額に上り、更に数百万、数千万の視聴者からの期待が上乘せされるとなると、その負担は言うまでもない。

そんな彼女の精神安定に大きく貢献していたのが青年だった。

百城にとって、彼は自身のファン一号。

両親や近い親戚を除けば最も親しい存在である彼に百城は大きな信頼を寄せていた。彼女が映画やドラマに出演すればまるで自分のことのように喜んでくれる。

愚痴や鬱憤をうんうんと何も言わず頷きながら聞き役に徹して、最後に労いの言葉をかけてくれる。

その本人がどう考えているかはさて置き、百城のメンタル面において彼が大きな影響を与えていたのは紛れも無い事実であった。

「私今回の撮影頑張ったから、ご褒美欲しいな」

ぶつきらばうにそう言う百城。

青年はそれを聞き、数秒考えた末に発言した。

『何か食いに行くか？ 頭おかしい値段じゃなきゃ奢るぞ』

「うーんそれも良いけど、それじゃあいつもと変わらないよね」

『ええ……？』

まさか却下されるとは予想しておらず、電話の向こう側で頭を抱える青年の姿が手に取るように分かり百城はつい笑ってしまふ。

恐らく今は無駄に回転の速い脳をフル稼働させて百城が何を「褒美として欲しがっているのか考えていることも、彼女にはお見通しだった。

伊達に長い付き合いをやっていない。

「この間ね、ロケで北海道行つたんだけどそこで色々買ったんだ」

百城は不意に語り出した。

「私の家で食べようよ。ちよつと量が多くて食べきれないの」

『別に良いが……食い切れるだけにしておけとあれ程言つたのに』

「あはは、ごめんごめん」

『前も同じ様なこと言つてただろう。まあ俺は美味いもん食えるから別に損してないけど』

百城の家に行く。

その言葉を会話中に聞いたら多くの日本人は驚愕するだろうが、青年にとってはなんて事はなかつた。

友人の家で飯を食う。それくらいの感覚。

今までに何度も行われてきた行為であるので青年は特に重く考えてはおらず、百城も

同様だったが、それはそれで何故か悔しい。

『それじゃあご褒美の方に話は戻るが、何が良い？ 考えてみたが分からん』

「あ、もうそつちは別にいいや」

『……?』

「お土産一緒に食べるから」

『……いや、それだと俺がおいしい思いをするだけなのだが』

「いいんだよ。よく考えたら欲しいものなんて無かったし」

『……そうか』

「うん。来週の土曜日とか空いてる？」

『まあ夜飯の時間帯なら』

あまり長いことビーチから居なくなるのも他の俳優やスタッフから不思議に思われ  
てしまうかもしれないと考えて、百城はそろそろ電話を切り上げようと考えてる。

まだ電話をしていたい気持ちもあるが仕方ないと気持ちを切り替えた。そして仮面  
を再び被る準備も。

「そろそろ一旦切るね。続きはまた今度。空いてる時間にこつちからかけるね」

『おう、打ち上げ楽しめよ』

「うん分かった」

終了ボタンをタップして会話を切り、百城は集まって花火をやっている共演者の下へ帰って行く。

浜では誰かが打ち上げ花火を一度に全て点火したらしい。

耳をつんざく大きな音とカラフルな花火火薬の光が眼に映る。

彼女の足取りはどこか軽やかだ。

そんな彼女の姿に、たまたま近くに居た町田リカが気が付いた。

「千世子ちゃん、嬉しそうだね」

「そう見える？」

そう言っても見惚れる様な微笑みを浮かべる彼女の顔には、既に仮面が戻っている。

同じ事務所で長く親交のある彼女が相手といえど、百城が仮面を外すということはない。

この辺りの切り替えの速さは流石と言ったところ。

そんな時。

曇りのない星空に流れ星がきらりと光る。

「私のもっともつとずつと一生！ お芝居を続ける!!」

ビーチに声が響く。



それは夜風の声だった。

台風の中でクライマックスの撮影、その際の夜風の迫真の演技はカメラの前ではびくともしなかつた百城の仮面を一時ではあるが崩すまでに至っている。

それは百城にとって初めての経験。

彼女が夜風に向ける感情は、撮影が始まった一月前のそれとは明らかに異なっていた。

「あはは、夜風さん元気いいな」

そう言って笑う百城。

流れ星に自身の夢や願望をお願いする者がいたり、流れ星を見つけてははしゃいだり。

彼女の目線の先には、そんな共演者達の姿がある。

それから暫くした後、夜風の周囲にいた俳優達は集まり彼女のTシャツに各々のサインを書き始める。

胸元に「無地」と書かれた、他の部分は真っ白のTシャツ。

撮影中夜風が特に関わった共演者たちのサインで白シャツは空白を埋められていく。

「つーか夜風、こういうのどこで買ってるの？ 罰ゲーム？」

そう発言したのは、共演者の内の一人である堂上竜吾だ。

撮影二日目にゲロをかけられた彼。

一時は撮影スケジュールを乱した夜風と険悪な雰囲気になっていたが、今では既に解消されている。

これは夜風に対する煽りとか、そういう悪意のある発言ではなく本心からそう思っている言葉だ。

スターズに所属し、であるからこそ芸能人らしく服装にもそれなりに気を遣う彼にとって、夜風の服のセンスは理解できなかった。

何が目的で胸元に無地と書かれたシャツを着ているのか。

ネタ目的と言われれば納得できるが、この一ヶ月間夜風が着ている服はどれも似たり寄ったりだった。

中央にでかかど「アサガヤ」と書かれていたり、ゲロを吐くアニメ調のカエルの絵がプリントされていたり。

ある意味では、平然と着ている服のチョイスを嘲笑されるよりも罰ゲームだと思われる方がキツいかもしれない。

「罰ゲームじゃないわ！ 友達と一緒に買いに行ったのよ！」

「流石にネタじゃねえの？」

「ふざけて選んでなんかないもの、『景は美人だからシンプルの方が似合う』って言って

くれたのよ!」

「え……そいつのセンス終わってね?」

「お、終わってなんかないわ!」

ダサイダサくない論争を、周囲の人間も巻き込んで繰り広げる夜風たち。

わいわいがやがや、色々と言っているが詰まるところ夜風の友人のセンスは終わっていた。これは紛れも無い事実である。

高校に入るまでダンスに入っていた服はジャージかスポーツウエアで、数少ない私服も百城を選んで貰っていた上下の一式だけという有様。

彼の小学生以来の行動原理は「モテたい」の一言に尽きていたのにもかかわらず服装を特に重視しないという、聞いた人間が思わず首をひねるような夜風の友人である青年のムーブ。

こういう細かい所からも、彼の頭の残念さが窺える。

ちなみに夜風も青年と似たような美的感覚の持ち主であったため、特に疑うことなく服を購入して現在まで着ている。

近くで見ていたレイとルイは「納得しているならいいか」と特に指摘はしていなかった。

青年は幼い頃からセンスの塊と言っていていい百城を間近で見えてきて、更に高校に入つて

からはファッションに精通している周囲の同級生や、星アキラと接することで流石に自身のファッションセンスがおかしいことに気がついてはいる。

だがそれなのに夜風を選んで服は特に問題がないと思っていた。うーん、この。

「あ、茜ちゃんはどう思ってるの!？」

「あー……正直に言うと、ちよつとアレやね」

「茜ちゃんまでそんな!? ……あれ、でもちよつとオシャレになつてきた?」

「うそ……ほんまに?」

夜風の目には自身の着ているTシャツが前衛芸術か何かに近いものとして見えてい  
るらしい。やはり夜風のセンスは独特だった。

彼女は少し離れたところにいる百城を見つけると、彼女の方を向いた。

「ねえ私千世子ちゃんにも書いてほしい!」

手をメガホンの形にしてそう言った夜風。

それを聞いた百城はトコトコと歩いて近づいていく。そして一言。

「高いよっ!」

「え……い、いくらっ?」

彼女としてはちよつとした天使ジョークの筈だったが、夜風は百城の言葉にビ  
ビった。今彼女はいくらまでなら出せるか本気で考えている。

現在大人気の若手女優。

そんな彼女だからこそ服にサインを書いて貰うためだったらいくらでも出すという人間は数え切れないほどいるだろうし、その事実が彼女の「高いよ?」という返答に對して本当かもしれないと考えさせる。

彼女のサインはオークションサイトなどでかなりの高値で取引されているという事実もある。

これは別に夜風に限った話ではなく、湯島にとつてもネタなのか本気なのか微妙な判定だった。

確かに殺し屋から「殺すぞ」とジョークを言われたら本気で受け止める人は多いだろう。

「もー冗談だよ冗談。お金なんていらナイよ」

百城はマジックペンを受け取ると、夜風のシャツの胸元にある無地の字の真ん中に大きく「ちよこ」と平仮名で書いた。「こ」の部分が天使の羽の様になっている。

サインまで天使仕様なところにも、彼女の意識の高さが現れていた。

「ありがとう千世子ちゃん!」

「どういたしまして」

夜風は自身のシャツに書かれた百城のサインを見て嬉しそうにしている。

まるで憧れのスポーツ選手にサインを貰った子供の様に目を輝かせていた。

夜風にとつてそのサインは百城と友達になった何よりの証拠。かけがえのない宝物であり、東京にいる友人にこれを早く自慢したいと思つてゐる。

「あ、そうだわ」と夜風が一言。何かを思い出したように口を開いた。

「千世子ちゃん、写真撮つてくれない？」

「いいよ」

そう言つて夜風は百城にスマホを渡す。

海を背景にして両手でピースをして、シャッターは切られる。

ポーズを変えつつその後数枚撮影して百城は夜風にスマホを返した。

「誰かに送るの？」

「うん。千世子ちゃんにもサインを貰つたつて自慢するわ」

「へえ、お友達？」

「そうよ。私ちゃんと友達いるのよ、嘘じゃないわ！」

ちゃんと友人がいることをやたら強調する夜風。

百城は「別に存在を疑つたりしてないよ」と夜風に返答しつつ脳を働かせる。

夜風の友人。

百城は撮影が開始されてまだ間もない頃を思い出す。

百城が湯島茜に、友人である青年が欲しがっていた彼女のサインを貰いに行った際のことだ。

湯島は夜風の友人にもサインを書いたと言っていた。歳は湯島よりも一つ上だと言っていたので、その情報が正しければ十九歳の男子。その年齢は百城の友人と同じだ。

それだけならば単なる偶然なのだろうが、もつと深追いしろと百城の中の勘が囁いた。

「ねえ夜風さん。そのお友達ってどんな人？」

「どんな……あ、優しいわ！ あと茜ちゃんを大好きなの。だよね茜ちゃん！」

夜風は湯島の方を向いてそう言った。彼女の言葉選びに湯島はつい笑う。

青年が湯島に向ける感情はラブではなくライクの方である。ただし特大であるという注釈はつくが。

「あはは、その言い方だと誤解を招くで夜風ちゃん」

「あつごめんなさい。その人茜ちゃんの大ファンなのよ」

「湯島さんの出た作品全部観るくらいでしょ？」

「え……なんで分かるの？」

「この間湯島さんから聞いたんだ。私の友達も湯島さんのファンなの」

年齢、性別、好きな女優。

これ位の共通点を持った人間ならば、探せば何処にでも居るだろう。だが百城はそうは思わない。

百城は更に質問を続ける。

ニコニコとして夜風との距離を詰める百城を見て、この場にいる他の俳優たちは何かを感じ取った。

少しずつ、ジリジリと百城と夜風から離れる。

何が彼らにそうさせるのかは彼ら自身にも分からない。百城は何時もと同じく天使の様であるというのに。

この時丁度すぐ近くを通りかかった星アキラも只ならぬモノを感じて足を止めた。

但し夜風は百城の様子に何も気付いていないようだ。

夜風は百城からの質問に嬉々として答える。彼女は自身の友人のことを百城に紹介したかった。

「ええと……そうだ！ この前千世子ちゃんがテレビに出ている時、千世子ちゃんのことと褒めてたわ」

「どんな感じですか？」

「『こいつの努力は凄い』って弟たちに言ってたわ。でもいくら褒めたって千世子ちゃん



に対してこいつ呼ばわりは失礼だと思わない？　いつもは他の人にこいつ呼ばわりなんてしない人なのに不思議だね。注意したらちゃんと呼び方直ったけど」

「……他には何かない？」

「あ、千世子ちゃんがケーキ屋さんに行く番組が先月あったでしょ？　その時千世子ちゃんが『生クリームが大好き』ってコメントした時笑ってたわ。何が面白かったのか私には分からないけど……」

「ふーん、そっか」

「他にも色々あるのよ例えば——」

止まることなく夜風の口から語られる、百城が関係する夜風の友人のエピソード。その漏れなく、何故か百城のことを知っているかのような雰囲気を感じられる発言をしていた。

直接は言っておらず、百城にはそう感じられるというだけであるが。

バラバラだったピースが、うまい具合に噛み合いながらはまっていく。そうして百城の頭の中には一つの考えが完成した。未だ周縁部の不確定要素は多いが、中心となる情報部分が集まりすぎた。

とは言え、青年は自身が百城千世子の知り合いだと周囲にバラしたことは今まで一度たりともない。それがたとえ夜風家の友人だったとしても同様だ。

百城が不利益を被ることを青年は望んでいない。

しかし、時々夜風家でリラックスしているとポロリと百城に関する発言をしてしまうことがあった。

彼の性質として、詰めがすこぶる甘いことが挙げられる。これは彼の幼少期から続く悪癖だ。

それによつて今まで重大なミスは起こしていませんと考えている彼であるが、別にそんなことはない。単に彼が気がついていないだけだ。

そのミスは主に百城関連だったりする。

その結果が例えばそう、今この瞬間。

「ねえ夜風さん。その人とお話ししてみたいんだけど、良いかな？」

百城の姿を、湯島らの集団に混ざって見ていた星アキラは何故か背筋が震える感覚を覚える。

彼の頭の中には、遠慮の要らない数少ない友人である青年の姿が浮かぶ。

星の頭の中での彼は白い歯を見せながら微笑み、グッドポーズをしていた。

何故か分からないが、彼は唐突に青年のことを思い出したのだ。

「多分大丈夫よ！ あ、でも急に千世子ちゃん電話に出てきて驚かないかしら……？」  
「多分、平気じゃないかな？」

夜風はスマホの電源ボタンを押し、開くためにパスワードを打ち込んだ。

## 第八話

26

夜風が操作するスマホの画面をじっと見つめる百城千世子。

「そ、それじゃあ電話するわね」とやや緊張気味の夜風。彼女が画面をタップした指の先には百城の見慣れたアイコンが。

「夜風さん。さっき言ってたお友達ってこの人？」

「うん、そうよ」

「……へえ、この人」

電子の海を漂うフリー素材の内の一つの、しば犬の写真がホーム画面。そして下の名前を片仮名にしただけの三文字のユーザーネーム。

凝る人のものでは長文になっていたりすることもあるステータスメッセージの欄には「よろしくお願いします」とだけ。

至ってシンプルなその画面に百城は見覚えがあった。というよりつい数分前まで会

話していた人物のものと全く同じである。

百城は全てを理解した。

夜風の話と、彼女自身の記憶を基に九十パーセント位で確信していたことが百パーセントに。

それは夜風の言っていた「友達」の正体である。

百城が先程夜風らに合流する前まで電話をしていた、今は東京にいるのであろう青年。

彼は夜風の話から推測するに、かなり彼女と親しいらしい。

初期設定の呼び出し音が鳴る。夜風は百城にも相手の声が聞こえるようスピーカー設定にした。

夜風は百城を紹介するということで緊張から心臓の鼓動が速くなる。

「き、緊張するわ……」

「この人と電話するのは珍しいの?」

「あ、緊張しているってそうじゃなくって、千世子ちゃんを紹介するから……。別にこの人と電話は毎日してたから緊張なんてしないわ」

「へえ、そうなんだ」

また一つ夜風が地雷を踏み抜いたことはきっておき。

何せ夜風の隣にいるのは百城千世子。この国を代表する若手女優だ。

夜風は勿論今電話をかけている相手が百城と既に知り合いだとは知らない。

いきなり電話に天使が出てきたらさぞかし驚くだろうと思う。と同時に、すっかり百城のことを青年に紹介できるかと緊張している。

だがそれでも彼ならば相手が誰であろうと何やかんや上手くコミュニケーションを取れるのだろうという安心感はあるが。

「で、出ないわ……」

「そうみたいだね」

「今何かしているのかしら……？　もしかしてお風呂とか……」

青年は夜風からの電話に出なかった。

出ないなら仕方ない。百城を紹介するのは諦めよう。夜風がそう思いコールを切る。

「ごめんなさい千世子ちゃん。あの人電話に出ないの」

「じゃあしようがないか。……とところで夜風さん」

青年と電話が繋がらずに残念がつている夜風に、後ろで手を組んだ百城がぐいっと近づく。

二人の顔の距離は十センチもない。

夜風と百城が初めて会った顔合わせの日。夜風が百城に「あなたの芝居は人間じゃな

「いみたい」と言った際と構図は同じだった。

百城の目力は多分今の方が強い。

「この人と仲良いみたいだけど。二人つてき、付き合ってるの?」

百城の言葉を夜風は何度も頭の中でループさせた。

付き合っている。百城が言ったのは男女の関係。つまりカップルなのかどうか。

「そ、そんなのじゃないわ! 全然違うもの!!」

手を身体の前に突き出してぶんぶんと動かし否定する夜風。だが彼女の頬は紅かった。これは夏の気温と湿度によるものか。それとも。

それに気が付かない百城ではない。彼女は夜風の顔をじーつと見つめる。彼女は大体のことを理解した。

そして、あと少し経ってからこっちから電話してやろう。百城はそう思う。

東京に帰ってから直接会い話を聞くのでは、それまでの数十時間は彼女にとって長すぎた。

電話をかけるにあたり、海の近くまで移動していた夜風と百城。やがて切り上げ湯島茜や星アキラのいるところまで戻ってくる。

「電話繋がらなかったわ……千世子ちゃんのこと紹介したかったのに」

残念そうに湯島にそう言った夜風。今の彼女にはしよぼんという効果音が似合う。

「まあ出ないならしょうがないやん。もしかしたらこの後折り返しの電話が来るかもしれないし」

「そ、そうよね！」

そんな二人のやり取りを横目に見ていた星アキラ。

彼は夜風と百城が会話をしている最中に偶然近くを通って立ち止まったので、それまでの二人のやり取りを知らなかった。

その場にいた湯島から、「夜風が友人に百城を紹介する」ことを聞いた。それだけならば何も問題はない。その筈。

胸に手を当てると、心臓の鼓動は何時もより速くなっている。何故か自然と緊張して心拍数が上がっていったらしい。手にはじわりと汗が滲んでいる。

「あの、千世子ちゃん。もう少し時間経ったらもう一回電話かけない？」

夜風は百城にそう尋ねる。

この打ち上げがいつまで続くか分からないが、浜に居る間でも宿舎に戻ってからでも時間はある。

撮影は終わったので、百城が毎日行っていた共演者や台本のチェックは今夜は必要ない。

「たまに変なことするけど普段は真面目で良い人なの。色々手伝ってくれるの」



「たとえばどんなこと？」

「ええと……洗濯物畳んでくれたり、お掃除手伝ってくれたり、あと買い物手伝ってくれたり。『俺が持つよ』って買い物袋とか沢山持つてくれるのよ。あ……去年商店街の福引で当てた電子レンジをくれたの！ 私の誕生日近いからって」

夜風は早口だ。

「……へえ」

「でも、大体のことは出来るのに料理はあまり上手じゃないの。カップ焼きそばだって私が作った方が美味しいらしいわ。お湯を注ぐだけなのに不思議よね」

百城に自身の友人を紹介する夜風。

特に料理の下りを語る時の彼女はどこか得意げだった。その理由として夜風は料理の面で青年に頼られていると考えていたし、実際その通りであるから。

普段は鉄仮面の青年がカレーを口に運んだ時に見せる笑みを見ると、夜風はこれ以上ない達成感を得る。

それを聴き終わった百城は一言。

「……じゃあもう一回電話、しよっか」

彼女は微笑みながらそう言った。

百城との電話が終わった俺はシャワーを浴びることにした。

脱いだ服を洗濯機に投げ入れる。

右手には今日の昼間に街を歩いていたら試供品で貰った使い切りサイズのシャンプー。有名女優の環蓮が最近CMに出ている新発売のやつだ。

環蓮といえば、言わずと知れた大物女優。

抜群のスタイルに、整った顔立ち。巷で「天使」と形容される百城のような可憐さ、そして可愛さではなくザ・美人といった印象が強い。

大人の気品とでも言うべきか。

全身から感じられる凛々しさと力強さが視聴者の心をぐつと掴む。そんな女優だ。

容姿としては景が近いかもしれない。同じ黒髪ロングだし。

あと、ランニングコースで偶に会う人に似ている気がする。常にスポーツキャップを被っているので分かり辛いが。

まさか本人ではないだろう。国民的女優とエンカウントする確率など限りなく低い  
のだから。

いつもは軽く挨拶を交わす程度であるが、この間「君偶に見るけど良いフォームして  
いるね」と声をかけられ話す機会があった。

彼女もスタイル良いしモデルでもやっているのではないだろうか。

折角だから「環蓮に似てるって言われませんか？」と聞いてみたら「よく言われるね」と  
の返答。やはり自覚はあるらしい。

ただ少し笑っていたのが気になるが、何が可笑しかったのかは分からん。

親しみやすい人柄で好感度も芸能人の中ではずば抜けて高いという話を以前テレビ  
で見た。

恋愛関係のスキヤンダルがほぼノーダメとかどうなってるんだ。そういう記事を  
すつば抜かれたら百城とか一撃でアウトになりそうである。

ドラマなり映画なり、何気なく観ていたら彼女が出演していたというのはよくある  
話。

知名度は百城より上かもしれない。幅広い年齢層に人気なのだ。

何はともあれ、封を開ける。

半分くらいを手の平に出して、残った分が漏れ出さないように洗濯ばさみで袋を留め

て置いておく。

この量は一回で使い切るにはちと多い。それに俺は貧乏性なのだ。

CMやパッケージの情報から明らかに女性用に作られているのが分かるが、せつかく貰ったので男の俺でも使つて良いだろう。

椿オイルと十数種類のオーガニックエキスが何とやらの謳い文句。確かに匂いが凄く良い。

キツすぎない甘い香りがふわりと鼻腔をくすぐる。

……ふと思いつく。ビビツと頭の中を電流の如きインスピレーションが駆け巡る。

もしかして今この瞬間、俺のいるこの浴室の匂いは環蓮と同じ匂いなのではないだろうか。

今彼女がこれを使っているかは知らないが、少なくともCMの撮影時はそうだっただろう。

もしかして今世紀最大の大発見かもしれない。もしかして俺天才か？

……いや、やっぱりキモいわ。

一回死んだほうがいいかもしれない。少し遅れて気付く。気が乗っている時は案外自分では分からないものだ。

多分俺は今疲れているのだろう。よく考えたら最近バイト多かつたし睡眠不足気味

である。今日はもう早く寝た方がいいかもしれない。

さっさと全身を洗って浴室から出る。寝巻きに替えてリビングに戻り、麦茶を一杯飲んだ。

スマホを確認すると、景から着信が入っていた。十分弱前。丁度俺が浴室に向かった頃である。どうやらタイミングが悪かった。

早速俺は景に電話をかける。数回のコールで彼女は出た。

『もしもし……。今平気なの？』

俺は大丈夫だと告げて、さっきの電話に出られなかったことを詫びた。先程までシャワーを浴びていたのだ、と。

『ううん、全然大丈夫。あの、驚いて心臓止まらないようにね？』

緊張したような声で景はそう言った。

え、心臓止まるってこれから何するんだよ。スピーカーにいきなり大音量でも流すのか？

とりあえず警告に従い、息をゆっくり吸って吐いてを繰り返して落ち着いた。これで何が来ても問題ないだろう。多分。

すると景はビデオ通話に切り替え、画面の外に向かって手を招く。向こうで仲良くなった俳優が登場するのだろうか。

そう思ったら出てきたのは百城だった。

ふわふわしたシヨートの髪に白い薄手の服。一度目を擦ってみたがやはりそこにいたのは百城だ。

『こんばんは』

そう言つてニコリと微笑む百城。とりあえず今の彼女が仮面を被っていることは分かった。いつもマンツーマンで電話する時とは違う。

……こういう場合、どう返答すれば良いのだろうか。

とりあえず俺もカメラをオンに切り替えた。これで向こうにも俺の姿が映るだろう。

百城レベルの芸能人にもなると交友関係にも気を遣うだろうし今日は俺と初対面という体で話を進めるのかもしれない。

確かに俺との繋がりが周囲に漏れて万が一百城の好感度やらに響いたら大変だ。

『……あれ、驚かないの……?』

不思議そうにこちらを覗き込む景。

景はどうやら俺が百城の登場で驚くものだと予想していたらしい。まあ普通の奴ならそうなのだろうが、俺からしてみればもう慣れたどころの話ではない。

それに俺は面の皮が厚いからな。ちよつとやそつとでは周りに考えていることがバレない。

昔から落ち着いている風に振る舞っていたらそれが定着してしまったが、その結果心理戦に強くなりトランプゲームなどで優位に立てる。結構便利なのだ、これ。

とりあえず景には驚きすぎてつい固まってしまったのだと言う。理由としてどうなんだと疑問が残るがこれくらいしか思いつかなかった。

景も「そうだったのね」と言ってお納得している様子だし問題ない。

『知っていると思うけど、百城千世子ちゃんよ！ 仲良くなったの！』

俺は頭を下げてこんばんはと言う。

百城に対してこういう言葉遣いをするのは殆どないので何だか変な感覚だ。

『……夜風さんと仲良いんだね』

そう俺に尋ねる百城。あ、そういえば百城に景のことを言うのをすっかり忘れていた。

だから百城は俺が景とそれなりに仲が良いことを知らないのか。

とりあえず百城には普通に仲は良いと返答する。俺たちの関係を一言で表すなら友人だろう。

『夜風さんのことは下の名前で呼んでるんだ。ついでに私のことも千世子呼びにしてみない？』

あれ、どうやら初対面のふりはしないらしい。

というか呼び方なんてどうでも良いだろう。それによって何か変わるわけでもない。ずっと百城呼びなのだから変える必要は特に感じられないな。

あと、この会話によって周囲に俺と百城の繋がりが知られたら色々と面倒くさそうだが別に構わないのだろうか。主に百城のキャリア的な意味で。

『私の周りにはね、夜風さん以外誰もいないよ。他の人とちよつと離れたところで話しているから何も問題は無いの』

なるほど、百城自身に問題がないなら俺はそれで構わない。

ところで、景が目をぱちくりさせているのが気になる。そりゃまあ、あの百城千世子と知り合いだったなんて知ったらそうなるか。今までそんなことを一度も言っていなかったのだから。

『ち、千世子ちゃんとお友達だったの!?!』

俺は景に頷くことで肯定する。

やはり景は随分驚いているらしい。

『……千世子ちゃん、この人と仲良いの?』

『昔からの知り合いなの。仲は良いよ』

『ど、どれくらい?』

『……お友達の中では一番?』



百城と景の会話を画面越しに見つつ。二人の距離は何だか近いな、と思う。

景が風邪をひいた原因であるクライマックスシーンの撮影日は、およそ一週間程前。それから二人の関係性は一気に縮まつたらしいのだが、短期間でかなり仲良くなつたらしい。

何はともあれ、仲がいいのは良いことだ。歳の近い役者同士、これから色々と付き合いはあるだろうから。

画面を見る限り、俺という共通の話題で盛り上がっているらしい。

『ち、千世子ちゃんと付き合ってるの?』

いきなり身を乗り出すようにカメラの大部分に映り込んだ景がそう言う。

焦つたように何を聞くかと思えば、そんなことか。

俺と百城は昔からの友人であり、そんな関係では無いのだ。俺はそれを景に説明した。

いやまあ、小学生くらいの頃は距離感近かつたりしたせいで「コイツ俺のこと好きなんじゃない」と疑つたこともあつたが、今日まで友人関係だつたことを考えれば俺の勘違いであつたことは明白だ。

『よ、よかつたわ!』

景はスマホの画面越しで、俺の話聞いてそう言った。

……ん？ 良かったとはどういうことだろうか。何だか引つかかる発言だ。

まあ景はおつちよこちよいだし何かと言い間違えたのだろう。だから特に言及はない。

『……………』

……何だか百城が無言で俺を見つめてくるんだが。何か言いたいことがあるのだろうか。

あと何というか……寒い？ もしかしたら風邪をひいたかもしれない。最近生活リズムが狂っていたし、疲れも溜まっている。風呂に入りながら思考が暴走したことも含めて、やはり今日は早く寝た方がいいかもしれない。

『大丈夫？』

そう聞いてくる百城には、問題ないと返答する。例えば俺が風邪をひいていても、電話越しの彼女らに感染する訳ではないのだし、電話を続けるくらいは問題ない。

そういうえばこの後アキラ君にも連絡しようと思っていたのだが、もし近くにいるのなら今ここで一緒に話してしまった方が楽だろう。

別に今日は男同士の女人禁制な話をするつもりはないし、「お疲れ様」と言うくらいだ。それに女子に聞かれない方が良い話と言っても、下ネタとかじゃない。

彼は下ネタが得意でないことを俺は知っているので、そういう話題を振ることはな

い。

彼と話すのは筋トレなど、女子の前では地味に話題に出し辛いことだ。

それを百城に伝えたら、百城は画面の外に目線を向けると手招きしながらアキラ君のことを呼ぶ。十秒くらいして、アキラ君はやって来た。アキラ君は既に俺と百城が知り合いだと知っているのです、この場に呼んでも問題は無い。

『や、やあ……』

こちらに向かつて笑いながら挨拶を交わすアキラ君だが、何やら笑顔がぎこちないな。相変わらずイケメンなのは変わらないが。やはりアキラ君といえど、一ヶ月の撮影は疲れるのだろう。

あまり長い間引き留めるのも悪いのでさっさと用件だけ伝えるか。

俺はアキラ君に撮影お疲れ様と言った。

『あ、あぁ……』

それにしても、百城と景とアキラ君が並んでいると本当に画になるな。

やはり芸能人というのは顔面偏差値が高すぎる。

それにしても汗をかいているが……向こうの気候は亜熱帯だし、この時間は湿度も相まって随分暑いのだろう。熱中症には気をつけるよ、と付け足しておいた。

テーブルに置かれた幾つもの皿。

白飯に味噌汁、そして焼き鮭にイクラ。あとよく分からない佃煮にホタテの刺身やイカの塩辛まで。その他にも色々ある。

この間、デスアイランドの撮影が終わったばかりの百城に「お土産買いすぎたから一緒に食べよう」と言われ、その約束通り百城の家に来たのだが流石に驚いた。

食卓に並ぶ品数は予想の二倍くらい多かった。

因みにいつもこの部屋にあるガラス製の値段が高そうな机だと小さいので、去年辺りに俺が持ち込んだ折り畳み式のテーブルを二つ合わせて使っている。結構面積が広くて使いやすい。

お椀いっぱいイクラとか初めて見たぞ。

何か手伝うと言ったら、百城に座っててと言われたので俺は今席についているが、まだ台所で真空パックされた冷凍品を湯煎していたりするのを見るに、まだまだあるのだ

ろう。

確かに、これは助っ人が必要な量だ。百城一人で食うとなると、かなりの時間が必要だろう。

その間冷蔵庫、冷凍庫が占領されているのだろうし早急な解決が必要な訳だ。

これ、全部でいくらするのだろうか。百城くらい金銭的に余裕がある人間が買うものは、やはり値段もそれなりに高いだろう。

……本当に俺が腹に収めていいのだろうか、何だか変な汗が出てきたぞ。

やっぱりアレか、ストレスの溜まった女性は買い物で発散すると聞く。百城にもその兆候が出始めているのかもしれない。

芸能界はやはり色々と大変なのだろう。俺には想像もつかないが。

そーいや最近俳優が薬物やったということ先週のニュースに出てたな。まあそれだけなら特に珍しいことではないが、確か彼は百城と去年辺りに共演してた記憶が。

……いや、別に何でもない。とりあえず、飯食い終わったら肩とか揉んでやろう。

そんなことを考えていたら百城が来た。底が深めの皿を両手で持っている。

見たところ具の無いカレーかビーフシチューの様だが何だろうか。

「熊のカレーだって」

成る程、熊か。実に北海道らしくて面白い。

北海道が舞台の某漫画で勃起おじさんが熊の心臓食つてたのを見て気になっていたのだ。

一通り準備が終わつた百城も俺の対面に座り、手を合わせた。そして、「いただきます」と一言。

背筋をピンと伸ばし、脚もきちんとかくつつけている。オフでもこういうところの気を抜かないのは流石だ。それを目の前の本人に言う。

「身近に姿勢がいい人がいたからね。小さい頃から真似してたら癖になつちやつた」「あなただよ」と。笑いながらそう言つて百城は俺を見た。

え、そんな話今日初めて知つたんだが。

テレビで食レポとかする際、こうした所作の丁寧さとか育ちの良さみたいなものを目にした視聴者は好感が上がることだろう。

まあそれはそれとして、適当に目の前に出されたものを食う。

うん、美味いとしか感想が出てこない。だつて仕方ない、美味いんだから。

「美味しいね」

と百城は言う。俺もそれに頷いた。口の中にもものが入っているからその間には喋らない。

それから、飲み食いしながら色々と話をした。

主な話題に上がるのは、デスアイランドの撮影。ついこの間までロケをしていたのだから、話題に出しやすい。

誰と話しただとか、インスタを撮っただとか、ホテルのご飯が美味しかっただとか。そんな、他愛もない会話だ。

その流れで、俺は景のことを聞いてみることにした。景はどうだった、と。

この間一緒に電話をしていたし、仲はいいのだろう。

「夜風さんはね、凄かったよ」

百城がそう言うということは、やはり景の演技というのはすごいのだろう。友人が褒められているのを聞き、俺も頬が緩む。

映画にも出演したことだし、どうやら景の役者人生の滑り出しは順調らしい。

腕を組んでうんうん頷き、そして視線を元に戻す。そこにはじーつと俺を見る百城が。……どうかしたのだろうか？

「そういえばさ」

百城は続ける。

「夜風さんとどれくらい仲良いの？」

どれくらい。そう聞かれると返答に困るが、世間一般的な友人関係の域を出ることはないだろう。普通に友人だ。

たまに一緒に飯食って、たまに買い物を手伝う。その程度である。あ、でも誕プレとかあげるけど別に付き合ってたなどない。

「……ふうん」

俺の返事を聞いた百城はそう一言。俺の返答に特に感想は無いようで、そのままこの話題は終わった。

飯を食って、色々話して、また飯を食ってまた話す。その繰り返し。いつも家で食うと食事に十分もかからないので、こんなにゆっくり食うのは久しぶりだ。景の家で食事を頂く時も、そこまで時間はかからないで終わる。

温かいものは先に平らげて、残っているのは元々冷めているものばかりなのでゆっくりで構わない。

「……前さ、デスアイランド公開したら一緒に観にいかうって言ったよね」

百城はふとそんなことを言い出した。勿論覚えているとも。

俺はアキラ君や景からも言われており、全員の指定した日が公開初日とかだったら被ってしまうかもしれないが、そうになったら皆で観に行けばいいだろう。

皆でわいわいと映画を観る、楽しそうじゃないか。いや、上映中は喋らないけど。

そして当然そうなったら事前に一緒でも良いのか三人に確認はするが。

まだいつ観にいくのか決まったわけではないのだから、そうならない可能性もある。



丁度今回の撮影で景と百城が仲良くなったことだし。親睦を深めるのに良いかもしれない。

そんなことを考えていた。

「クライマックスは絶対寝ちゃダメだよ」

クライマックス……確か景が風邪をひいたのもそこだったはず。

景は水に流されたと言っていたが、そのシーンの迫力が凄いつてことなのだろうか？

いやでも、今までに百城がラストシーンは観てと強調することなんて無かったし、演出が激しいシーンなど幾らでもあったから違うかも。要するによく分からない。

「まあ、観てからのお楽しみかな。ヒントはね、夜風さんのおかげってこと」

……改めてヒントを交えて百城が何について言っているのか考えてみてもよく分からないな。

カメラの前では取られることのない百城の仮面が剥がれたとかか？

いや、百城に限って素の顔をカメラに晒すという状況が思い浮かばないし……まあいや、考えるのはよそう。

俺は近くにあった、赤く輝くイクラに手を伸ばした。

「あ、あ、彼女が欲しい！」

当初はビールがなみなみ注がれていたものの、今では半分程に減ったジョッキを片手に机に突っ伏して唸る目の前の男。

車に機材とか諸々を詰め込んで演劇やら何やらの現場に運ぶバイト先での先輩で、俺は彼を亀さんと呼んでいる。本名は青田亀太郎というらしいが、フルネームで呼んだことはない。

眼鏡と口元のホクロがぱつと見の特徴。あとは茶髪だろうか。染めているのかは知らん。

同じバイト先の人で、色々と面倒見てくれたりして良い人なのだ。偶に絡みが面倒くさいが。気の良い近所の兄ちゃんキャラ、とでも言うべきか。

亀さんと会うのは、週に二、三回。

今日はバイトが終わる時間が遅かったので一緒に夕飯を食うことになった。亀さんが奢ってくれるらしい。もう時刻は午後九時半を過ぎている。

適当に入った大衆食堂の座敷の隅っこが今日の俺たちの席だ。

周りには会社帰りと思われるサラリーマンだったりで賑わっており、がやがやと賑やか。当然俺は未成年なので酒は飲まない。代わりにコーラを飲んでいる。

以前のバイトで、亀さんと昼飯を一緒に食う時黙っていちやあ気まずいので何か話題を出さなきゃと考え、丁度百城や景が知り合いにいたので「最近役者について興味を持っていて」と言ってみたのだが、彼はその話題に食いついた。何と亀さんは舞台役者であるらしい。

そこから一気に仲良くなったのだ。

有名どころでは『ライオンキング』だったり『アラジン』、あとは『オペラ座の怪人』などだろうか。それらを舞台上で演じるのが劇団の人々。

メディアへの露出が多い、百城をはじめとした映画やドラマに出演する俳優たちと比べれば知名度は落ちるかもしれないが、俺はどちらも好きである。

実際熱心なファンは多い。

まあ俺は基本的に広く浅く派だが。

あと、亀さんの所属する劇団の名前は『劇団天球』というらしい。

あまり知識のない俺でも知っている有名な劇団だ。

巖裕次郎。

日本で舞台については知らなくても、巖裕次郎を知っているという人間は多いのではないだろうか。

スキンヘッドで彫りの深い顔立ちの彼は渋くてカッコいい。酒と煙草が似合いそうな、ああいう歳の取り方を俺もしてみたいものだ。

かなり高齢な筈だが今も活動し続けている、日本を代表する演出家。色々な芸能人が彼と関わりを持っていろいろらしい。

テレビやネットニュースによると、最近新しい舞台の準備をしているらしいが、何だったっけ。

ああ、そうだ、『銀河鉄道の夜』だ。宮沢賢治の。

主な登場人物はカムパネルラとジョバンニだったか。

まだ俺が保育園にいた頃、保母さんから読み聞かせをしてもらった時に悲しくなっただけ泣いてしまったことを覚えている。

その劇団天球にいますと考えると亀さんはすごいと思う。

あの巖裕次郎の下で演技をしているという事は、亀さんの実力はかなりのものなのだろう。

あと、亀さんのサインは既にゲットしている。「仕方ねーな」と口では言いつつ書いている時嬉しそうだったのが印象的だった。

「……世の中って不公平だと思わないか？」

しみじみとした口調でそう呟く亀さん。

「特にお前とか！」

そう言つてビシツ、と俺に向かって人差し指を向ける。

別にこれはガチ切れとかではなく、男子同士のノリでよくあるやつだ。

だから特に重く考える必要はない。会う度にこうしたやり取りがある気がする。

「ちよーつとだけ良い大学に通つてて頭が良くてスポーツができて顔が良くて気遣いができるからつて調子乗るなよ！」

めつちや早口で言いたいことを口にした亀さん。「チクシヨウ」と言いながら残りのビールを勢い良く呷る。

どうやら結構酔つてきたらしい。べろんべろんになると困るので、あまり早く飲まない方が良いですよとっておく。

ちなみに亀さん目線だと俺は女を取つ替え引つ替えしているクソヤリチン野郎になつているらしい。どうしてそうなつた。

前に亀さんから「お前って今彼女いる？」と聞かれた際、強がりめつちやいますよと答えてしまったのが原因かもしれない。

男は見栄を張りたい生き物だから仕方なかった。正直反省している。

それから一ヶ月ほど経ったが、その間も色々あつて亀さんの抱く俺という人間像は固定された。

今更チエリーですなんて言えるわけがない。もし勘違いですよと言った日にはずっとイジられ続けるだろう。そうしたら多分あだ名は童貞王だ。

そんな時、店に新たに客が入ってくる。前髪ぱつっん、明るい髪色のツインテールで丸眼鏡をかけた女の人。

亀さんはジョッキに口を付けつつ入り口を向くと、その人物を確認した。

そして右手で招く。今日は亀さんの他に、丁度バイトが終わったところだという同じ劇団の人も来ると聞いていた。彼女がそうなのだろう。

「あ、七生。ここだここ！」

亀さんが七生と呼んだ人は俺を見て一言。

「え、若っ。いくつ？」

俺は十九ですと答える。

七生さんは俺の隣に座った。俺の方が出入口側なのだ。

「へえ、大学生？」

俺は頷いた。

俺の顔をまじまじと見つめて、亀さんの方を向く七生さん。

『俺の後輩がいる』って言われたからどんなのか気になってただけど、アンタ未成年に酒飲ませてないでしょうね」

「ハア!? 俺がそんなことする訳ないだろ! 人を勝手に犯罪者にすんな!」

二人の会話は荒っぽい口調で行われているが、逆に言えばそれでも問題ない関係ということだろう。

同じ劇団所属ということだし、結構長い付き合いがあるのかもしれない。喧嘩するほど仲が良い、というやつか。

「あ、私もビール」と店員に伝えた七生さんに俺は話しかけた。

せっかく本職の人がいるのだし、亀さんも交えて舞台について色々聞いてみたいことがたくさんあるのだ。



「ねえ、私眠くなつてきちやつた……」

酒に酔い頬が紅潮した顔で、俺に寄りかかってくる七生さん。腕も絡めてきており、力を込めなければ抜け出せそうにない。

眼鏡を外し、髪を解いた姿は何かというか、エロい。あといい匂いがする。

亀さんとは正反対に真面目な印象を当初は受けていたのだが、酒に酔ったら人が変わった。この人めつちや酒癖が悪い。

そんな俺たちに、目の前に座っている亀さんはスマホのカメラを向けている。撮るなと言つても、酔っているようで聞こえていない。亀さんはベロンベロンである。

「ハハハハ！ 題名はそうだな、『大学生にお持ち帰りされる七生』！ よし、今度昼飯の時皆に見せてやろう!!」

……二人の酔っ払いに挟まれて何だか頭が痛くなってきた。

ここまでで出来上がっているのを見れば、もう何時間も飲んでるように思われるかもしれないが、七生さんが合流してまだ一時間経つてない。

俺と亀さんで店に入って来たのを含めても一時間半程度だ。

店の中には他にも客がおり、結構賑やかなので俺たちが騒いでいても特に目立ちはない。



だからと言って服の中に手を潜り込ませるのはどうなのだろう。結構グイグイくるなこの人。

「やだすごい筋肉！」

何だか喜んでゐる七生さんに、ゲラゲラ笑っている亀さん。

まあなんだかんだ言つて、賑やかなのは嫌いではないから結構楽しかったりする。

あと、七生さんは舌ピアスをあけてた。実は元ヤンだったりするのか……？

その後三人で割り勘しようとしたのだが、俺は酒飲んでないし千円分位しか食つてないからと二人が払ってくれた。何ともありがたい話である。